松山東雲女子大学

人文科学部　心理子ども学科

卒 業 研 究 抄 録

2019年度

		ｾﾞﾐNo
指導教員	出原　大	1
指導教員	泉　浩徳	2
指導教員	影浦　紀子	3
指導教員	小池　美知子	4
指導教員	小西　敏雄	5
指導教員	西村　浩子	6
指導教員	増本　達彦	7
指導教員	三宅　英典	8
指導教員	小野　紳一郎	9
指導教員	門田・リンダK	10
指導教員	佐伯　三麻子	11
指導教員	白井　絵里子	12
指導教員	西川　勝利	13
指導教員	野方　円	14
指導教員	政本　香	15
指導教員	森　日出樹	16
指導教員	善本　裕子	17

氏　名	荒谷　百華	学籍番号	J016003	ゼミ№	1
テーマ	保育雑誌のデザイン性からみる幼児教育者の趣向についての考察				

1．研究の動機

実習に行く際、保育のノウハウを知るにあたりいろいろな保育雑誌を手に取ってみると、キャラクターものの絵柄や様々な色や、いわゆる“かわいい”と思われるものがたくさん使われており、視覚的強い印象を受けた。保育雑誌は保育者（大人）を対象とした雑誌であるのに、なぜこういったものが多いのかということに疑問を感じ、本研究のテーマと設定することにした。

2．研究方法

現在出版されている、幼児教育と初等教育の代表的な雑誌をそれぞれ二つ取り上げ絵や写真、文字数を数えデータ化したり、幼稚園教育要領解説から読み取れることを考察する。また、保育者から保育雑誌に関すること、及び保育雑誌と保育との関連に関して簡易なインタビューを行い、その回答をもとに分析し、考察を行う。

3．結論

筆者は、本研究をする中で「保育者の趣向は保育雑誌のデザインから影響されている」と仮定し、この研究を進めてきた。保育現場に多様に扱われているキャラクターは保育雑誌で使用されているものが多いと感じていることが、改めて本研究で認識することができた。しかしながら、日常生活の中で使われているキャラクターものは子どもが普段見ているアニメや絵本のキャラクターで使われている場合が多く、視覚的に安心でき、なおかつ幼児同士での会話の中で自分を表現するきっかけともなる。よって筆者は、キャラクターと実際にあるリアルなものを使用するバランス加減を見直すことが必要であると考える。現在多くの園では、かわいいキャラクターものの使用が多いように感じられる（この点においては十分な調査とデータを得ることができていない）。方法として、キャラクターものを必要とされているところではそれらを使用し、またリアルなもので表現するほうが望ましい場合はそちらを使用するといった、二つの表現方法が保育室の中で共存することで子どものより良い発達を促すことができるのではないかと本研究の中で見出すことができた。

4．参考文献

・豊泉尚美　1995　幼児教育におけるデザイン活動としての「壁面構成」一幼稚園・保育園の壁面構成製作活動を中心として

・武内裕明　2009　保育環境におけるかわいいものの選択理由：保育者へのインタビューを通じて

・木内菜保子　2004　保育の環境構成を目的とした造形制作に関する一考察

氏　名	佐々木　桃花	学籍番号	J016019	ゼミNo.	1
テーマ	保育実践におけるアコースティックピアノと デジタルピアノの効用について				

１．研究の動機

筆者は、小さい時からピアノを習っており、この小さい時から親しんでいるアコースティックピアノ（生ピアノの意味）が好きである。アコースティックピアノは、保育実践の中でも活用されており、子どもたちの豊かな表現を生み出す存在として非常に重要であると考えてきた。

しかしながら、近頃はデジタルピアノの普及が進んでいる。なぜ、アコースティックピアノではなくデジタルピアノなのか。保育にはどちらを用いるといいのだろうか。そのことを疑問に思った私はこの論文を書くことにした。

２．研究方法

文献作業によりアコースティックピアノ、デジタルピアノそれぞれを用いた保育現場の違いへの特徴を把握する。またアコースティックピアノ、デジタルピアノの歴史からの考察を行う。そして、実際に保育実践の場にて行われていた音楽活動の事例などから考察をする。

３．結論

保育の中で音楽は子どもの心を豊かにするものであると考えている。音楽の楽しさを伝えるのに一番大切なことは保育者自身が楽しんで音楽をすることである。
研究を進める中で、アコースティックピアノ、デジタルピアノにはメリット、デメリットがあることが分かった。私はアコースティックピアノのあたたかみのある音を子どもたちに聞いてほしいと思っており、デジタルピアノに悲観的に見ていたがそのイメージは研究をしていく中で変わっていった。デジタルピアノも近年はアコースティックピアノと変わらない素晴らしい音質になっている。またアコースティックピアノではできない、録音機能や音質変更の機能を使うことができ、さらに楽しい音楽空間・メディア的活用がなされていることも分かった。

本研究のより今後、アコースティックピアノ、デジタルピアノの双方のメリットを活かせるような保育ができれば、さらに良い音楽環境が作れるのではないか考えることができ、多様な音楽観を持つこともできた。

４．参考文献

・出原大　1992 1993 1995　保育実践現場における電子楽器の効用、保育実践現場における電子楽器の効用Ⅱ、保育実践現場における電子楽器の効用Ⅲ　聖和大学論集

・田中健次　1990　現場の先生のための電子楽器活用法≪より効果的な音楽科教育を目指して≫　龍吟社

・文部科学省　2018　幼稚園教育要領解説　フレーベル館

氏　名	白形　優衣	学籍番号	J016022	ゼミ№	1
テーマ	幼少期における植物あそびの有効性				

1．研究の動機

最近の子どもたちの遊んでいる様子を見ていると、デジタルのメディアを使って遊んでいる姿がよく見られ、草原や広場、公園などで子どもたちが自然物に触れ、思う存分五感を使って子どもらしく（幼児期の心が動く時期らしく）遊ぶ姿はほとんど見られなくなったように思う。筆者はこの子どもの自然離れが進んでいる中、自然物の中でも身近にふれることができる植物あそびに着目し、五感を使い心・脳を発達させることの意味を見出すために本研究をすることに決めた。

2.研究の方法

文献作業により植物あそびについて調べ、五感の中で何が育まれているのか、分析していく。そして、保育実践の中で子どもたちが植物あそびをすることで五感の何を使い成長・発達していくかを実践記録から考察していく。実践記録や文献をもとに、植物あそびを通して、子どもに何が育まれているのか、生きる力に繋がる要素等について分析・考察、整理を行っていく。

3.結論

幼少期に植物を使って遊ぶことは、五感を多く使い、脳・心を育て、生きる力の源泉を育むことが分かった。そして、感覚器の鋭敏な幼少期に自然や植物に触れ、創意工夫を繰り返すことが感情を豊かにし、多様で主体的な考え方の基礎作りにもなっていることも確認できた。植物の使い方は、元来の玩具のように使い方が決まっておらず、様々な形に変化し多様な遊び方をすることが出来る。固定概念を持たずに自由に想像を膨らませながら遊ぶことが出来ることが植物あそびの魅力であることも再確認した。しかし、現代の社会では植物に気軽に触れることができる場所が少なくなってきたり、大人が自然から遠ざかってきたりしている現実がある。

そこで、筆者は、子どもが植物とより密接に過ごすことができるように戸外に出る時間を増やす、場所の提供などが大切になってくるのだと感じた。来年から保育者になるため、本研究で得た植物あそびの知識を実際の現場で活かせるようになり、子どもがより植物に親しみを持ってもらえるように工夫をしていきたいと考えている。

4.参考文献

・湊秋作　山田卓三　1998)「生活科における自然遊びの役割―自然との理解と環境教育の基盤を形成する自然遊び―」　日本教科教育学会誌第 21 巻第 2 号
・出原大（2007)「幼児教育における植物環境の考察―子どもの成長と植物環境との関係の基礎的研究―」聖和大学大学院修士論文

氏　名	日野　里咲	学籍番号	J016041	ゼミ№.	1
テーマ	園庭・自然環境の基礎的研究　－園庭植物環境のあり方について－				

1．研究の動機

筆者は幼少の頃、園が保有する山の中の遊び場で遊んだり、川へ泳ぎに行ったりと、自然の中で遊ぶ機会が多くあった。今日の子どもたちは、デジタル機器の普及によって屋内で遊ぶ機会が増えているのではないかと筆者は感じ、また、多くの公園や保育園・幼稚園の園庭は固定遊具が代表的であり、幼少期の遊びはこのような限定された遊びで良いのかとの疑問を持った。そこで、本大学の講義で、自然植物の持つ力や魅力を知り、幼児教育における自然教育の重要性や、園庭植物環境の在り方についてさらに思考を深めたいと思い、本研究のテーマ設定を行った。

2．研究方法

幼稚園教育要領解説書や先行研究より、子どもの成長、発達における自然環境に触れた直接体験の重要性や園庭植物環境のあり方について考察を進める。また、園庭植物環境の豊かな園を訪問し、観察、インタビュー等からも実践的側面の考察を行った。

3．結論

数多くの論文や著書により、筆者自身が朧気に思っていた植物環境の重要性が確認できたと同時に、幼児期における自然体験の重要性についても様真座間な知見を知ることができた。

自然植物環境に触れるという直接体験は、子どもの成長や発達をより豊かなものへと導く。子どもたちは自然環境の中で、五感をフル活用しており、その五感を十分に活用した体験によって、子どもの感性や思考力、表現力、好奇心、探求心、道徳心など、人として生きていく上で必要な力を育むことが分かった。そのことを踏まえて、実践の場の調査や園庭環境に関する文献調査を進める中で、園庭植物環境のあり方が見えてきた。園庭植物環境は、ただ単に植物が存在していれば良いのではない。子どもたちが五感を十分に活用でき、植物の効用を活かすことのできる環境であることが大切である。ある幼稚園では、地面に起伏をつけたり、季節による変化を感じられる植物環境をつくったりと、本物の森により近づけられた園庭植物環境も見られた。さらに、研究を進めていく中で、子どもの自然離れが指摘される今、保育者や教育者の植物への関わりも見直す必要があることが明らかとなった。子どもたちが豊かで有意義な自然体験を得るために、保育者や教育者が自然環境に関心を持ち、自然のもつ力や魅力を理解した上で自然教育や自然植物環境の豊かな設定・整備を行うことが今後の保育・教育現場には期待されると考える。

氏　名	堀野未来	学籍番号	J016043	ゼミ№.	1
テーマ	虐待事例から考える保護者支援のあり方				

１．研究の動機

近年、児童虐待についてのニュースをよく耳にするようになった。児童虐待の様々な事例を大学の講義で学んでいるうちに虐待が起こる原因・経緯について疑問に思うことが多々あった。そこで講義で触れた内容のほかにも自分自身で調べていく中、その児童の保護者に共通点があることにも気付いた。虐待を行っている保護者は、その保護者自身も虐待を受けていたことが多いように思われた。虐待白書によると保護者も虐待を受けてきた例が散見される。これらから、児童虐待の現状を変えるために保護者への支援が必要だと考えるため、本研究のテーマとした。

２．研究方法

児童虐待の現状から一番見つけ出しにくいものを考察する。そして、過去の虐待事例について、年代ごと（1970、1980、1990、2000、2010）の特徴的な事例を挙げ、そして各年代の児童虐待の変化をまとめる。各児童虐待の共通点や保護者の置かれた環境などを文献作業により行う。また、現在必要とされている保護者支援の考察、実際に行われている保護者支援についてまとめ、さらに教育者の意見を聞きまとめの参考とする。終章は、本研究の総合的考察を行い、今後の研究および実践課題を述べる。

３．結論

本研究では児童虐待における保護者支援のあり方について研究を進めてきた。児童虐待の現状を改善するために保護者支援が必要なのか考察を行うため、1970年代から2010年代までの過去の虐待事例を挙げ、考察を行った。その事例から、過去に虐待を受けた子どもが大人になり、今度はわが子に対して虐待を行うようになること、「虐待の世代間連鎖」が起きていることが分かった。そのため、児童虐待の現状を変えるためには子どものケアだけでは虐待の再発は防げないだろうと推察された。保護者への手厚い支援こそが重要な手段と分かる。また、児童虐待は時代によってその傾向が変化していることが分かる。社会的な関心が高まった現代だからこそできる支援があるはずだ。そして、子どもにとって保護者の次に身近な存在である保育者の立場から、何ができるか考える必要がある。日常の中での子どもの可愛さを伝え、子育ての大変さを保護者と共有していくことが大切であり、保護者と共に子どもを育てていく意味を本研究によって見出すことができた。

４．参考文献

・ミネルヴァ書房　2019　発達 157　虐待対応のこれから　等

氏　名	松本　琴奈	学籍番号	J016046	ゼミNo.	1
テーマ	幼児教育における有毒植物の扱いについての基礎的研究				

１．研究の動機

大学の講義で有毒植物について学んだ際、有毒であることを知らず身近に感じていた有毒植物が多々あることを知った。そして、有毒であることを知らなかったり食べられる植物に似ていたりする理由で誤食し、身に危険が及ぶという事例があることを聞き、保育実践の場において子どもが有毒植物に触れて身に危険が及ぶことを防ぎたいと思い、この研究テーマに設定した。

２．研究方法

文献作業により、身近な有毒植物を調べ毒がある部位・成分・誤食した時に起こる症状等の特徴を理解し、実際に起きた誤食・被災事例から分かる危険性について把握をする。そして、保育実践の場の周辺にある有毒植物の観察を行い、その有毒植物に対する知識意識の実態について、保育者に対する簡易なインタビューによって調査・考察を行う。

３．結論

身近にある有毒植物について、自分自身有毒であることを知らない植物が多くあることを実感し、実際に起こっている有毒植物の誤食・被災事例がなくならない現状があることを知った。保育実践の場である保育所・幼稚園に調査に行くと、有毒植物についての園内研修を受けている園と、有毒植物についての資料を常備している園と、それらのどちらも実施していない園の有毒植物に対しての知識・意識の在り方に違いが表れた。この調査から、園内研修と資料の常備の有効性が分かった。しかし、園内研修を受けていても知識が深くはない。また調べる中で、有毒成分があると記載している著書と有毒成分については記載していない著書もあったため、この有毒植物の曖昧さも世間に有毒植物の知識が広まらない原因の一つであると考えられた。子どもの安全安心な生活を守るためには、有毒植物についての知識を身に付けることが大切である。しかし、有毒植物は危険だからといって一切触れないようにするのではなく、どこまでであれば近づいてもいいのか、環境の設定等の正しい知識・感覚を持って、子どもが植物に触れる機会を減らすことなく、植物と触れ合う大切さを子どもに伝える必要がある。そのため、今後保育士の学びの一環として、有毒植物についての学びを必修としていくことを提案する。

４．参考文献

・学研　2016　自然界の危険 600 種　有害生物図鑑　危険・有毒生物
・増田和夫　2006　自分で採れる　薬になる植物図鑑　柏書房
・中井将善　2003　気をつけよう！毒草 100 種　金園社

氏　名	水上　莉奈	学籍番号	J016050	ゼミNo.	1
テーマ	幼児が好むボール遊びの一考察				

1.研究の動機

近年の子どもたちの様子から、子どもたちがボール遊びなどの運動遊びをしている姿が急激に減少しているように思われた。その中でも遊び場の減少に伴い、運動能力の低下、子どものボールに触れる機会が減少してきているのだろう。このように感じた筆者は、幼少期のうちにボール遊びを経験することによりいろいろな力が身に付くと考えており、幼児期のボール遊びの意義を明らかにしたかった為、本研究をテーマとした。

2.研究方法

保育におけるボール遊びについて文献より考察を行い、また、保育実践の事例（近隣の保育園、幼稚園、認定こども園見学における事例・エピソードより）をもとに現在の子どもたちのボール遊びの考察をする。また近隣の公園等の、ボール遊びのできる環境についても現状を調査する。その他、現在のボール遊びの位置づけや多様なボール遊びの意義についてまとめていきボール遊びの総合的な考察を行う。

3.結論

本研究をするにあたり大きく第一章ではボール遊びの種類の変化を調べ、第二章では子どもの遊ぶ環境の減少と現在のボール遊びの現状について、第三章では実践から見えてきた事例をもとに考察を行い、運動能力の低下やボール遊びの重要性について再確認することができた。

幼少期の子どもはボール遊びを通してコミュニケーション能力や、集中力、忍耐力が身に付き、運動機能を使うことにより健康にも繋がり、精神的な面と肉体的な面の両方が得られるようになる。このことから幼少のうちにボール遊びを経験することの重要性がわかる。

筆者は本研究をするにあたり、ボール遊びや運動遊びをする機会を増やす方策が必要だと考えている。本研究にて、子どもが有意義にボール遊びを行うほどの環境がないことがわかり、そこで保育園や幼稚園、認定こども園が、遊び場を開放したり、空き地などを有効利用したりすることが重要だと思わされた。またそういった環境を開放することで、子育て支援や市町村との協力が必要になってくるとの考えも見出された。子どものボール遊びの環境作りやボール遊び、運動遊びの向上のためにもこれからの実践で子どもがボールに触れる機会を増やす工夫を見つけ提案し、今後も考察を行いながら継続研究していきたいと思う。

氏　名	山本雅	学籍番号	J016057	ゼミNo.	1
テーマ	幼児教育においてよく歌われる「静かなゆったりとしたうた」の意義について				

1．研究の動機

子どもは保育の中でうたに親しむ場面が多くある。筆者は、子どもが好むうたは明るく、面白く、軽快なうたが多いと考えていた。例えばおもちゃのチャチャチャのようなリズムが繰り返しで覚えやすく、「チャ」のところで手を叩き楽しめるうたや、忍たま乱太郎やアンパンマンなどテレビアニメで使われているみんなが歌ううたをイメージしていた。しかし、2018年6月に経験した保育園実習では5歳児が「にじ」という曲をしっとりと歌い上げていたことから、子どもは明るく、軽快なリズムのうただけでなく、静かなゆったりとしたうたも好きだということに気付いた。そのため、筆者はこの研究の中で幼児教育における静かなゆったりとしたうたの意義について追究したいと考えた。

2．研究方法

第一章では、文献等より子どもたちが保育実践の場にてよく歌ううたの定義づけ、分類等を行う。さらに、保育実践の場よりよく歌われているうたをリスト化し、元気なうたと静かなゆったりとしたうたに分類する。そして、どのような静かなゆったりとしたうたが扱われているかを把握する。第二章では、実践事例から、実際の子どもの心の動きを捉えて考察をする。第三章では、幼児音楽家・クニ河内氏にインタビュー内容について考察する。終章では、各章での考察を踏まえて、総合的な考察を行う。

3．結論

明るい元気でリズミックなうただけではなく、静かなゆったりとしたうたがあることで音楽を楽しむことはもちろん、情感深くゆったりとした雰囲気を味わったり、歌詞を味わったり、しているのだと気付いた。また、元気なうただけでなく静かなゆったりとしたうたでも5領域にある育ちを感じることができた。また、クニ河内さんからうたができた経緯を聞いて子どもの頃の穏やかで静かに過ごしてきた経験と、様々なジャンルの曲に親しんでいたことで、静かなゆったりとしたうたを創り上げたと聞いたことが印象に残った。筆者も改めて子どもにとって豊かな経験を育むためには、明るく活発な時間だけでなく穏やかで静かに過ごす時間も大切にしたいと考えた。以上が本研究の成果であり、今後保育実践の場において豊かな歌唱・音楽表現を子どもたちと楽しんでいきたいと思っている。

4．引用・参考文献

文部科学省　2017　幼稚園教育要領解説

岸井勇雄他　1990　表現Ⅱ音楽的表現

氏　名	青野未来	学籍番号	J016001	ゼミ№.	2
テーマ	「乳幼児対象の絵本がなぜ大人を魅了するのか」に関する研究				

筆者は大学生になり、再び絵本に関わる中で大人になった今だからこそわかる絵本の魅力があるのではないか、と考えた。先行研究において、大人が絵本を読むことについては明確にされていない。迷い悩むような出来事に、ストーリーを重ねたり、主人公になりきったりすることにより、絵本はその一つの方向性を示すものとなっているように考える。

まず、絵本とは何か、定義は明確にされていない。辞書や絵本作家・研究家の定義をまとめると、絵と文章の両方によって表現され、イメージを創り出すものである。絵本という呼称が一般化するのは大正期の終わりごろから昭和の初期にかけてである。子ども向けという暗黙の約束はなく、大人向けの本であった。

次に、絵本にはどのような歴史があるのか調べた。日本における絵本の始まりは、奈良時代に書かれた絵因果経と言われている。江戸時代には印刷技術が発展し、庶民にも読書層が広がった。明治期後半には、子ども対象の絵雑誌や絵本が始まる。終戦後は、現代に続く絵本が多数出版された。

そして、大人が感じている絵本の魅力を知るため、筆者が在籍する大学の学生や教員に質問紙調査を実施した。調査結果より、大人は絵本のイラストとストーリーに魅力を感じており、絵と文章の両方から込められた想いやメッセージを感じ取っていることがわかった。

絵本とは、子どもにとっては人生経験であり、大人にとっては生きる上で大切な、友情や思いやり、個性、愛などを考えさせられるものである。歴史から見ても、子どもが対象とは限らず、大人が読むものとして普及していた時期があったことも明らかになった。今回の研究においては、読む絵本によって楽しみ方や感じ方は様々であるが、大人はイラストやストーリーに込められた、作者の想いやメッセージを感じ取りながら、絵本に親しんでいるという結果が得られた。筆者が考えていたように、自分の経験とストーリーを重ね合わせて、方向性を見出していることも確認できた。

氏　名	浅山　莉奈	学籍番号	j016002	ゼミNo.	2
テーマ	子どもの体験活動の重要性について ～自主企画から子どもの体験活動について考察する～				

1、　研究動機

ボランティア活動を行う中で、子どもたちが保護者から離れ自分の行動を広げたり、年長児がリーダーシップを取れるようになったり、友だちと協力して活動したりする姿を見てきた。これは、子どもたちが自然の中で自由に遊ぶことや新しい人間関係の中で役割を見つける経験をしたからである。このように子どもたちが体験の中で成長する姿がある一方で、体験不足も問題として上がっている。マッチの付け方が分からない、自分に自信がない、新しい友だちとの関わり方が分からない等は、体験不足から生じていると考えた。体験活動の重要性を明らかにするとともに、自身が行った自主企画からも考察を行う。そして、考察を踏まえた上で、体験活動の機会を提供することの大切さについて研究に基づいた自主企画を提案したい。

2、　研究方法

国立青少年教育振興機構の研究結果をもとに研究を行った。また、親の体験活動が子どもに影響されるかを中心に、質問紙調査を幅広い保護者の方に行うことで、親と子を比較した。自主企画では、実際に行ったことを参考に、企画の目的や事後アンケートをもとに考察を行う。

3、　結論

子どもが自然体験、生活・文化体験、社会体験を行うことで、人間関係の構築や「生きる力」、興味・関心等の成長だけでなく、学習意欲の向上にもつながることを明らかにすることができた。体験不足の原因としては、メディアの普及や遊び場の減少だけではなく、兄弟が多いため全員で移動することが大変であるといった家庭内の問題もあることが分かった。子どもたちの「今」のための体験活動ではなく、「将来」への投資として様々な体験活動の貯蓄が必要である。そのため、子どもたちの成長を幼児期、児童期、青年期と区切るのではなく、一過性のあるものとして捉え、一本の「線」として考える。体験活動を行うこと自体は、「点」の活動であるが、自然の中で四季を感じたり、自ら火を起こしたりする体験活動を重ねることでやがて「線」となり、コミュニケーション能力やチャレンジ精神、責任感等が培われていく。そうすることで、思い通りにならないときにも、他方面から考え、上手く対応できるようになる。子どもが成長していく上での「社会を生き抜く力」として体験活動は基礎的な能力を養う上で重要であり、今後もより広い子どもたちに普及してく必要がある。

氏　名	太田　菜月	学籍番号	J016007	ゼミNo.	2
テーマ	「大学生の保育資格に関する意識変遷について」				

本学を入学希望した人はほとんどであったが、中にはほかの大学に入ることができず、本学に入学をした人もいる。入学理由は様々であるがほとんどの人は両方の資格が取得できたからである。

保育士の平均継続年数は 7.6 年である。このことから多くの保育士が離職していることが明らかとなる。最近では、男性保育士もおられるが大部分は女性である。当然、育児・出産・家事、夫の転勤等など離職率が高くなることは考えられる。

このことから他職種に比較して離職率が高いことにはあげられた事情以外のほかにも理由があると思われる。その理由の多くは、賃金をはじめとする待遇、労働環境、労働時間、自分の時間がないなど様々なことが考えられる。

離職防止のために研修支援や同期や同年代との交流などと就業継続を図るための各種助成金の活用促進があげられている。

研修支援では、新人保育士対象研修、保育の質の確保のための研修、研修参加に伴う代替職員の確保、離職防止のための研修等に係る助成金の活用促進が示されている。

低賃金・長時間労働・休暇がとりにくい等のことを根本的に改善されない限り離職率の改善には結びつかないであろう。

保育の質の確保のための研修が取り上げられている保育内容に関する研修は重要であるが、発達障害児や保護者対応等についても具体性のある内容が望まれる。

保育士同士のコミュニケーションや自分自身のコミュニケーション能力を高めることが不可欠である。そのためには園内研修はもとより、外部関係者も交えた情報交換会、そして第3者評価を積極的に受け入れる等、保育の客観化を図っていくことが重要である。

研修や情報交換会は保育をめぐる動向を共有することができ、第3者評価は何が欠けているかを園長をはじめ、全職員が改善意識を高めることができ、保育の質向上につながる。

卒業後の進路では、内定者も未定者も関わらず保育士になりたいと思っている人が多いことが分かった。一般事務や児童館などは少ないことが明らかになった。

内定者の進路の決め手では、全体的に見ると、給料や雰囲気が決めてだった人が多いことが明らかになった。実習先や母園が多いのではないかと思っていたがいなかったのが結果である。

氏　名	亀田　麻由	学籍番号	J016013	ゼミNo.	2
テーマ	ＮＨＫの教育テレビ番組やアニメはどのような意図で放送し 子どもたちに何を伝えたいのか				

筆者は子どもたちと関わることのできる保育士・幼稚園教諭養成大学に所属し保育者を目指している。甥と姪がいるが遊んでいる手を止めて真剣にテレビを見はじめた事があった。ただ目で追ってその映像を見ているだけではなく、しっかりと音を聞いていたり、自分の興味のあるキャラクターが出てきたときは名前を言ったり、指差しをしたり、歌や踊りを覚えて楽しそうに教育番組をみている姿を見た。ＮＨＫ教育番組は番組内容が多少は変化しつつも存在してきた。「教育番組の必要性」また、放送されている番組にはどのような意図があり・子どもたちに何を伝えたくて放送しているのかについて興味を持ち、この論文を書くことに決めた。どのような内容で子どもたちに何を伝えたいのか毎回テーマがあるのではないかを調査し、各番組にまとめていく。将来子どもたちと関わる仕事に就く上で学んだことや、知識を生かし保育者としてのひとつの引き出しとして使える。また、自分自身が結婚し子どもを生んだ際に教育テレビの有効性を伝える事が出来、実際に自分自身の子育てにもＮＨＫ教育番組を見る環境を取り入れたい。質問紙調査を実施し、メリット・デメリットを明らかにするものである。

結論としては、当初の研究目的ではＮＨＫ教育番組はしつけに影響を与えているのかを明らかにするということが大きな柱であった。ホームページの閲覧や子育て経験のある保護者・子育て中の保護者に質問紙調査を行い、保護者が考えるメリットやデメリット・また子どもたちがどのような番組をみていて、どんな様子なのかを明らかにした。しつけや生活習慣に関係しているかどうかの問いは１００％ではなかった。「しつけ」という概念が保護者のよって違うためこのような結果になったのではないかと考える。しつけは人から人へと導かれるものであるという考え方の保護者と、テレビを通してでもしつけはできるという考え方に違いがあると感じた。私自身ＮＨＫ教育番組は「しつけ」「生活習慣」に役立つと考えていたが、今回調査を行い、生活習慣は身につくかもしれないが、しつけはグレーだと感じるようになった。

今回の質問紙調査を行い、普段子育て中の保護者・子育てを終了した保護者に貴重な意見を聞くことが出来た。メリットやデメリットは子育てを経験しないと分からないと感じた。特に、子どもが見るものではあるが、保護者が助けられている一面があったことだ。私自身、結婚も子育ても経験していない身ではあるが、想像はできる。家事と育児の両立・また仕事をしている母親ならなおさら自由な時間はない。子どものために時間を作る・家庭のために時間を割く毎日。そんな保護者がＮＨＫ教育番組を利用することで、ホッと一息つける事が明らかになった。本研究は四月からの保育士として働く上で役立つものと考える。

氏　名	河野　綾佳	学籍番号	J016017	ゼミNo.	2
テーマ	子どもの語彙を増やすための方法について				

今回「子どもの語彙力を高める方法」について研究テーマを選んだ理由は、インターネットやスマートフォン等の電子機器が急速に発達してきた現代において子どもの語彙力低下が問題になってきているからである。また、子どもの心身の発達と言葉の育ちは密接に関わっており、身体の様々な器官や機能が発達していくと同時に言語表現も広がっていく。保育所保育指針では保育の５領域の１つに「言葉」の領域があり、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」と明記されている。これらのことから、今後保育士として子どもと関わる際に言葉を育むための方法や言葉と触れ合える保育環境について理解しておくことは重要だと考えたからである。本研究では、先行研究・保育所保育指針解説を参照し言葉の役割や語彙力の定義、言葉の習得過程を調査したり、本学の大学教員を対象として家庭と園でそれぞれできる語彙を増やすための取り組みや実際の子育ての中で実践していたことについての質問紙調査を行い、調査結果を分析しどのようなことが言葉を増やすことに繋がるのか、親や保育者の関わり方について考察を行ったりした。

研究結果として、意図的に語彙力を伸ばすことを目的とした活動や玩具を取り入れたりする必要はないことが明らかになった。つまり、日々の生活の中で言葉を見聞きしたり話したりする経験を積み重ねることで言葉は自然と身に付いていくのである。幼少期にどれだけ人と接し、会話でのコミュニケーションをとっていたかが言葉の育ちに大きく関係する。人と心を通わせたり心が動いたりすることで、言葉で話したい、相手に伝えたいという気持ちが芽生える。コミュニケーションを繰り返し行い、言葉で伝える楽しさや相手に伝わる喜びを感じるようになると言葉への興味関心がさらに高まる。すると新しい言葉を次々と吸収したいと思うようになり、結果的に語彙を増やすことに繋がる。

絵本の読み聞かせや手遊び、歌、ごっこ遊びなどはコミュニケーションを手助けしたり促進したりする手段として有効である。絵本や歌は、多くの言葉に出会い新しい言葉を知る機会となる。絵本を見て場面の状況や登場人物の気持ちなどを想像し相手に伝えたり、思いを共感したりすることによって話す・聞くという経験ができ、対話の基礎を学ぶことに繋がる。会話の話題作りや発展のきっかけとなったり、自分とは異なる考え方や価値観を知ったりする機会にもなる。また、絵と言葉を結び付けながら絵本を見ることで、一つ一つの言葉が持つイメージや言葉と音との関係・リズムを感覚として身に付けることができる。このことから、子どもの語彙を増やすためにはまずは自分自身が子どもとの会話を楽しみ、多様なコミュニケーションツールを活用しながら言葉の楽しさや面白さを伝えていくことが重要であると考える。

氏　名	島袋　海奈美	学籍番号	J016020	ゼミNo.	2
テーマ	娘が父親に持っている意識と関係性についての研究				

現代の日本においては、家族の関係性や幼少期からのコミュニケーションの在り方が、その後の性格形成においても重要視されている。特に、親子関係については、親の生活環境による影響を受けて、母子家庭や虐待の問題、家庭の貧困問題等、多くの課題を抱えている家庭が見られる。しかし、そう言った家族関係や家族問題についての研究論文は多く見られるが、親子の関係性について、特に父親と子どもと言った関係性を調査した先行研究は少ない。発達心理学では、幼い頃からの父親の娘に対する態度や言葉は、娘の成長に大きな影響を与えると言われている。娘の成長にとって何が本当に必要なのかを理解し、要所で適切な対応をとることができれば、それは娘が将来、自らの人生を切り開いていくための力を育むことにつながると言われている。父親と娘の関係性に関する相互の意識についての関心を持ちながら、特にそのきっかけとなったのは、大学の友人との会話の中で、父親との関係性のエピソードを挙げながら、話す機会である。そこでは、父親と娘の関係性は、良好なコミュニケーション取れている友人も見られたが、一方、良好ではない関係性の友人も存在した。会話の中で、父親と娘の関係は多様な関係があるのは理解できるが、その中で関係が良好ではない親子や距離感がある親子に対して、子どもの成長過程でどのようなかかわりがあったのか疑問を覚えた。そこで、娘と父親の関係性について知るために、アンケート調査を 2019 年 10 月下旬に現在の大学生、松山東雲女子大学に所属する子ども専攻の 4 回生 20 人を対象に、「父と娘の関係性について」空き時間を利用して、各アンケート項目について、父親と母親との相違点を検証する為に、比較検証を行った。研究前は、父親とのコミュニケーションは少ないと予測していが、予測と反した結果が出た。今現在父親のことをどう思っていますかとの質問では、予測と合致している結果が出た。ただし、アンケート対象者は、女子大学生であり、裕福な環境で育ってきている家庭の学生が多いと思われるので、安定した関係性を保っていて、結果は限られた方向になるだろう。

アンケート結果では、母親と比べて父親とのコミュニケーションが少ないと分かった。父親と娘の関係は娘と母親と話をすることが、父親と話をすることより多いという結果から、母娘関係が重要で、父娘関係はそれより重要でないというようなことが考えられる。親と母親を娘にとって同様の役割を持つ者として、父母の差を量的な差のみで検討するのでは不十分であることが分かった。

氏　名	高橋　須栄子	学籍番号	J016026	ゼミNo.	2
テーマ	日本の若者の自己肯定感について				

筆者が訪れたアメリカのニューヨークで、好きなことを、自信を持って表現していたり、音楽に乗りながら心から楽しんだりしながら接客をしているのだという事が分かる場面を目にした。また、内閣府の「子ども・若者白書」で日本の若者の自己肯定感は低いと公表され、自分自身の日本での生活の中では、自分を表現する機会が少なく、現代の日本の若者の自尊感情の低さを感じたため、本研究に取り組むことにした。

先行研究から考え、作成した質問紙調査により、他人に評価されることに著しく自信がないことが分かった。教育の内容が正誤の判定ばかりであったり、5段階評価の成績表、評価が低いところを指摘されたりといった関わり方では、子どもの自尊感情は育たない。他人と比較されることでは、自信はつかない。現代のビ本の教育では表現する場であったり、自分のネガティブな考え方や特徴を認めてあげたり、受け止めることができるようにする働きかけが日本の教育や社会に必要になってくる。

調査結果から、活動の場、他人や仲間と協力したり、話し合って達成するプロセスを経験したりする場が必要である。学習を座って行うだけでなく、五感を使った経験につなげることが大切である。また、子どものネガティブな部分ではなく、ポジティブな言動に注目を集め、周囲の言動に良い影響を及ぼしていくようにする。また、大人は肯定的な言葉を効果的に使っていくべきである。そういった言葉や活動の取り組みで、子どもが何かの役に立つといった自己効力感を高めるとともに、自己肯定感を向上させていくことができるのではないだろうか。

おわりに、自己肯定感の低さの原因は、人との関わりの活動の少なさが要因になっていると考える。子どもの性格の基盤を作り上げる幼少期に、親や家族、そして第三者の大人が、子どもが経験を培える場所や時間が提供できるかが重要になっていく。ネガティブな思考ではなく、肯定的な環境と言語への働きかけが大切になる。幼児教育や学校教育では、より多くの課外活動や協力して達成感を味わうことができる場を提供する必要がある。今では、アクティブラーニングといった自分自身やグループで考える教育が増えてきている。こういった活動をより充実させて、応用し活用する必要があることが検証された。家庭だけでなく、地域社会や教育機関が連携を取り、日本の教育が子どもの自己肯定感の向上につながるようにしなければならない。

氏　名	馬越　梨早	学籍番号	J 016039	ゼミNo.	2
テーマ	新居浜太鼓祭りを取り巻く若者の意識について				

筆者の出身地である愛媛県新居浜市では、伝統文化である新居浜太鼓祭りが行われている。しかし近年、その祭りに参加する若者の減少しつつあり、子どもの祭りに対する関心も薄れていると感じた。そこで、新居浜太鼓祭りへの若者の意識の希薄化の原因を明らかにしたいと考え、このテーマにした。

そこで、大学生を対象としたインタビュー調査を行い、その内容を逐語記録として記載し、記録を抽出する。

祭りに関心を持っていない人の特徴としては、生まれが市外や県外の人という回答があった。新居浜生まれの人々は幼い頃からその伝統を知っているために祭りに興味津々だが、市外や県外の人の中には興味がない人が多く、また長年住んでいても、出身地が違うことで抵抗感があるのではないかと窺える。しかし、全ての新居浜人が祭りに興味があるというわけでもなく、祭りの日に外に出ない人もいる。また、将来性を考えて新居浜の地を離れていく人も多い。祭りが大好きな友人は、東京の大学へ進学し、せっかく東京に出てきたからと、東京での就職を決めた。

若者の祭りへの関心が薄れている原因として、学校の校則が挙げられた。太鼓台をかいてはいけない、関わってはいけないというものである。確かに、祭りの最中に怪我をする人は多い。しかしそれは主として、喧嘩で負った怪我である。平和運行で怪我をすることは少ないだろう。生徒を守るための校則であるのは分かるが、その校則が太鼓離れの一因になっているのであれば、校則の見直しや、生徒ひとりひとりの声や自主規制能力が必要である。これは学校側の対策である。

太鼓台関係者、青年団のかたは対策として、大人の指揮者の練習などに地元の子を呼んで興味を持ってもらおうと取り組んでいると聞いた。高齢社会や少子化という問題に向き合い、対策をしている。幼い頃にどれだけ地元の人と繋がりをもち、太鼓台に触れ合うことができたかも、将来の担い手に繋がっていくのだと考える。

また、内部の意見の相違による青年団員減少についても話を伺った。意見が違ってぶつかることは仕方のないことだが、それが原因でやめてしまうのは話し合い不足なのではないかと感じた。せっかくの貴重な人材であるのに内輪揉めで失ってしまうのは勿体ない。関係者皆で話し合い、皆で楽しめる祭りにするべきである。今一度、新居浜太鼓祭りがどのようなものであるべきなのかを学ばなければならない。

地域一帯となり伝統文化を守り伝え続けていくために、新居浜太鼓祭りが何のために行われ始めたのかを見直し、皆が楽しめるよう、平和運行が実現できるように改善していく事が求められる。

氏　名	森田　真由美	学籍番号	j 016055	ゼミNo.	2
テーマ	手遊びとわらべ歌の幼児に与える影響について				

2年次の6月、12月に行った保育所実習で、私が実習をさせて頂いた保育園では手遊びではなく、わらべ唄での保育であった。学校では、手遊びについて学ぶことがあり、手遊びでの保育ではなくわらべ唄での保育なのか疑問に感じていた。また、手遊びとわらべ唄では、子どもの成長にそれぞれ、どのように影響を及ぼしているのか疑問に思った。他にも、手遊びとわらべ唄でそれぞれ自分の知っている知識が正しいのか、それぞれの歴史についても調べていきたいと思い、手遊びとわらべ唄の両方について幅広く知りたいと考え、卒業研究のテーマにした。

保育の分野においても保育の5領域の中に、「環境・言葉」の領域があり、環境では「見る、聞く、触るなどの経験を通して、感覚の働きを豊かにする」言葉では「言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる」と明記されている。ほとんどの子どもは、手遊びやわらべ歌を身近に感じ、成長してきていると思う。手遊びとわらべ歌は、少し違う部分があるが、大まかにまとめると、両方ともリズムに乗って、身近なもので一人や友達、保育者や保護者の人と楽しむ遊びになっている。幼少期に、手遊びやわらべ歌で遊ぶことにより、言葉の発達や人間関係の形成にも繋がっていると考える。

卒業研究を進めていく中で、松山東雲女子大学子ども専攻の1年生から3年生、子ども専攻の先生を対象に手遊びとわらべ歌についてのアンケート調査を行っていきたいと考える。また、アンケート調査の他に、インターネットや図書館等の本での文献調査も行っていきたいと考える。

調査結果より、学生の考えはどの学年も似たような感じの回答が多かった。また、先生は今までの経験をもとにした意見が多く、様々な回答を得ることができた。学生でのアンケートでは、手遊び・わらべ歌ともにリズム感、言葉の発達が成長してから影響が一番あるという意見となった。反対に、運動能力、情緒はあまり関係ないのではという意見となった。先生でのアンケートでは、手遊び・わらべ歌ともに、それぞれ影響があるという意見となった。しかし、手遊びは集団行動と運動能力わらべ歌は数の感覚と集団行動が少数意見となり、ほかの項目よりは影響が少ない結果となった。

これから、保育者になっていく中で手遊びやわらべ歌は子どもとのコミュニケーションの1つとなっていく為、これらの結果を基に関わっていきたいと思う。

氏　名	吉村　ひな	学籍番号	J016060	ゼミNo.	2
テーマ	児童発達支援センターと地域社会資源の関わり				

今回「児童発達支援センターと地域社会資源の関わり」について選んだ理由は、児童発達支援センターのB学園は、全ての利用者に保護者がおり、職員は利用者だけでなく家族支援も必要になると考えたからである。通所施設であるため、保護者は夜間や休日、祝日は家庭で子どもを見守る必要がある。更に、障害のある子どもは障害特性や程度、その子どもの個性は異なり、専門性の高い支援が求められる。しかし、彼らを取り巻く全ての人々が障害についての知識を理解しているとは限らない。従って、専門的な知識がある保育士や地域の福祉機関との連携が必要であり、家族の負担を減らすことや利用者自身の発達に影響が出ることに繋がると考える。

また、近年では地域社会で近所付き合いが希薄化になった。それが原因で悩みや不安を抱え込んでしまう人もいるが、地域の社会資源を有効に利用されていないと感じた。そのために、児童発達支援センターの専門性の高い保育士や地域の行政と地域住民、民間サービスの介入が必要になると考える。

研究の結果、障害のある子どもには、保護者、施設保育士、医療機関、教育機関、地域サービス、児童相談所、そして地域住民のように他にも様々な社会資源が関わっている。また、県をまたいだ連携も行っている。関係機関との連携について述べると、きりがない。しかし、児童発達支援センターは、その子どもが初めて利用する社会資源であり、そこから様々な社会資源を利用し、その連携を児童発達支援センターの職員の方が繋いでいるように感じた。児童発達支援センターの職員の方々は子どもの発達だけでなく、障害の知識も知る必要がある。

以前あったプールや園庭開放のように地域住民に施設を理解してもらうにも交流を深めるにも実際は行いたい気持ちはあるが、現状難しいように感じた。しかし、限られた交流の中で実際に園の行事に参加する地域住民がいることに意義を感じた。そうして、1人でも多くの方が児童発達支援センターについて理解し、交流をすることが望ましいように考える。

また、乳幼児期における障害の発見が早いほど、保護者も子ども理解に繋げられ、児童発達支援センターの地域での役割が求められる。また、子ども理解につなげるには、職員と保護者で一緒に悩み、様々な専門機関との連携をとりながら皆で一緒に考えて子どものより良い発達を促し、関わり方を見つけていくことが重要となる。

従って、子どもを巻き込む全ての人が助け合い・支え合う関係性をつくるように関わることが重要となる。そうした関係性を構築するには、限られているが、定期的に継続的に交流をしていくことが重要だと考える。

氏　名	岡本あゆみ	学籍番号	J016010	ゼミNo.	3
テーマ	現代における異年齢保育の役割				

今日の日本では、少子化や地域とのつながりの疎遠化といった社会の変化により家庭内、地域での異年齢児とのかかわりが減少傾向にある。本研究では、異年齢とのかかわりが子ども、大人にとってどのような影響があるのか調査を行い、現代における異年齢の重要性について明らかにした。

第1章では、現代の子どもを取り巻く環境について整理し、生活の中で抱える問題を明らかにした。少子化、遊び相手の変化、遊び場の減少により異年齢の交流をする場は幼稚園、保育所が大きく占めている。戦後の日本では地域で自然と異年齢児との関係が育まれてきたが、現代の日本では大人が意図しなければ発生することがない。そのために、異年齢保育を行う重要性が高まってきている。

第2章では、異年齢保育の形態やその中で子どもが獲得するものについて事例をもとに明らかにした。異年齢とのかかわりの中で、上の子どもは主に「年齢による違い」「周囲の気持ちに気づく」「自己肯定感」の獲得が望める。下の子どもは「身近な手本」「挑戦意欲」を獲得する。異年齢保育は、子ども同士で互いに刺激しあいながら小さな社会を築き、大人が直接教えなくても自らの力で学ぶことのできる場となっているのである。

第3章では、保育者が異年齢保育から得られるものや、多世代交流を行うことで子育て支援につながること、保育者に求められている技術を明らかにした。多面的な視点から子どもを見る重要性を改めて確認し、大人が子どもとかかわる機会を設けることで子どもの発達への理解や幼児教育への関心を持つことが可能になる。異年齢とのかかわりは子どもだけでなく大人にとても有用であるといえる。また、異年齢保育を行う上で、豊かで自由な発想を持って子どもとかかわることや保育者間、保護者間との連携が必要となる。

以上より、異年齢とのかかわりで得られるものは多くあり、異年齢とのかかわりの自然発生が望めない現代では異年齢保育を行うことが重要である。異なる年齢の人間との交流を実践していく中で様々な人と出会い、子どもだけではなく保育者や保護者、普段子どもとかかわる機会のない人にとっても良い影響が与えられている。今後も異年齢保育の実践記録や参与観察を行い、保育現場で実践していくことで子どもの更なる成長の促進や子育て支援につなげていきたい。

氏　名	川本　詩織	学籍番号	J016014	ゼミNo.	3
テーマ	子どもへの言葉かけが与える影響				

私は実習に行った際に、自分と保育者との言葉かけの仕方に明らかな違いがあると感じた。普段何気なく子どもたちに対して言葉かけを行っているように見えるが、その言葉一つに一つに保育者の意図があり、思いが詰まっているのだと感じた。本研究では、言葉のかけ方や言葉の選び方によって子どもにどのような影響を与えるのか、また、保育者から子どもへの適切な言葉かけとは何なのかを明らかにした。

第一章では、子どもに対する言葉かけとは、まず子どもの声を聴くことから始まり、その言葉に対して保育者がどのような言葉をかけるのか、ということでわかった。子どもの言葉をよく聞き、更に、子どもの言葉に対する返し方、受け止め方、聴き逃さない感性を意識する必要がある。そして、そういった感性が言葉かけを考える上でとても重要である。

第二章では、低年齢児に対する言葉かけの中で、「リズムのある言葉」が大切であること、また子どもとの言葉を一緒に楽しむという意識が重要であることが分かった。1.2 歳児は少ない言葉を用いながら、他者に肯定される経験をすることで言葉を学んでいくため、決して子どもの言葉を否定することなく、子どもとの言葉でのやり取りを保育者自身も楽しむという姿勢が求められる。

第三章では、３歳以上児に対する言葉かけについて明らかにした。３歳以上児は、1.2 歳児と違って言葉が豊かになり、その言葉のズレや会話のズレを子どもが楽しむ姿が見られる。むしろその会話のズレが子どもにとって楽しいものであり、そうした経験が自我の発達や言葉の獲得に繋がっていく。したがって子ども同士の会話の中での話のズレを許容し、保育者自身も子どもとのやり取りを楽しむという姿勢が重要である。また、年齢が上がるにつれ子ども同士でトラブルを解決できるようになる。もちろん介入しなければならない場面も出てくるが、自我の発達の観点からみると、子ども同士のやり取りの中で自分の言葉の重さに気づいたり、自分の行動を見返すことができる。そのため、時には言葉をかけず、あえて子どものそばで見守るという援助も必要なのである。

言葉かけとは子どもの言葉を聴き、その言葉に対して保育者が行う援助である。保育者にとって、子どもの言葉に対する返し方、受け止め方、聴き逃さない感性を意識して接していくことが重要である。各年齢の子どもの言葉の発達や自我の発達を押さえていなければ、適切な言葉かけはできないのである。

氏　名	佐伯志織	学籍番号	J016018	ゼミNo.	3
テーマ	保育における児童文化財の役割				

本研究は、なぜ児童文化財が必要なのか、子どもの発達における児童文化財の意義について、エプロンシアター、パネルシアター、人形劇を中心にフィールドワークやインタビューを通して明らかにした。

第1章では、児童文化財の重要性、子どもをとりまく問題、保育における手作りの児童文化財の良さについて明らかにした。私は幼い頃から児童文化財を使ったお話が好きだった。石井氏も「子どもたちよ、子ども時代をしっかりとたのしんでください。おとなになってからあなたを支えてくれるのは子ども時代の『あなた』です」と述べている。つまり、子ども時代を十分に楽しむために良質な児童文化財と関わることができるようにすることが大切だ。しかし現代の子どもをとりまく状況は大きく変化している。特にスマートフォンをはじめとする電子機器の発達は人と関わる豊かな遊び文化を奪い、子どもたちのコミュニケーション能力を低下させている。

第2章では、実際の児童文化財の実践より、低年齢児における手作りの文化財の良さ、発達に合わせた語り・演じ方の重要性、素材となるお話の問題が明らかになった。低年齢児は布のもつあたたかさや手触りのよさを感じながらお話を楽しんでいるため、低年齢児にとって児童文化財の1つ1つの素材はとても重要なのだ。また、発達に合わせて語り口を変えることで、どの年齢においてもそれぞれの発達や興味関心に合った楽しみ方ができるといえる。

第3章では、実習で得た事例をもとに子どもの発達における人形の意義を明らかにした。子どもにとって人形は人間と同様で、時には励ましてくれたり、応援してくれるといった友達のような存在なのだ。それは、自分自身と対話して元気にしてくれたり、人と人の間を繋いでくれるため、子どもが生活する中で深く関わり、生活を豊かにしているといえることが分かった。

第4章では、平成16年より小学校を中心におはなし会を実践してきた団体へのインタビューから、活動を続けてきた原動力が、児童文化財の実践を通して子どもたちから元気をもらえていることであるということが明らかになった。

以上より、手作りの児童文化財は布の感触を感じながら子どもの発想を豊かにしていること、そして演じ手である大人にも元気を与え、大人と子どもを繋いでくれる存在であることが分かった。今回の研究で学んだことをもとに、子どもに児童文化財の楽しさや面白さを伝え、心の支えになるきっかけづくりを保育の現場で展開できるようにしたい。

氏　名	武智　可那子	学籍番号	J016029	ゼミ№.	3
テーマ	保育におけるボーイスカウトの意義				

近年日本のボーイスカウト運動の加盟登録人数は減少している。日本の加盟登録人数も2018年は8,307人であったのが、2019年は7,913人となっており一年間で394人減少している。本研究では、最近増えている災害に焦点をあて、1907年から現在も続いているこれまでの活動をふまえてボーイスカウト運動が防災教育を考え、ボーイスカウト運動を取り入れた幼稚園や保育所、認定こども園といった園での取り組みとして考察をした。

第1章では、ボーイスカウト運動の始まり、運動のねらい、活動内容について、創始者であるベーデン・パウエルの生涯と現在までの運動の流れから明らかにした。軍人であった創始者は少年兵士たちが自分自身で責任を果たせるようになるために、研究し指導した。つまりボーイスカウト運動は、小さな力しかない少年たちが主体的に責任を果たすことができるようになるためのものであり、自立して勇気と機知を発揮するための1つの教育論であるこがわかった。

第2章では、『幼稚園教育要領』の5領域と『ビーバースカウト隊ハンドブック』の「木の葉章課目」を比較、分析し、保育とボーイスカウト運動の相違点を明らかにした。両者とも、子どもたちが、生涯、生きるために必要な能力を育むという目標を持っており、「健康」「表現」は共通している。一方、ビーバースカウトでは「環境」が「自然」に、また「社会」があり「言葉」はなかった。これは、ビーバースカウトが自然環境を重視していること、幼児期から学童期の子どもを対象としていることが背景にあるといえる。しかし、子どもを市民ととらえ、教育目標や内容をより身近な生活にとどまらず、地域や社会へ開かれたものとしてとらえる視点は重要であるといえるだろう。

第3章では、最近の災害や台風の実態や学校教育機関における対応についてまとめ、自然災害をどう捉えどう対処するかは、生活習慣の自立が完成していない低年齢児ほど、親や教師の支援が必要であることを明らかにした。そこで、日本ボーイスカウト千葉県連盟が出している「隊・団が取り組む災害教育プログラムヒント集」を手がかかりに、幼稚園や保育所でできる防災教育について明らかにした。自分のことを他者に伝えることや、片付け、元気な体づくりや探検など普段生活の中でやっていることや園外保育を防災教育として見直すことで、自助の意識付けができると言える。

以上より、ボーイスカウト運動の社会教育的な考えを取り入れることは、子どもたちの自立と勇気、機知を発揮させ、防災教育を含めた教育活動がより広く社会に広がっていくことが明らかになった。今後はボーイスカウト運動の野外で展開させる活動を構想し保育現場でボーイスカウト運動を活用していきたい。

氏　名	竹本有希	学籍番号	J016030	ゼミNo.	3
テーマ	わらべ歌がもたらす子どもの発達への影響				

今日、子育て支援や保育現場で、わらべ歌の重要性が見直されてきている。そのような中で本研究では、わらべ歌にはどのような指導方法があるのか、またわらべ歌が子どもの発達にどのような影響を与えているのかを明らかにした。

第一章では、わらべ歌の種類や童謡、手遊び歌とわらべ歌の違い、わらべ歌のリズムについて明らかにした。わらべ歌は日本独自のリズムを持っており西洋音楽の7音階（ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ）とは違い5音階である。またリズムも農耕民族である日本人の体の動きにあった、2拍子か4拍子である。わらべ歌が手遊び歌や童謡と決定的に異なるのは大人がつくりだしたものではなく、子どもから生まれた子どもたちのものであるということである。

第二章では、わらべ歌が幼児の社会性・認識力・身体運動機能の発達に影響を与えていることを明らかにした。社会性の発達として具体的には遊びのルールや順序を守ること、協力すること、他者やほかの立場への思いやりを持つことである。認識力の発達としては判断力や俊敏性を養うこと、語を増やし、発音を明瞭にすることである。身体運動機能の発達としては前後・左右などの位置関係や、方向感覚を養うことである。仲間との遊びを通して、知らず知らずに経験を通して、これらの力を学び取っていく。つまりわらべうたは、子どもたち自身や子どもたち同士が遊びの中で、社会性・認識力・身体運動機能の能力を楽しみながら身に着けていくものであるといえる。

第三章では、わらべ歌を実際に保育現場でどのように子どもたちに指導していくのか、実践するのかを明らかにした。子どもたちがわかりやすく、楽しみながらわらべ歌を経験できるようにするために保育者として次の三つが大切であるとわかった。発達に合わせて遊ぶこと、小道具（スカーフ、まり、指人形、かんむり、つえ）など視覚、聴覚にうったえる教材を用いること、導入とくにはじまりの音に注意することである。

保育現場では手遊びは意識的に用いるが、わらべ歌は無意識に自然に用いられている現状についても明らかになった。研究の成果をふまえて、わらべ歌が、子どもたちの発達にかかわる影響の大きさを意識しつつ、今後、実際の保育、幼児教育の現場において次の世代につなげていきたい。

氏　名	谷岡梨央	学籍番号	J016032	ゼミNo.	3
テーマ	幼児期の発達における運動遊びの重要性				

本研究では、幼児期の発達における運動あそびの重要性について、幼児の運動あそびを取り巻く現状の調査をもとに明らかにし、幼児期の運動あそびにおける保育者の役割について考察を行った。

第一章では、運動あそびとは、あそびの中で、発達に合った多様な動きを経験し、楽しく体を動かすことであり、運動あそびを経験することで、対人関係能力、運動技能、感情経験を得られることがわかった。

第二章では、幼児の体力・運動能力の低下、社会の現状、幼児の生活の 3 つの視点から、幼児の運動あそびを取り巻く現状を明らかにした。昭和 60 年頃から体力・運動能力が低下しているため、幼児の動きの水準が下がり、それがまた、体力・運動能力の低下に繋がり悪循環になっていることや、時間、空間、仲間の減少により、幼児が運動あそびをする環境が失われている。運動能力を高めるためには早寝・早起き・朝ごはんといった生活習慣が大切なこと、そしてそれは保護者の意識にもよることが分かった。

第三章では、幼児の発達や特性に応じて、楽しく身体を動かす機会が合計で 60 分以上になるように、家庭とも連携を取り、できた、できるようになったということが増えたという感覚である「有能感」を高めていくことが大切であることが分かった。また、様々な基本的動作を取り入れた遊びを行うには、時には保育者からの提案も必要で、初めての動作に戸惑う幼児たちにも、有能感を与えられるような応答的環境を作りながら援助していくことで、幼児は動作を知り、獲得していく。そして、自発的に様々な動作を取り入れた遊びができるようになっていくことがわかった。

この研究を通して、幼児が運動遊びをしたくなるような環境を作り、幼児の興味や発達に合う、様々な動きを取り入れた楽しいあそびを提供する必要があるということが明らかになった。幼児期に運動あそびをすることで様々な経験が得られるにもかかわらず、幼児が運動あそびを好んで行わない現状や、運動あそびをする環境がなくなってきている現状が明らかになった。このような問題を解決していくためにもこれからの実践の中で、幼児期の運動あそびが活発に行われるような環境を作れるように、継続して研究していきたい。

氏　名	永沢　しおり	学籍番号	J016036	ゼミNo.	3
テーマ	自然遊びが子どもに与える影響 ～泥団子をてがかりに～				

これまで保育所や幼稚園に実習に行った際に、子どもたちが泥団子づくりに熱中している姿を見ることが多かった。泥団子づくりは人との関わりの発達と関連しており、出来上がった泥団子には子ども1人ひとりのイメージや個性、自分が表れている。本研究は、泥団子づくりの魅力を明らかにし、そこから加用氏が提案した一般化した泥団子の作り方とN幼稚園の幼児（4.5歳児）の泥団子の作り方を比較した。また、自然遊びにおける環境設定や保育者の役割を3つの視点から明らかにした。

第1章では、砂遊びの特徴を「性質を理解する」「自己表現に促す」「要求に応える」の3つに整理し、泥団子の素材である砂についてその特徴と発展的意義を明らかにした。子どもたちは、砂遊びをするなかで砂や土の関わり、性質や仕組みを知る。そしてより好奇心や興味・関心が湧き、今以上に高度なものを作ってみたいという欲求が生まれる。このような体験をした子ども同士が、お互いに意見を出し合い刺激し合うなかで遊びが展開していくのである。また、仲間と夢中になり何度も繰り返し試行錯誤することの重要性が、近年、非認知能力としてあげられている。砂遊びのなかでは、非認知能力の1つである目標や意欲、興味・関心をもって粘り強く、仲間と協調して取り組む姿勢と言える。

第2章では、加用氏の「早期脱水白玉法」という独自の泥団子の作り方を手掛かりに、泥団子が子どもたちを引き付ける泥団子づくりの魅力を明らかにした。現在では、泥団子を簡単につくることができるキットもあり、戸外に出て砂場に行かなくても家の室内で簡単に泥団子をつくることができるのである。泥団子をつくる手順は一般化されているが、その通りにやればできるわけではない。土や砂は作る時期や時間によって変化をするので、自らが試行錯誤を繰り返して作ることが求められる。

第3章では、N幼稚園での泥団子づくりの事例と考察から、自然遊びのなかでの環境設定や保育者の役割を明らかにした。出原氏は、自然との関りで育つものとして次の3つをあげている。1つ目に自然環境で元気に遊ぶことで、心も体も健康になること、2つ目に自然への興味・関心が広がることで、豊かな感性が育まれること、3つ目に動物とのふれあいによって、生命の尊さに気づくことである。従って保育者の役割としては、次の3つがあげられる。第1に、戸外で遊ぶ際の子どもたちへの配慮としては、園庭や遊具の配置などを工夫すること。第2に、日常生活のなかでの活動や遊びのなかに季節に応じた身近な植物などを取り入れ、子どもたちが興味・関心をもてるような工夫をすること。第3に、保育者自身が動植物と関わる際に優しく世話をしたり、生きているものに対して愛する心を持って関わる姿勢を子どもたちに見せることである。

以上より、泥団子づくりには、仲間関係の発達や非認知能力を育むことに大きな影響を与えていると言える。近年、戸外の自然のなかで遊ぶ経験が少なくなってきている子どもたちの発達を促すためにも、子どもたちの生きる力の源である自然体験が身近にできる環境づくりを保育の現場で築いていきたい。

氏　名	永嶋　美生	学籍番号	J016037	ゼミNo.	3
テーマ	子どもと構成遊びの関係 ～レゴブロックを手掛かりに～				

本研究は、構成遊びが子どもの発達に与える影響についてレゴブロックをてがかりに調査した。レゴブロックを教材としたレゴスクールでのフィールドワークを通して保育者の役割や援助の方法について明らかにした。

第一章では、構成遊びは「もてあそび」が原点であることが分かった。もてあそび（0歳児～）→作って遊ぶ(2歳児～)→構成遊び(3歳児～)のように発展していく。乳児期に見られる「もてあそび」で様々な素材に触れたり、聴覚を刺激する経験は、構成遊びの発展過程において、とても大切な過程である。構成遊びには、積み木や粘土、あやとりをはじめ、ブロック遊びも含まれる。ブロック遊びには、指先の発達がとても重要である。指先の運動機能の発達によって、ブロックを指先を使って掴むことができ、掴んで、積み重ねるなどのブロック遊びへと発展していると言える。

第二章では、レゴブロックを手掛かりに、構成遊びで育つ力について明らかにした。レゴスクールでは発達段階に合わせた年齢別カリキュラムによって、「意欲的な探究心」「創造的な思考力」「やり遂げる集中力」「コミュニケーション力」を育んでいる。この4つの育まれる力は、将来子ども達が社会の中で自発的に考え、行動し、他者と共に新しいものを生み出す際に役立つ力であると言える。

第三章では、レゴスクールでのフィールドワークと事例考察をもとに、レッスンの実態やインストラクターの子どもに対する関わり方について明らかにした。レッスンは子ども達がレゴブロックで学んで終わりではなく、テーマに沿って行う。保護者に対してレッスン中の子ども達の反応やレゴブロックの作品を見せることで日常生活では気づかない育ちを確認・共有できる。また、子どもに対してそのまま答えを教えるのではなく、子どもの想像力を受け止め、イメージを膨らませられる声掛けや「オープンエンド方式」な関りが大切であることが分かった。

今、レゴスクールは世界で7か国に展開しており、日本でも全国で36か所とレゴブロックが教材の一つとして活用されている。レゴスクールで育まれる、4つの力はレゴスクールに限らず、私たちが日常の保育において、構成遊びを援助する際にも大切な視点であり、構成遊びにおいて、大人の関わり方や声掛けが影響するということを考えながら関わっていかなければならない。

氏　名	上西　佑佳	学籍番号	J016006	ゼミNo.	4
テーマ	保育における歌の役割について				

保育現場では歌を通して、気持ちを通い合わせたり創造力を豊かにしたり身近な場面での歌の役割がある。近年では、子どもに好まれる曲は流行しているものが多く、好きな歌を好きな場面で歌うことが増えてきているように感じている。歌はその歌詞ゆえに園生活の中で幼児の心情に寄り添っていったり、代弁したりというような幼児の内面を豊かにできる価値の高い側面をもち合わせているといえよう。これらのことから、子どもが園生活の中で場面ごとの印象とともにどのような歌を歌っているのかについて調べることにした。

上述を検討するために以下の方法を実施した。M 女子大学の保育実習及び教育実習を終了した学生 37 名を対象に①朝の会②好きな遊びの際③昼食時④終わりの会、その他の場面でも歌われた曲があると考え、実習での子どもの歌と場面についてのアンケート調査を行った。またその中で、子どもが歌った曲とその曲に当てはまる曲の印象（①元気のよい②明るい③躍動的④嬉しい⑤しんみりする）を記述してもらった。アンケート結果に基づいて、保育における歌の役割について、検討を加えることとした。

その結果、場面ごとに歌を歌うことで保育者が子どもに親しみや楽しみをもって歌ってほしいという気持ちから歌われている曲が多くあがっているのではないかと考える。そこに、体を動かすことや音に合わせて踊ることで子どもが自ら友達同士や先生と楽しく歌を楽しむための方法をとっているのではないかと考えた。また、遊びの最中に、自分の好きな歌が合うと幼児自身が判断したとき瞬時に好きな歌を口ずさむこともあるのではないかと想像できる。そこから、誰かが歌ったことが耳に届き、遊ぶ中で歌いたいという気持ちになっていくのではないかと考える。活動に取り組む際には、子どもの意欲を高めるためや活動のイメージをもつことができるため、歌が用いられることが多いことが分かる。歌う時の印象は、すべての場面（朝の会、好きな遊びの際、昼食の際、終わりの会、クラス活動）を通して明るい元気よくという項目が多いことから、園で生活する子どもは心を豊かにして気持ちを通い合わせたり、次の活動を意欲的に取り組めるようにするための２つの意図があるように想像できる。また、１日の出来事を振り返りながら、充実した時間であったことが歌を通して表現されているのではないかと考えられる。歌によっての印象の変化は、子どもが歌う場面の前後でどのような感情であるかが歌う時の印象にも関わってくるのではないかと考える。これらにより、保育における歌の役割は、子どもたちが成長するうえで日常生活に欠かせないものであり、豊かな心を育てていく一部であると考える。ゆえに、幼児にとって歌がある生活が当たり前になっている保育環境が重要だと考える。

氏　名	武田ひかり	学籍番号	J016028	ゼミNo.	4
テーマ	大人が魅力を感じる絵本について				

筆者は保育の学びを深めていく中で保育現場ではよく見かけられる、絵本に注目した。一般的には、絵本は子どもが読むものであると思われている。しかし近年、大人が読んで心に響く絵本にスポットが当たっている。それは、大人向けの有名な絵本おすすめ14選5）、大人用絵本人気おすすめランキング20選6）からも明らかである。では、大人は絵本のどのような側面に心を奪われているのであろうか。本研究では、大人に受け入れられている絵本を抽出し、大人がどのように心を動かされているのか、絵本が大人の心情にどのような影響を及ぼすのか絵本と大人の関係性について検討したいと考えた。調査方法および調査対象としては、M女子大学図書館において、7冊の絵本を被験者に読んでもらう。その後、アンケートに答えてもらう。調査場所を図書館としたのは、静かで落ち着いた空間で集中して1冊ずつゆっくり読んでもらいたいためである。具体的には、7冊の絵本を1冊ずつ回し読みしてもらい、1冊ずつアンケートをとる。被験者の対象は、M女子大学4年生の7名である。7名としたのは、同一室で7冊の絵本を一気に読んでもらうためには長時間を有するため、7名が適切であると考えたからである。アンケート結果からわかったこととしては、大人は絵本を読む際、絵より文章から印象を受けているということがわかる。子どもに人気のある絵本は、絵からストーリー展開を読み取れるようなものが多いが、大人が魅力を感じる絵本は文章から印象を受けているため、絵より文章を重要視しているということがわかる。文章を読んだうえで、その文に共感し、感動する絵本に大人は魅力を感じるということが読み取れる。これは、子どもの頃に同じ絵本を読んでいたとしても、感じ得ないことかもしれない。大人が魅力を感じる絵本は、命の大切さや思いやりがテーマになっているものや、大人にわかりやすい内容のものであるということがわかる。命の尊厳に十分に理解が持てる大人だからこそ、命の大切さや、登場人物の思いやりの心に心を打たれるのだと考える。また、すべての質問に対して、平均7割強の得点率を得ている。このことから全体の7割は、筆者が作成した質問項目を支持しているということがわかる。つまり、絵本の内容と大人の内面には、相通じる深い関係性があるといえる。本研究により、絵本は子どもが読むものだという概念は変わってきているということが示唆されたといえる。ゆえに、大人が子どもに絵本を読んであげることも、大人同士で絵本を読み合うことも、同じくらい大切なことだということが分かった。保育現場においても、子どもが絵本に触れられる環境をつくることはもちろん、保護者にも絵本を読んでもらう機会をつくることで、保護者と子どもとの関係性や、保護者自身の内面にも大きく影響を及ぼす力が絵本にはあるのではないだろうか。

氏　名	谷村唯香	学籍番号	J016033	ゼミNo.	4
テーマ	保育実践における幼児の発達と自然環境との関係性について				

私が子どもだった頃は自然の山の中で身体を思い切り動かして遊んでいた。しかし、近年ではスマートフォンやテレビゲームの普及により子どもたちが戸外で遊ぶ機会が減り、自然環境とのかかわりも無くなっているように思われる。そこで、今一度自然環境が幼児の発達や成長にどのように関係しているのかを検討したいと考えた。

実際に筆者が実習に行かせていただいたD認定子ども園での幼児の自然環境遊びの事例を収集する。三歳児、四歳児、五歳児の年齢ごとに事例を仕分ける。事例を詳細に読み取り、各年齢の子どもたちの遊びから発達の特徴をとらえカテゴライズする。年齢ごとに得られたカテゴリーを相互に比較検討し、自然環境が幼児の発達や遊びにどのような影響をもたらしているのかを明らかにする。

事例を詳細に検討した結果、次のカテゴリーが得られた。「手指の緻密性」、「身体能力スキル」、「ルールの大切さを理解し、守ろうとする」、「友達同士で教え合う相互作用」、「友達と共通の目的を果たす楽しさ」、「相手を思いやる心」、「物の性質に対応できる力」、「生命を大切にしようとする気持ち」、「何度も繰り返し確かめる姿勢」、「友達同士で意思の伝達をすることができる力」、「友達の言葉に耳を傾ける姿勢」、「五感を使って自然物に触れる楽しさを味わう心」等、29種類である。

さらに、これらのカテゴリーを5領域に即して分類したところ、全てのカテゴリーが領域にまたがると同時に3～5歳児の各学年に亘っていることが分かった。さらに、年齢別に比較すると、全ての領域において年齢が上がるにつれカテゴリーの数が増えていることが見て取れた。とりわけ、顕著にカテゴリーの数が増えているのは、領域「人間関係」と「環境」であった。これにより、以下のことがいえるのではないだろうか。自然物や自然環境には幼児の五感を刺激し、好奇心を生む素材がふんだんに含まれると考えられた。例えば、水、砂、虫、植物などであった。このため、幼児はこれらの素材を活用しながら様々に遊びをより発展させようとする際には、工夫を凝らす必要があるだろうと考えられる。このように様々に工夫を凝らす遊びを通して、幼児の心情や意欲、態度が育つのではないかと考えられる。加えて、遊びの発展には必ずと言及できるほどに、友達との関係性が不可欠である。友達と関わることで、友達を受容したり友達から受容されなかったりもする。さらには、共感したり、協力したり一緒に思考したりしながら遊ぶ喜びをともに味わい合えることができる。これらの経験を通して、社会性への理解やより豊かな人間理解の発達が見込まれるのではないだろうか。

氏　名	向井春乃	学籍番号	J016054	ゼミ№	4
テーマ	現代の女子大生が描く結婚に対するイメージ				

本研究は、結婚に関する社会問題が危惧されている現在の女子大生の結婚検討するために、恋愛や結婚観についてアンケート紙調査の質問項目を作成し、女子大生を対象にアンケート紙調査を行った。

アンケート紙調査に基づき、因子分析を行った。まず、女子大生の恋愛や結婚に関する考え方尺度では、4因子が得られた。第1因子は、「恋愛結婚因子」、第2因子は、「社会容認因子」、第3因子は、「男女平等思考因子」、第4因子は、「結婚不安要素因子」である。次に、恋人や結婚相手に関する考え方尺度では、3因子が得られた。第1因子は、「相性因子」、第2因子は、「生活環境因子」、第3因子は、「自己向上意欲因子」である。そして、恋人や結婚相手に関する考え方尺度でも、3 因子が得られた。第 1 因子は、「身の上重視因子」、第2因子は、「内面重視因子」、第3因子は、「外見重視因子」である。さらに、現在恋人の有無によって恋愛や結婚観について違いはあるのかを調べるために、各因子の平均の差を比較するT検定を行ったところ、「男女平等思考因子」「結婚不安要素因子」これら、2つにおいて有意な傾向差が見られた。しかしながら、恋人の有無にかかわらず、すべてにわたって意識の差はほとんどないといえよう。結婚願望のある人、ない人、どちらともいえない人で一元配置分析を行ったところ、「恋愛結婚」「社会容認」「相性」「生活環境」「自己向上意欲」「内面重視」の6つにおいて有意な差が示された。ここから、結婚願望のある人は、結婚願望の無い人、どちらともいえない人に比べ、結婚に魅力を感じており、恋人や結婚相手の理想像が明確であることが分かった。晩婚化をよくないと思う、どちらでもよいと思う、とてもよいと思う人で一元配置分析を行ったところ、「恋愛結婚」「結婚不安要素」において、有意な差が示された。少数ではあるが晩婚化をとてもよいと思う群から、シングル化や核家族化の風潮ともいえるような考え方が見られた。

恋人の有無にかかわらず、意識の差はほとんどない。このことから、女子学生は結婚に現実味を感じていないと考えられる。結婚願望の有無からは、かなりの意識の差が見られた。結婚願望のある人は、結婚や結婚相手について考えるため、理想像を持っている。対して、結婚願望のない人は、結婚にあまり興味を持っていないため、明確な理想像がなく、結婚相手に対して欲がない。晩婚化の捉え方については、ほとんどの女子大生が晩婚化をどちらでもよいと答えた。これは、女子大生はまだ若く晩婚化とはかけ離れた世代であるため、関心を持っていないのだろう。しかしながら、シングル化や核家族化といった社会風潮による意識は見られた。

これらにより、女子大生は現時点では明確な結婚観を抱いていないということが、明らかとなったと言える。

氏　名	吉倉実佑	学籍番号	J016059	ゼミNo.	4
テーマ	男性の育児休業の現状				

厚生労働省は、育児休業取得を推進し、積極的に子育てをしたいという男性の希望を実現するとともに、パートナーである女性側に偏りがちな育児や家事の負担を夫婦で分かち合い、女性の出産意欲や継続就業の促進を促している。また、急速に進む少子化の流れから、年金や医療などの社会保障制度が立ち行かなくなってしまうという危機的な状況にあり、次世代を担う子どもたちを、安心して生み育てるための環境を整えることが急務となっていると指摘している。つまり、男性の育児休業制度の推進により、女性の働きやすい環境や育児に対する負担が軽減されるのである。しかしながら、筆者の周囲を見渡す限りにおいても、上記の施策は十分に機能しているとは考えにくい。また、これからの社会の動きとして厚生労働省を始めさまざまな企業が男性の育休制度について力を入れていることからこの問題に着目した。また、男性の育児休業制度の企業や政府の施策と現状はかけ離れているのが現状であるが、その政策や施策について詳しく見ていくとともに、より男女の「仕事と育児の両立」を支援するために必要な社会的認識について明らかにする。

今回は男性の育児休業の実態に着目するためにインタビュー形式で行う。3 名の方に同じ質問を行い録音させてもらう。各育児休業のインタビュー結果を文字起こしし、まとめる。調査対象は 1 年間育児休業を取った方、自営業で育児参加した方、育児休暇を取った方の 3 名にインタビューに協力していただいた。育児休業の期間の長さや、育児休業の取り方も様々であるため比較しやすいと考えられる。

A さん C さんにおいて育児休業が取得できるのであれば、取得するのが良いという雇用側から推奨され、B さんは自営業ありながらも自ら育児休業を積極的に取得しようしていることが分かる。また、職場の雰囲気としても育児休業を受け入れる姿勢が見られる。職場の育児休業への理解があると育児休業も取得しやすいのではないかと考える。また、育児を経験することで仕事をしている時よりも物事を広い視野で捉えることができるようになったという正の影響があると言える。それは、子育てと言う未経験のことを経験することで今までとは違った視点を知ることでできるようになるのではないかと考える。また、育児休業と周囲との関係はとても大切であると考える。第三者の一声で煮詰まっていたものが楽になったり、誰かの手助けで育児をスムーズに行うことができたりするものである。しかしながら、育児休業を取得したからといって全てがうまくいくものではないのである。それは、男性が育児をする際に限らない。育児をする上で、周囲の理解や手助けが必要となってくることが分かる。また、専門的な知識を持った人からのアドバイスは心の手助けになることも示されている。筆者は、これから保育士として研鑽を積む立場となるため、母親の育児に対する心のケアが行えるように是非とも働きたいと考える。

氏　名	内田　菜月	学籍番号	J015501	ゼミ№.	4
テーマ	マーケティングにおける記憶に残る音楽と思い出の関係				

現代社会において、情報端末の普及によるデジタルデバイスの利用者、利用頻度は著しく増加している。テレビ、ゲーム、映画、アニメ、お笑いやバラエティ番組のBGM、その他にも様々なジャンルのアーティストや歌手により、私たちは音楽を聞く機会が多く、また、個人の意思に関わらず、社会に溢れている様々なジャンルの音楽や生活音を耳にする状況にある。各国のレコード協会が発表したデータによると、日本の音楽業界が世界の音楽市場に遅れていることがわかり、本研究では、岸本（1999）の芸術マーケティング 4 つの C に着目し、なぜ「好きな曲」「嫌いな曲」だと思うのかについて仮説を 2 つ設定し 148 名にアンケートを実施した。

まず、調査対象者の世代間に幅を持たせ、若年層世代に聴いた曲の印象度が好きな曲に影響を与えるという仮説より、年代別に音楽の志向性を調査することが重要であると考えた。

次に、調査対象者の音楽に対する関心度を知るため、「音楽を聴くことが好きですか？」「日常的に音楽を聴いていますか？」「音楽を聴かなかったという日はありますか？」という 3 つの質問を設定し、「はい」と「いいえ」の二段階評価で回答を求めた。

また、好きな曲と思い出が結びついているか、人生の転機・青春時代が思い出として記憶に残っているかを調査するために、「好きな曲はありますか？」という質問を設定し、「はい」と「いいえ」の二段階評価で回答を求めるとともに、「曲名」「アーティスト名」「聴いた時の年齢」「好きな理由」の 4 項目について記述式での回答を求めた。

仮説を検証するためにアンケート結果を検討したところ、若年層世代や青春時代の出来事や経験（初めて買った CD や初めて行ったライブ、恋人や友人・家族と一緒に聴いていた、学校生活や部活で演奏した、当時流行っていた）などが思い出として曲と結びつき、記憶されていることが分かった。加えて、嫌いな曲についても若年層世代や青春時代に聴いた印象が関係しており、ジャンルの好みや出来事と結びついていた。

人は、自ら聴こうとする音や音楽でなければ耳に残ることは少なく、また、約 9 割が意識的に音楽を聴いているということがわかった。さらに、好きな曲・嫌いな曲ともに、若年層世代や青春時代の思い出とリンクして記憶していることが分かった。そこには当時の流行り（誰もが聴く機会のある売れているアーティストの曲）が理由として挙げられることから、時代の流行りによる外的環境と個人の内的環境がマッチした時に「好きな曲」「リンクする曲」だと識別されると考える。

結論として、「仮説 1.好きな曲は、若年層世代に聴いた曲の印象度が高い」、「仮説 2.若年層世代の中でも、人生の転機に聴いた曲と結び付けられる」は、ともに明らかに支持されたといえる。

氏　名	金澤　奈々	学籍番号	J016012	ゼミNo.	5
テーマ	女子大生の美容に関する意識について				

1.研究の動機

私は美容に関することが好きで今までに様々なサロンに通ってきた。美容の中には小顔矯正など 1 回の施術で劇的に効果が感じられるものもあれば、脱毛など数年通わないと効果が出ないものもある。自分は少しでも綺麗であり続けたいので、友人に「お金をかけすぎ」と言われるくらい、これまで美容に関してたくさんお金をかけてきた。

本学に通う女子学生が、美容に関してどのような意識をもっているかに興味を持ち、研究を始めた。

2.研究方法

まず美容の種類や基礎知識、年齢別の悩みなどを調べ、さらにダイエットや摂食障害についても関連した文献やインタネット上の資料から調べた。また、本学の学生を対象としてアンケート調査を実施し、その集計結果に考察を加えた。

3.結論

アンケート調査の結果から、本学の学生は「人からどう見られるか」を気にすると同時に「自分自身が綺麗でありたい」ということが分かった。「毛穴等の肌トラブルでエステに通いたい」という回答も複数見られたが、反対に「小じわ」「くすみ」が気になる女子大生はあまり居ないことが分かった。

また「脱毛」を期待する学生は多くみられた。ドラックストアで除毛クリームや脱毛ワックスなど試す人も友人に多い。

調査結果を総括すると、顔より身体を重視している人が多い傾向にあることが分かった。しかし拒食症になった経験を持つ学生は少なかった。

最近、芸能人が整形するケースが珍しくなく、若者の整形に関する偏見も少なくなってきていると思う。整形に係る費用も、医療ローンを組むことで対応できる場合もあり、保護者同伴だと中学生から美容整形手術が可能である。今後、さらに美容に関する意識は変化していくと思われる。

4.参考文献

・美容整形とは、https://kotobank.jp/word/美容整形-121337、2019 年 12 月 7 日。

・女性の年代別悩み、https://womanslabo.com/c-marketing-190821-1、2019 年 12 月 1 日。

・ダイエット・摂食障害、https://www.ci-labo.com/item/supplement/diet/article/00000064/、2019 年 12 月 4 日。

氏　名	楠本　真由	学籍番号	J016015	ゼミNo.	5
テーマ	幼児期の運動遊びについて				

1. 研究の動機

私が小さい頃、家の近くの児童館や公園、小学校のグラウンドで友達とよく遊んでいたが、今では、公園や小学校のグラウンドで遊ぶ子どもの姿はあまり見かけない。親子で外遊びをする姿もあまり見かけないことに気が付いた。

2011年度の文部科学省の調査で「子どもの体力は年々低下している」という結果が判明した。将来、幼児教育に携わる者として、子どもの体力低下の原因は何なのか、幼児期に適切な運動遊びにはどういう遊びがあるのかを調べることにした。

2. 研究方法

子どもの体力低下の現状と文部科学省が策定した幼児期運動指針について調べた。また運動遊びについて、子どもの運動発達、子どもの体力についてまとめた。そして保育所・幼稚園実習を経験した本学子ども専攻の2・3・4年生を対象に「幼児期の運動遊びの意識調査」を実施して、調査結果を集計し考察を加えた。

3. 結論

現在の子どもの体力は、親世代と比べて体力が低下している。子どもの体力の向上のために文部科学省は「幼児期運動指針」を発表し、スポーツ庁は「遊育」という取り組みを行っている。

現代の子どもは、テレビゲームなどの室内遊びの増加や公園や広場の規制により遊ぶ種類が限られている。そのため、園や家庭で体を動かす時間を増やすことが求められる。今回実施したアンケート調査結果から「実習で園児と一緒に屋外や室内で運動遊びをしている人が多い」ということが分かった。園によってさまざまな運動遊びが行われていて、友達と協力する遊びや集団で行う運動遊びなど、多くの種類のものが実践されていた。

私が考案した運動遊びは、子どもが楽しめる運動遊びを第一に考え個人戦やチーム戦で遊べるものを目標にしたものである。遊びの中で子どもたちは、創造力や知恵を働かせて遊びに参加している。このため、運動遊びでも体力向上のほかに集中力を高める効果にもつながると期待している。

運動遊びには運動機能を上げる遊びがたくさんあるので、これからも運動遊びについていろいろ研究していきたい。

4. 参考文献

・桐川敦子、「保育園・幼稚園のわくわく運動遊び」、成美堂出版、2017。

・日本発育発達学会、「幼児期運動指針 実践ガイド」、杏林書院、2014。

・文部科学省「1 子どもの体力の現状と将来への影響」、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344530.htm、2019/12/8。

氏　名	髙岡　未佳	学籍番号	J016025	ゼミNo.	5
テーマ	子育て支援事業について				

1．研究の動機

近年、核家族化や地域社会の交流の希薄化が進み、子育ての悩みを抱えたとき「周囲に相談する人が居ない」「他人に助けを求めにくい」と対応に悩む子育て家庭が多くなっている。政府主導で「子育て支援事業」が進められているが、この事業が何をし、どのようなものなのかが把握しにくい。将来保育に携わる者として、幼児教育現場に出たときに困っている家庭があれば教えてあげられるように、卒業研究のテーマとして調べることにした。

2．研究方法

子育て支援、子育て支援事業、子ども・子育て支援新制度、子育て支援事業に関する保護者の理解の度合いや要望を知るために、本学に来られる保護者を対象として子育て支援に関する調査Ⅰ・Ⅱを行った。そして、子育て支援に関する調査Ⅰ・Ⅱの集計と考察を加えた。参考文献やWebページを検索し、資料を収集した。

3．結論

「子育て支援事業があること自体は良い」と考えている保護者の方が多い。しかし最近、保育者による虐待などがメディアで話題となっていることで子育て支援事業や保育者に対して不信感を持っている人が多くなっている。また、保育の質や保育士不足についても懸念している保護者が多いと思う。

子育て支援事業に対する認知度が低いと考えていたが、意外にも認知度は高かった。このようになった背景には、子育て支援事業に政府が積極的に力を入れ始めたこと、テレビ等のメディアで子育て支援事業について話題となってきたことが関係していると考えられる。その背景には、これまで政府が行ってきたやり方で、様々な不正や事件が発生し、同時に、少子高齢化が進み、今後の展望が不安になってきたからであると思う。

子育て支援事業を推進することは大切である。しかし、現在の問題点を解決していかないと子育て支援事業を設置した所で意味のないものになり、推進することは困難になってくる。そうならないために、保護者たちの声をいかに政府が受け止め、どう対策していくのか。また改善し、政策にどう組み込んでいくのか等、今後早急に対応が出来るかに期待が高まっている。

4．参考文献

・子ども・子育て支援新制度について（令和元年６月）－内閣府
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/pdf/setsumei.pdf

・松山市ホームページ　https://www.city.matsuyama.ehime.jp/index.html

・松山市　保育・幼稚園課、「令和元年　松山市保育士出前講座」資料、令和元年。

氏　名	續木美里	学籍番号	J016034	ゼミNo.	5
テーマ	情報技術者の育成について				

1．研究の動機

パソコンやスマートフォンは、今では日常生活で欠かせない情報ツールとなり、2020年度からは小学3年生からを対象にプログラミング教育が必修化される。この背景として、Webエンジニアをはじめとする IT 人材の不足が挙げられる。

超少子高齢化のいま、技術者の高齢化により引退する人が増加している。この万年技術者不足を解決するためにはどうすればよいかを研究テーマにした。

2．研究方法

文科省のネット資料から「小学校プログラミング教育の手引き」「学習指導要領」を参照し、プログラミング教育の目的を見出した。さらに、最近の社会動向を書籍やネット記事から調べた。

3．.結論

日本のプログラミング教育は、世界的にもかなり遅れている。経済産業省が発表した「IT 人材の最新動向と将来推計に関する調査結果」によると、2020年に36.9万人、2030年には78.9万人の IT 人材が不足すると予測している。今後も IT 関連のビジネスは拡大していくと予想される一方で、それに対応する IT 人材の数が追いつかないと予想されている。

小学校におけるプログラミング教育とは「プログラミング的思考」を身に付けることであり、「論理的思考力」を磨いていくことで「プログラミング的思考」に至る。「論理的思考力」を重視することで、筋道の立った議論を行う土壌が育成される。結果として、IT 人材の確保が容易になると考えられる。

今後、少子化はますます進み、さらに老齢化した技術者は死を迎え減少する。社会の頼りになるという AI 技術が、柔軟に引き継がれなければ、社会は混乱が避けられない。機械が暴走したときに、誰も止めることができない。今後の社会に対応できる技術者の養成が必要である。

今後求められるスキルは、次々と開発・普及されるサービスと共に高度化する。世界の IT 大国と比較して、日本には多くの課題が残っており、これからの進歩と可能性を期待したい。

4．参考文献

・藤沢晃治、「分かりやすい表現」の技術　意図を正しく伝えるための16のルール、講談社、1999年。
・神永正博、食える数学、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2010年。
・Mike Gancarz 著(芳尾桂監訳)、UNIX という考え方、オーム社、2001年。

氏　名	松下　奈月	学籍番号	J016044	ゼミ№	5
テーマ	日本の貧困の現状と対策について				

1．研究の動機

日本のGDP(国内総生産)の規模はアメリカ、中国に次いで3位と高く、G7(主要先進国7か国)の内に入り、各諸外国との交流、紛争地域や発展途上国に対して人員派遣や資金援助を行い、国外に対しても貢献している。ところが、G7内において、日本の相対的貧困率は、アメリカに次いで2位という高い比率である。

昨今では貧困が子どもにも影響し、貧困の連鎖が起こっている。日本の貧困の現状、子どもの貧困とどのように関わっているのか、その対策はどうなっているのか、に興味を持ち卒業研究のテーマとした。

2．研究方法

内閣府、総務省等の日本国内の関係機関のホームページから、子どもの貧困に関する調査結果や現状を調べ、子どもの貧困に関する対策等の考察を行った。

3．結論

従来「ひとり親家庭」という枠組みではなく「母子家庭」という枠組みで母子家庭を中心として援助されてきたが、「母子及び寡婦福祉法」が「母子及び父子並びに寡婦福祉法」と改正されてからは母子家庭だけではなく、父子家庭であっても援助を受けられるようになった。結果的に、どの家庭の子どもでも平等に援助を受けることができるようになったが、父子家庭に対する援助のほうが実は受給される金額は少ない。

令和元年10月から幼保無償化、令和2年4月1日からは高等教育の無償化が実施される。高等教育の無償化も国公立と私立によって上限額の違い等があるが、授業料・入学金の減免が実施され、子どもが乳児のころから成人するまでの間、学習面での援助がより手厚くなった。次年度以降の結果報告で事態が好転することを期待したい。

核家族化し多様化した世帯で、単身、ひとり親、低所得者でも貧困から抜け出せるような支援や、頼れる人の存在がすくない貧困家庭の家族へ受けることができる詳細な援助や助けてくれる人がいる機関の周知を行うことが大切である。そして、現在苦しんでいるすべての人が、貧困から抜け出す道を見出すことができるのではないかと考える。

4．参考文献

・令和元年11月29日閣議決定　子供の貧困対策に関する大綱、https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/pdf/r01-taikou_gaiyou.pdf、2019年12月24日。

・内閣府　第1-2-2表　相対的貧困率の国際比較（2000年代半ば）、https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h22honpenhtml/html/zuhyo/hyo1212.html、2019年12月10日。

氏　名	松原　万乃	学籍番号	j 016045	ゼミNo.	5
テーマ	子どもの名付けについて				

1．研究の動機

私の名前は「万乃（まの）」である。幼い頃から「どう読むの？」と尋ねられたり、誤って「まんのちゃん」と呼ばれたりし、私の名前は「キラキラネーム」なのか？と思ったこともある。昔と現代では大きく違う子どもの名前について、関心を持った。子どもの名付けをする場合に、どのように決めたら良いか、またこれまで、どのような名前が多く付けられてきたか、に興味を持ち、卒業研究のテーマに決めた。

2．研究方法

主にインターネット資料を参考にして、人の名前についての問題、時代の変化により変わってきた子どもの名前、名前で起きた事件について調べた。また、本学学生を対象として、現代の若者がキラキラネームについてどう思っているのかを調査し、集計結果に考察を加えた。

3．結論

子供の名付けは、ほとんどの親が悩んでしまうものであり、たくさんの名づけ本や、名づけに関する画数占いなども参考にする人も多い。

しかし、そんなありきたりな名前を嫌い、新しい斬新な名前を提案し、子育て雑誌の名づけ表に掲載されるようになった。すると、読者からの反応は思いのほか大きく、その名づけ表を参考にして名前を決めたという人も多かった。そのあたりから徐々に「キラキラネーム」と呼ばれる名前が生み出され、今や「キラキラネーム」が日常化してきた。

子どもが可愛く、「他と被らない名前」を、「個性的な名前」と考える親も少なくはないが、極端に奇抜な名前は、親だけが個性的だと思っていても社会の目は冷たく、笑われたり、悪く言われるケースがないとは言えない。

子どもの今後の人生を考えて、変更しなければ困る名前を付けるべきではない。

4.参考文献

・ウンサーシュッツ・ジャンカーラ、現代日本における名付け事情とその変遷―男性名と女性名の変化に着目して―、立正大学心理学研究所紀要 第14号、89－99、2016。

・【悪魔ちゃん命名騒動】本人の現在と父親のその後、https://anohitohaima.tokyo/post-280/、2019年4月10日。

・「キラキラネーム」の受難…就活やビジネスで不利は本当か？、https://dot.asahi.com/dot/2016071900097.html?page=1、2019年6月15日。

氏　名	眞鍋　香緒里	学籍番号	J016048	ゼミ№.	5
テーマ	スマホ育児の現状と子育てへの対応について				

1.研究の動機

近年、バスや電車などの公共の乗り物を利用する子連れの方や、買い物中ベビーカーに乗っている乳幼児がスマホを利用する姿を目にすることが多くなった。育児にスマホを利用する「スマホ育児」という言葉も生まれるほどスマホは日常生活に溶け込んでいる。では、「スマホ育児」は子育てに有効なのか、安全に利用できているのか、その現状や子どもへの影響、子ども向けアプリについて研究しようと思った。

2.研究方法

文献やインターネット資料などから、スマホのアプリの現状や影響について調べ、年代で比較した。子ども向けアプリを実際にプレイし、安全性や操作性を調べた。さらに、保護者を対象とした「スマホ育児に関する意識調査」を実施し、回答を集計し考察を加えた。

3.結論

「スマホ育児」は有効であるが、子どもが使いたいときにいつでも利用できる、親がスマホに夢中で子どもの働きかけに答えないというのは、子どもの身体や発達への影響を考えると有益とは言えない。スマホを利用する際の約束事を決め、上手にスマホと付き合っていくことが大切である。

子ども向けアプリに関して、「保護者のアカウントでアプリ・設定を管理」「利用時間が制限できる」「広告が表示されない」ということが、安全性を考えると最低限必要になると思う。上手く活用することができれば、子どもの学習や知育に有効である。さらに、視覚的に物事を捉えることができるので、障害を持った子どもの学習や生活習慣を身に付ける際に実際に活用されている。スマホ時代と言われる近年では、スマホと上手に付き合っていくことが大切と言える。スマホは使い方次第で良くも悪くもなるということを、理解しておかなければならない。

4.参考文献

・川島隆太,『スマホが学力を破壊する』,集英社,2018年。

・『家庭の知育応援サイト　知育アットホーム』、
http://chiiku-at-home.com/shitsuke-smartphone-risks、2019年10月28日。

・『乳幼児の親子のメディア活用調査　2013年』、
https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=3197、2019年10月5日。

・『乳幼児の親子のメディア活用調査　2017年』、
https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=5208、2019年10月5日。

氏　名	真鍋　侑里子	学籍番号	J016049	ゼミNo.	5
テーマ	大人のための絵本の魅力について				

1. 研究の動機

大学で保育を学ぶことで、絵本に触れる機会が増えて、絵本に興味を持つようになった。

子どもが読むのと大人が読むのでは、絵本の内容の捉え方にどのような違いがあるのか。大人が絵本を読むことでどのような効果や影響があるのか。また、子どもや大人に限らず絵本を読むことでどのような効果があるのかについて研究した。

2. 研究方法

絵本の種類や絵本を読むことの効果、大人に人気の絵本について調べた。また、子どもと大人で見方の違う絵本をいくつか挙げ、考察を加えた。

3. 結論

大人にとって絵本とは、癒しにもなり、新たな「教え」や「気付き」に出会える存在にもなると思う。

絵本には作者からのメッセージが含まれており、読む年齢、読むタイミングによって絵本から感じるメッセージが異なることも、大人に絵本が人気な理由の一つだと感じた。小さい頃に読んだ絵本でも、大人になって読んでみると、また違った捉え方が出来る。

大人が絵本を読んだら、癒しや新たな気付きを得ることが出来る。絵本を読んで癒される時間は、その人にとって大切な時間になり得る。また、絵本はその考えを押し付けたりはしないため、素直に受け入れられやすい。

この効果を活用することが出来たら、ストレスフリーな社会に近付くことが出来て、周りに相談できずに一人で悲しい思いを抱え込んでしまう人が減ると思う。

今後、絵本のすばらしさを多くの人に伝えていきたいと思う。

4. 参考文献

・柳田邦男、『大人が絵本に涙する時』、平凡社、2006年。
・絵本ナビ、https://www.ehonnavi.net/、2019年12月26日。
・ベネッセ教育総合研究所「読み聞かせの実態と言葉の発達」、https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/KORE_2019_spring_data.pdf、2019年12月26日。
・絵本セラピスト協会、https://ehon-therapy.jp/、2019年12月5日。
・『読み聞かせは心の脳に届く』（くもん出版）刊行 | KUMONメディア、https://www.kumon.ne.jp/press/327/、2019年12月15日。

氏　名	宮田 夏帆	学籍番号	J016052	ゼミNo.	5
テーマ	吹奏楽コンクールの曲選択について				

1．研究の動機

自分は小、中、高校と吹奏楽部に所属していた。その活動の中で夏の全日本吹奏楽コンクールは大きな存在であり目標であった。しかし、実際にコンクールの舞台にたち、評価を受ける立場になるとコンクールの審査結果に疑問を感じることが多くなった。そのため、吹奏楽コンクールの審査について詳しく知りたいと考え、今回の研究に取り組んだ。演奏の技術面は抜きにして、どのような曲を演奏すれば賞が取れるのか、過去の自由曲や課題曲の審査結果の傾向や吹奏楽の歴史などを調査し考察を行った。

2．研究の方法

2009年から2018年までの吹奏楽コンクールの課題曲、自由曲のデータを調査し、部門ごとにまとめ、比較対象を行った。自分のコンクール出場経験を活かし、実体験も含めデータを集計し、考察を加えた。

3．結論

課題曲では、ほとんどの部門でマーチ曲が選ばれている比率が高く、金賞も多く受賞している。マーチ曲は単調なリズムが多く演奏しやすいのも選ばれている理由の一つである。そのため、全国大会金賞を目指すための課題曲はマーチ曲であるほうがいいと言える。

自由曲では、編曲作品においては「中国の不思議な役人」、オリジナル作品では「宇宙の音楽」「ルイブルシュアによる変奏曲」「ディオニソスの祭り」、邦人作品では「マインドスケープ」が金賞を受賞しやすいということが分かった。

上記に挙げた曲は、吹奏楽コンクールの自由曲において根強い人気を誇っており、選ぶ団体も多いことが金賞を受賞しやすいという結果につながると思われる。

しかし近年では、編曲作品、オリジナル作品と比べて邦人作品が多く演奏されている傾向にある。これから先の吹奏楽コンクールでは、邦人作品が強くなるのではないだろうかと思う。

4．参考文献

・福田滋、日本の作曲家と吹奏楽の世界、ヤマハミュージックメディア、2012年。
・阿部達利、自由曲集計(バンドジャーナル2月号)、音楽之友社、2019年。
・吹奏楽コンクールデータベース、http://www.musicabella.jp/concours/、2019/12/15。
・全日本吹奏楽連盟、http://www.ajba.or.jp/、2019/12/6。
・朝日新聞　吹奏楽コンクール、http://www.asahi.com/edu/suisogaku/、2019/12/6。

氏　名	岡田　芽衣	学籍番号	J016008	ゼミNo.	6
テーマ	犬・猫殺処分対策の現状と課題				

第一章　研究の動機と目的

私は小さい頃から家で猫を飼っており、動物と触れ合う機会が多くあったという事もあって動物が好きだった。しかし1年間に殺処分されてしまう動物はたくさんいる。県や市によってどれだけ数に差があるのか、どのような対策を行っているのか興味を持つようになった。

犬や猫の殺処分数や、現在どのような対策をしているのか、地域ごとに殺処分数や対策を比較し、そこから見えてくる課題や改善点を踏まえて、少しでも殺処分されてしまう動物が減るように対策を考える。

第二章　研究の結果

四国四県と東京都の殺処分数を調べ、多くの動物たちが収容、殺処分されている。上記の地域が行っている対策には、譲渡会や猫の不妊・去勢手術の補助、譲渡前の説明・講習会など様々なものがあると分かった。しかし殺処分数は年々減少しているにも関わらず、なぜ愛媛県は殺処分数ゼロを達成できないのだろうと疑問に思うようになった。そこで殺処分数ゼロを達成したことがあり、殺処分対策に効果を挙げている地域のどのような対策を行っているのか調べることにした。

殺処分対策で効果を挙げている神奈川県、札幌市、熊本市、広島県の殺処分数と対策を調べ、四国四県と東京都とどのような違いがあるのか比較した。一つ目は、譲渡の内容で、四つの地域は譲渡前に厳しく講習会を行っている。二つ目はインターネットの写真で、譲渡動物の一覧に、性格に加え一匹一匹の写真を掲載している。

第四章　研究結果から考える対策

一つ目が野良猫の不妊・去勢手術である。子どもを産む猫を減らし、これ以上猫の数がむやみに増えないようにする。二つ目は譲渡前の講習会を行うことだ。これは動物を飼うことへの責任や、終生飼養が出来るのかどうかを見極める。三つ目は譲渡動物の詳しい性格に加え写真をインターネットに掲載することだ。これは写真を見た人が興味を持ちやすくなるようする。四つ目は積極的に譲渡を行うことだ。

参考文献

環境省　統計資料
https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html
科学技術コミュニケーション　2018年7月
「ピースワンコ・ジャパンの活動：広島県から犬の殺処分0を全国へ」　大西純子
https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/71123/1/07_onishi_59-66.pdf
認定NPO法人　えひめイヌ・ネコの会　http://ehimeinuneko.chu.jp/dogcat/?page_id=113
等

氏　名	岡林　氷奈乃	学籍番号	J016009	ゼミNo.	6
テーマ	「女らしさ」は必要なのか				

1．研究の動機

普段よく「女らしさ」という言葉を耳にする。「女らしさ」とはそもそも何なのか、みんなが思う女らしさとは何なのか、「女らしさ」は必要なものなのか。女は女らしくするべきなのか。身につけるといいことがあるのか、いいことばかりなのか。色々な疑問が出てきたので「女らしさ」をテーマにすることにした。

2．研究の目的と方法

本研究では、松山東雲女子大学に通う学生の考える「女らしさ」に対する考えをインタビューから探り、文献にも当たりながら「女らしさ」の必要性を考察したい。インタビューの時期・対象者・質問項目は、2019年12月16日～20日に、松山東雲女子大学の学生11名（18歳～22歳）および参考として同年代の男性3名にも行った。インタビュー項目は、①あなたにとって女らしい人はどんな外面か、②あなたにとって女らしい人はどんな内面か、③女らしさを身につけたいと思うか。（女子大生のみ）とした。また、文献として『女に生まれてモヤってる！』やネット上での考え方を調べて女子大学生の考え方と比較してみた。

3．インタビューの結果

インタビューから次の点がわかった。

① 外面でも内面でも自分が求めているもの（美しさ・清潔感・正しい言葉遣い等）をもっていると女らしいと思う傾向がある。②女らしさを身につけることの利点は、自分に自信が持てたり、周りにたくさん評価されるようになることだと考えている。③女子大生は「女らしさ」を身につけたいと思っている。文献等から、「女らしさ」を身につけるには、何か特別なことをしなくても、日常生活で読書をする習慣をつけることでもよいという考え方があることがわかった。

4．まとめ

以前は、「女らしさ」はそれほど必要ではないと思っていた。女らしさが役立つとは思っていなかったからである。その時は、男性にもてる為だけのことだと思っていた。しかし、調べた結果、女性らしさは、人によって感じ方が違うが、イメージするものはほぼ同じだということが分かった。また、女らしい人は同性からも憧れを持たれるし、仕事についたときにもそれが役立つ場面があるのだと知った。自分に自信が持てたり、気分が明るくなれたり、何事にも意欲的に取り組めるようになるところにもその利点があると思う。私も女らしさを身に付けて自分に自信が持てるようになりたい。特に、仕事をする上で女らしさを長所にし、女目線でしか分からない感性や価値観を持ち、男では気づかないような気づかい、配慮ができるような女らしさを身に付けたい。身に付けることによって、いい点があることを友人たちにも伝えたい。

氏　名	小田　乃愛	学籍番号	J016011	ゼミNo.	6
テーマ	本田圭佑に学ぶメンタル強化の方法				

1．はじめに

私は、柔道をしているが、試合で緊張するのは、プレッシャーに押しつぶされるという気持ちの弱さが体の動きに影響するのではないかと考える。 世界から注目され，期待されているスポーツ選手はプレッシャーが大きいと思う。本田圭佑選手はビッグマウスと言われ、ストイックでどんな時でも強気な発言と行動、周りに流されず自分をもっている。そこで本田選手を対象に、彼の性格や試合、練習に対する考え方やメンタル強化の方法など、について明らかにしていきたい。

2．本田圭佑について

本田選手はアスリート家系に産まれたが、元からメンタルも強くはない。不安な気持ちを誰よりも練習することで不安な部分をそぎ落としている。本田選手は強さを作り出すのは自分自身の努力次第であると言っている。

今の本田選手が世界一にこだわるようになったのは、小さい頃、親、親戚、先生、サッカー指導者からの教育である。親から学んだこと、父親から学んだもの、祖母・祖父から学んだものが一番大きく、すごく影響を受けてきた。幼少期から何事にも一番を目指して努力している。

3．本田選手の努力の方法

①　夢と目標を持つこと

夢に向かって明確な目標を持ち続け努力している。

②努力を自信に変える

自分自身を追い込んで人一倍練習を重ね努力し、それを自信に変えている。

③挫折は過程と考える

失敗ばかりでも最後に成功という結果を得ることができれば、それは失敗ではなく過程に変わるという考え方をしている。

4．まとめ

今回調べた範囲では、本田選手のメンタルの強さは自然と養われており、具体的なメンタルトレーニングはしていないことが分かった。彼は、考え方を前向きにすること、目標に向かって誰よりも努力して自信をつけている。本田選手は、臆病な自分を超えるためにあえて自身に重荷を課したり、呪文のように強気な発言を繰り返したりすることで、独自の方法でその緊張に打ち勝ち、普段通りのコンディションで試合に望み、最高の結果を出している。私もこれから努力をすることと失敗を恐れず次に進む前向きな気持ちを常に持ち続け社会人としてどんな困難にも挫けず頑張っていきたい。

氏　名	下地　唯	学籍番号	J016021	ゼミNo.	6
テーマ	幼児教育における保育士の方言使用について				

第1章　研究の動機と目的

普段当たり前のように使っている言葉は、幼少期から使っている言葉である。そのため、幼少期における言葉の獲得は重要であり、周囲の大人が使う言葉の影響は大きい。本研究の目的は、共通語と方言ではどちらを使う方が、幼児教育にとっていいのかはっきりさせたいことである。自分が保育していく上で、言葉が子どもたちに与える影響は大きいと思うため、保育士の使う言葉、特に方言と共通語の使い分けについて考える。

第2章　子どもの使用する方言

幼児の方言使用の実際を把握するために、エピソード記録から方言を採取し、幼児のコミュニケーションの中で、方言がいかに使われているのか調査した。方言は例えば「〜んよ」「〜やけど」等の文末表現や「おる」等の語形変化でよく現れる。全ての会話に方言を使用している子どもは60人中45人(75%)であった。

第3章　幼児教育の中での方言教育に関する先行研究

先行研究では、幼児からの方言教育の必要性について方言を消滅させないため、誤解を招かないようにするなどのために方言教育は必要であるという考え方もあったが、愛媛では幼児には教育として方言を学ばせる必要はないと考える。しかし、方言を使っている絵本を読んでみると他地域の方言について知ることができるので、言葉に対する愛着や興味が育つのではないかと考えた。

第4章　幼児教育の中の方言教育

今回の研究を通して、実際に子どもと関わることを考えてきたが、方言と共通語のどちらを使用するのがいいのかという答えにはたどり着くことができなかった。むしろ、たどり着くことは出来ないのではないかとも思った。なぜなら、子どもたちにとって方言は当たり前に話し言葉としてあるからだ。子どもたちに、方言または共通語だけを使用するよう強要することは必要ないと思った。保育士も、子どもが自由に言葉を使うことができるよう、子どもたちと共通語や方言を気にすることなく自由にコミュニケーションをとることが望ましいと思う。

また、保育所や幼稚園で子どもが方言を使ったり、方言を使う環境に影響を受けて使うようになったりすることについて、保育士は個性として捉えることが必要になってくるのではないかと考える。

引用文献

・言語教育の基礎としての方言教育　佐藤髙司　2015
・方言教育学は成立するか　山田敏弘　2006　　　　等

氏　名	西窪　彩花	学籍番号	J016038	ゼミNo.	6
テーマ	女性の「社会参加」、男性の「家庭参加」を促すために				

1.研究の目的

今、多くの家庭が男性も女性も働くといった共働きの形をとるようになっている。しかしながら、まだ家事や育児は女性がするものという今までの社会が築いてきた考えが残っているように感じる。そこで、今後増えるであろう共働き家庭にとって、男女ともに気持ちよく負担なく家庭と仕事とを両立させるためにどのような制度が必要なのか考える。

2.共働きに対する法的制度

育児休暇は、法律適応外なので権利の保障や給付制度などはない。これに対して育児休業は、育児介護休業法という法律であり、様々な権利が保護されており、収入減を補う給付制度もある。育児介護休業法は時代の移り変わりにしたがって変化している。少しずつではあるが男性が育児休業を取得しようと思えるような方向に進んでいるのではないだろうか。

3.都道府県が行なっている子育て支援制度

都道府県、市町村など様々な自治体で制度を作り、子育て支援に取り組んでいる。妊娠・出産、子育てまでをしっかりとサポートする環境を整えている。また、身近なものであるWebサイトやLINEでの情報提供をすることでより安心感を持って子育てをすることができるようにしている。

4.共働き、子育てをしている人の実際の声

「子育て家庭訪問インターンシップ」に参加させていただき、共働き、子育てをしている2家庭の方の実際の声を聞いた。ひとくくりに共働き家庭といっても様々な家庭の形があるということが分かった。家庭によって困っていることも、自治体に対するニーズも異なっていた。

5.まとめ

これからの共働き家庭がよりよくなるように二つの提案をする。一つ目は「育児アドバイザー」である。インタビューを踏まえて考えると、男性の育児休業取得率を上げるには、上司からの声かけではなく、育児を経験した同僚からの話を多く聞くことが大切だと感じた。だからこそこれからは「イクボス 」ではなく「育児アドバイザー」が浸透するべきだと考える。二つ目は普段から保護者の方と関わりの多い保育士・幼稚園教諭、小学校教諭などが行政と家庭との仲介役になるということである。この取り組みをすることによって、普段から感じている小さなもどかしさ、かゆさに手の行き届くような支援を作ることができるのだ？はないかと考える。

氏　名	井上亜里沙	学籍番号	J016004	ゼミNo.	7
テーマ	ことばが作り出すイメージについて				

●はじめに（研究の動機）

本を読むことで物語の情景を思い浮かべる力が備わると考える。しかし作者自身に言葉の力が備わっていないと、思い浮かべた情景と書き出した言葉を一致させることは難しいと思いこの研究を行うことにした。

●研究の目的

自分が書いた小説を製本して他者に提示する。ジャンルを問わず様々な本を読んで得た私自身の言葉の数とイメージする力が小説を書くことによってどれだけ読み手に伝わるのかを知りたい。

加えて、表紙のデザインを行うことにより、色や形によって言葉が伝える情報を引き立てることができるのか確かめたい。

●研究の方法

小説を書くが、テーマは四季をモチーフとする。それぞれのエピソードに相関関係はないものとする。また、内容を想像させる表紙のデザインを行い、言葉と色彩、形のイメージの関連性について考察する。

●小説制作

各季節をイメージするものをメモ用紙に書きだし物語を構成した。

小説を書くにあたり大切にしたことは、これまでの人生経験の中から小説を書く糸口を見つけるようにしたことだ。

●考察

例えば、寒暖などそれ以外に感じようがないことは受け取り方に個人の差はないと思われる。しかし、日常の中にあるものから何かを感じるかそうでないか、気に留めるか留めないかには大きな差があるのではないだろうか。

どのような人にも作者の作品に対する思いやイメージをより明確に読み手に伝えるには、日々の何気ない風景をいかに想像しやすく言葉で表現できるかがカギとなると考える。

●まとめ

作品は色々な人に読んでもらった。まず表紙のない小説では、私が思い描いた人物像や風景と一致する人としない人がいた。次に表紙をつけたものを読んでもらった。表紙があることでイメージが明確になったという意見があった。恐らく、表紙により提示するイメージが読み手に与える情報は様々な受け取られ方をし、それが小説の感想にも影響しているのでないかと考える。しかし、本研究はその詳細までを追跡調査するには至らなかった。表紙に色彩や形があることの意義は認められるコメントがあったが、どのようなデザインが好ましいかということについては今後の課題となった。

氏　名	井上由梨奈	学籍番号	J016005	ゼミNo.	7
テーマ	絵画制作において「好き」なものを描く意味				

はじめに・研究の目的

好きなものを描く絵画制作によって制作者自身や鑑賞者に何が残るか、作品を制作するうえでの「好き」などの前向きな感情の大切さを明らかにする。そして、なぜ絵を描くのか、作品の何が評価されるのかについて考察して、自己理解につなげたい。

研究の方法

趣味的な題材から離れ「猫」を人間に見立て、「人間の普通の生活」をテーマとして描くことで、多くの人にとって普遍性のある作品を目指す。それは自分の作品として成立するのかを確かめる。また、中世の庶民の日常をコミカルに描いた『鳥獣戯画』と自作を比較し、何が描かれているか、どのような時間の流れがあるかを考察する。

卒業制作と『鳥獣戯画』

自分の作品では「猫」を人間に見立て日常を描くことで鑑賞者に想像の世界に迷い込んでもらいたいという狙いがあり、一方で『鳥獣戯画』でも動物を人のように描くことを通じて当時の人間の営みを描くことで、人間社会をみつめているのではないかと分析する。時代背景や情報技術の点で異なる両作品だが、大衆の生活に対して視点がある制作であるという点で、両者は比較できると考えた。

猫の部屋作り

好きな動物である「猫」と筆者の日常にある「好きなもの」を組み合わせて日常生活の一部を切り取った一枚絵を描く。その際、「好き（なもの）」を描くことで何が残るのかを深く理解するため下描き時と完成時の自分の感情のメモを取る。

考察

『鳥獣戯画』と卒業制作を比べてみて、この両作品はどちらも作品を細部にわたって観ると‘描かれた人の生活が見える’という共通点を持つ。作者の経験したものや作者の生きた時代背景などが、どちらの作品にもうかがえる。作者は、絵を描くことで「字のない日記」を残しているのではないか。作品には「作者自身」が反映される。

・作品に対する評価について

「良い作品」とされる基準について小学校でも評価の観点は技術の面だけではなく、作品にどれほど作者の感情が表現されているかを重視する内容が述べられている。すなわち、絵を描くときの「好き」という前向きな姿勢は評価されることだといえる。

まとめ

「好き」を描くことは他者とのコミュニケーション方法で、作品は文字のない日記となる。私にとって「好き（なもの）」を描くことは感情を表現し、整理するための手段であり、それが後に文字のない日記という位置づけで鑑賞者の記憶にも残り得る。人は自分が生きてきた証を残すために、絵で「好き」を描いていくのだ。

氏　名	合田綾花	学籍番号	J016016	ゼミNo.	7
テーマ	新居浜市における祭りの存在				

はじめに　（研究の動機と目的）

多くの新居浜市民は、「新居浜太鼓祭り」を愛している。大学入学を機に初めて新居浜を離れ、「なぜ祭りが好きなのか」と問われることが非常に多く、それまで当たり前のように身近に感じていたこの「祭り」とは、新居浜市民にとってどのような存在であるのかについて深く追求したい。また、「祭りが好き」という感情を表し、作品を見る人へ新居浜太鼓祭りの魅力を伝えることを目的として、祭りを主題にした作品制作に臨みたい。

研究の方法

祭りに関する先行研究や、筆者自身の経験、実習で捉えた子どもたちの姿などから考察を行う。また、太鼓台の「布団締め」と呼ばれる、金糸で刺繍が施されている部分に着目し、筆者にゆかりのある「萩生西太鼓台」の布団締めをモデルとしたミニチュア作品の制作を行う。

新居浜と祭り

祭りの時期になると、新居浜市内の多くの保育施設では「お祭りごっこ」が行われている。園で子どもたちや保育者によって作られた小さな太鼓台をみんなで担ぎ、お祭りを味わう活動だ。また、市内のほとんどの小学校では「お祭り集会」が行われている。校区の太鼓台が小学校に集まり、子どもたちが太鼓台に直接携わるという体験を交えながら、お祭りや太鼓台に触れることができる。同時期に、保育施設や小学校では、太鼓台や祭りに関連する作品を制作することも多い。このようなことから、新居浜市民にとって祭りは、幼少期から身近な存在であることがわかった。

「直接体験」としての祭りの意義・考察

文部科学省の HP で、幼児期の重要性について、『幼児期は、（省略）生涯にわたる人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期である。幼児は、生活や遊びといった直接的・具体的な体験を通して、（省略）人間として、社会の一員として、より良く生きるための基礎を獲得している』と記述されている。ここではその解釈を新居浜市民の場合に置き換えて考えたい。祭りに参加すること、行事や制作から伝統文化である祭りにふれることなどの「直接体験」を通し、郷土に親しみを持ち愛すること、地域の繋がり、地域社会の中の一員という自覚を持ち、周りの人々と共同体となって物事に取り組む姿勢などを、「祭り」によって培うことができると考える。新居浜市民にとっての「祭り」というのは単に年中行事としての役割だけではなく、幼少期から生活に深く根ざし、身近に結びつき人生において大きな存在になっている。

氏　名	髙橋　真紀	学籍番号	J016027	ゼミ№	7
テーマ	きつねとたぬきの言い伝えについて				

1.はじめに　動機と目的

「日本的なものに惹かれる理由」を動物に関する伝承から考察する。四国にはたぬきの言い伝えが多く、きつねの伝承は少ない。その理由を考えつつ、四国のきつねとたぬきに関する伝承について文献で調べていく。そこには動物の霊力を信じることが背景にあり、人間だけが持つ信仰心が潜んでいると考えられる。研究の方法は、先行研究や伝承から人々の信仰心について調べることとする。また、卒業制作できつねの面を作ることで、「日本的なものの魅力」を表現したいと考えている。造形的な側面から動物を主役とした民間伝承が持つ世界観を、「四季」をイメージして表現してみたい。

2. きつねとたぬきの伝承を知る

四国のきつねの伝承…「四国にきつねがすくないわけ」という話より、四国には野生のきつねはいるが、きつねの話がほとんどない背景には、きつねが四国から出ていったため、きつねに関する物語がないとされている。

四国のたぬきの言い伝え…「喜左衛門と屋島の禿」という話と「列車に化けた狸」という話の二つの引用から、四国にたぬきの伝承が多いのは、たぬきが何かに化ける力を持っているという人々の考えからくる畏怖の感情によるものと、喜左衛門狸という狡猾なたぬきはどこか身近な存在であり、なお眷属として神社で祀られるほど神通力を持っていたので人々から親しまれ、崇拝の対象になっていたことが考えられる。

きつねとたぬきの印象について…きつねとたぬきには、どちらとも昔話や童話に登場すること、また人や他の生き物を化かすという共通点が見られる。しかし、きつねは山神や神に仕えるものとしての一面を持つと考えられ、たぬきは眷属でもあったが、むしろ妖怪に近い特性を持っていると考えられていたことから、きつねとたぬきの印象の違いが出てきたと推測される。

張り子面の制作…きつねの張り子面を四つ制作し、「四季」をイメージして表現する。

研究し制作する中で見えたもの…面に描いた模様や、季節に関係する道具を用いながら写真撮影を行うことで、四季のイメージを自分なりに表現することができた。作品制作では、失敗を重ねて成功が見えてくることが大切だと気が付いた。

3.考察

動物にまつわる伝承から、「日本的なもの」について考えてきた。人は生活する中で、神や霊魂、化け物(動物)などを「見えないモノ」として畏れる。そうした見えないモノを信じ、畏れながら悪事をしないなど一人ひとりが意識し、自分を律して生活することが「信仰心」の一つの側面だと考える。また、私は和風なものに漠然とした憧れに似た気持ちを持ち続けてきたが、今回の研究で、「和」の雰囲気は、さまざまな形で人々が時間を超えて伝承してきたものの中に色濃く残っているという理解が進んだ。

氏　名	田中瑠莉	学籍番号	J016031	ゼミ№.	7
テーマ	自己表現や治療行為としてのコラージュ				

研究の動機・目的・方法

筆者は、コラージュという技法そのものが醸し出す独特の存在感や、「人とは違う作品である」という作品の主張がしやすい点に着目し、コラージュ作品を作りたいと考えた。また、コラージュで動物図鑑を制作すれば、保育現場で子どもたちにこれまで以上に動物を好きになってもらえたり、作品を通じて直接コラージュに親しんでもらえるかもしれない。そして真似をして私と同じようにコラージュを試みてくれるかもしれないと考えた。実際にコラージュによる『生き物図鑑』を制作し、子どもたちとともにコラージュの体験制作を行いたいと考えている。

コラージュの持つ社会的役割

教育や医療の現場でどのような役割を果たしているのかを調べた。学校現場では制作の有効な手段として使われていることはもちろん、医療現場では「コラージュ療法」により手軽にカウンセリングを行うことが可能になることに加えて、これにより箱庭療法や他の療法が向いていなかった患者の方にも治療を実施することが出来るという。コラージュ作品を通じて目に見える形で状況を確かめることができ、治療のより良い改善に繋がるとのことである。

（森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕『コラージュ療法入門』創元社.1993）
（溝上義則『アートセラピーbasic』新興医学出版社.2019）より

造形教室での実践

子どもたちの自己表現の現場では、制作のひとつとしてコラージュは有効である。年齢によっては難しいと思われたので、幼児にでも出来るコラージュの簡単な方法として細切れの材料からの見立てという造形あそびを実施した。幼児でもあらかじめ形が出来ている材料の切れ端から連想をして、生き物を作ることが出来るのではないかというものである。筆者が動物を見立てて制作した作品を見せ、子どもたちの言動を観察した。その結果、こうしたコラージュのやり方によって子どもたちが一つの正解にとらわれず、楽しみながら自己表現をする姿が見られた。コラージュが子どもたちの創造性に影響することが確かめられた。

作品「生き物図鑑」について

今回、作品としての生き物図鑑を制作した。最初は漠然と色々な素材を貼り付けていたが、コラージュを何度も繰り返しているうちに表わしたい動物によって貼り付ける素材をこだわって選ぶようになり、幅広い素材で動物の魅力を引き出すことが少し出来たと感じている。

まとめ

社会的にも幅広く活用されていて、手軽に実践でき、意外な効果が得られるコラージュに興味を持ってもらいたい。そして作ることの楽しさ、表現することの面白さを知ってもらえるような魅力的な作品を制作していきたい。

氏　名	豊田　智愛	学籍番号	J016035	ゼミNo.	7
テーマ	手づくりのものが子どもに与える影響				

「はじめに」

私の幼少期の記憶から、ひとりの大人として、幼少期にたくさん触れるであろう絵本を手作りし、大人が子どもたちのために何かを手作りすることの重要性について述べることにする。また、「手作りのものは何であっても子どもにとっては世界に一つのもので、大切なものである」ということに言及してみたい。

「研究の目的・方法」

実際に自分で絵本を作り、既存の絵本との感じ方の違いや素材の変化がもたらす影響、雰囲気の違いなどがどのように受け取られるかについて考えてみたい。

既存の絵本を題材とし、材質やサイズを変えて、受け取られ方の変化を確かめる。

「制作の実際」

画用紙・フェルト・手描きの3種類の絵本を作る。画用紙・手描きの絵本では、強度や色移りを考慮し、ラミネートフィルムを貼った。安全性のため、端に透明テープを貼り、手を怪我しにくいようにした。フェルトの絵本では、フェルトだけでは不安定だったので、間に段ボールを入れることにより安定のあるものになった。

「考察」

作品は子どもにたくさん触ってもらえるよう、安全性と強度にこだわった。児童クラブの子どもたちに喜んでもらえた。作品を作っている中で、私の母は私に何かを作っていてくれていたときこんなにもたくさんのことを考えていてくれていたのだと気がついた。母が色々なことを考えながら私の為に作ってくれたものは私にとって世界に一つだけのとても大事なものになるのは必然だということに気がつくことが出来た。

「まとめ」

私は、今回の制作で今まで気がつくことができなかった事にたくさんあることがわかった。私にとって、母の作ってくれたものは大好きだったし、母の作ったものが褒められると自分も褒められている気分になっていたなと思いだした。

今回の制作で色々な事を考えながら制作したし、ひとつ一つに思いが詰まっているものだし、時間もかかっている。そんな母の愛に気がつくのは私が大人になったからかもしれない。私自身気がついたのは、写真や実物を大人になって見たときに改めて自分のために‥‥ということだ。母の愛に気がついたとき私はとても満たされた気持ちになった。私だけでなく、子ども達にもこうした愛情が必要である。

将来、自分に子どもができた時に今回の経験を生かしつつたくさんのものを手作りしてあげたいと一人の大人として、こころの底から思った。

氏　名	北條朱莉	学籍番号	J016042	ゼミNo.	7
テーマ	ダンボール遊具の可能性				

1.はじめに（動機と目的）

幼少期に私は、児童館のイベントでダンボールの遊具で遊んだ経験がある。ダンボールといえば、物を入れて運んだりするための素材であると多くの人が考えるであろう。用が済めば家に置いておくには邪魔になり、すぐに処分するかリサイクルに出す。しかし、ダンボールはどんなに重い物を入れても、遊具として人が乗っても破れたり、壊れたりしない。物を入れたり、保護したりする脇役であるダンボールを工夫して、私が経験したように子どもたちにも遊んで楽しんでもらいたいと考え、ダンボールの制作を行うことにした。また、子どもたちにも実際に制作してもらい、ダンボールを使って制作することの楽しさを知ってもらいたいと思う。

2.方法

まず、ダンボールで「お城」を実際に作ってみる。実際に作ってみることによって、保育現場で子どもたちと一緒に大きなものを作れるものなのかを考える。

次に、実際に私が作った作品を保育現場に持って行き、作品を見せた時の子どもたちの反応を確かめながら、子どもたちにも実際にダンボールで制作してもらう。作り終えた作品をどのように遊びに取り入れるのかも観察したい。

3.制作過程と保育現場での調査

どのようなものを作りたいのか、デザインを考える。デザインに沿ってダンボールを使って制作、装飾をする。完成したものを保育現場に持って行き、5 歳児と一緒に制作をする。興味を示さない子どももいると思っていたが、子どもたちはみんな予想以上に積極歴に制作に取り組んでくれた。

制作が終わった後も自分たちの作品を使って遊びに発展した。完成した子どもたちの作品を見て、子どもの創造性、想像力の豊かさに驚きを感じた。

4.まとめと今後の展望

今回ダンボール制作をしようと思ったきっかけは、実習で訪問したすべての園でダンボールが制作の素材として置かれていないことに疑問に感じたからである。実際に制作した園の子どもたちもダンボールでの制作は初めてだった。ダンボールは取り扱いやすく、手に入りやすい。そして、強度もそこそこにあり、制作の素材として適していると考える。そして、ダンボールは紙製のため、温もりもある。実際に現場でこんなにも積極的に取り組んでくれたダンボール制作は、子どもたちに楽しみながらあそびを想像させる素材のひとつとして取り入れるべきであると考える。ダンボールを含むたくさんの素材を使って子どもたちの創造性を広げ、五感を通じた遊びを豊かにする活動を展開していきたいと考える。

氏　名	松本奈々	学籍番号	J016047	ゼミNo.	7
テーマ	一人遊びについて ～作品を介して他者とのコミュニケーションをどうとるか～				

はじめに（研究の動機と目的・方法）

誰しも一人で遊ぶ“一人遊び”をした経験があるだろう。これは日本人にとどまらず、世界中の子どもたちが何らかの形で経験しているはずである。

私は幼稚園時代、友達と玩具の取り合いをすることなく、すぐに貸していた。これは家で満足に一人遊びが出来ていたからである。私の一人遊びは小学校高学年になるまで続き、対人関係でトラブルを起こすことはほぼなかったが、他者に素直な気持ちを伝えることが今でも苦手である。そこで一人遊びを多くする子どもは他者とどのように関わっていけばいいのか、作品を制作することを通じて考えていきたい。具体的には作品『一人サーカス』を作り、それを自分で楽しむだけでなく他者に披露してみたい。これは、アレクサンダー・カルダーの一人で演じるサーカスの映像を見たからだ。一人の高齢男性がサーカスを動かしている姿に衝撃を受けたのと同時に魅力を感じた。その姿は一人で芝居を演じているようにも見え、自分の一人遊びと共通点を感じた。この作品を完成させ、一人遊びとしての「一人サーカス」を人前で演じて反応を確かめ、その意義を考察したい。

本論

一人遊びは一人芝居にも通ずるのではないか。自分が制作する『一人サーカス』は一人芝居のように演じたいと考える。芝居としてのサーカスには脚本が必要である。演じるイメージづくりのために、子ども向けと大人向けの物語を書くことにした。二つに分けた理由は、観る側に感性の違いがあることを予測したからだ。これらを書くことにより、サーカスにまつわる登場人物の複雑な人間模様を設定し、表現することが出来た。これらの脚本は、筆者の上演に役立つものだと考える。脳科学者の茂木（2010）は、「与えられた設定や決まりごとの中で遊ぶより、ルール自体を自らつくって遊ぶほうが歓喜の度合いが大きい」とする。一人遊びはルールに縛られず、自分で作ったルールを楽しむ方が喜びは大きいという。これは私の「一人サーカス」を上演するにあたって非常に参考になる考え方だった。そして、実際に作品『一人サーカス』を本学学生の前で上演し、反応を確かめた。

結論

一人遊びからは自分の好きなことを見つけ出せる可能性もあり、それは好きなことをとことん突きつめられる遊びである。誰にも見られず孤独な遊びであると思われがちだが、やり方次第では他者と関わることができ、自分の得意なことを見せる機会ともなる。『一人サーカス』を制作し、それを第三者に見せる実践を通じて、コミュニケーションを取ることが苦手な人にも少しずつ克服することが出来るひとつの方法を提示できたのではないかと考えた。

氏　名	山本　美幸	学籍番号	J016058	ゼミNo.	7
テーマ	絵本による子どもの育ち				

1.はじめに（動機と目的）

私は高校時代から実際に絵本を制作・実践してきた。この経験から、絵本という媒体は子どもだけでなく、大人に対しても意味をもつものであることを確かめることができた。特に、子どもの場合には絵だけでなく、何らかの仕掛けがあることで幼児の興味・関心をさらに引き出せることに有効である。そこで、絵本の魅力を追求しながら、子どもはどんな絵本・物語に惹きつけられ、絵本を見ること・読むことで何が育つのかといった問題意識を明らかにしていくために、子どもたちの感性の育ちに繋がるダイナミックな仕掛け絵本の制作と、これを使った読み聞かせ実践を通して絵本を深く理解することを目指した。

2.方法

まずは、絵本に関する先行研究を調べる。次に、選んだお話の another story という形で飛び出す絵本の制作を進める。さらにこの内容をより引き立てるために、比較の対象として原作の物語をパネルシアターで再現する。そして、これらの作品を保育現場で実践することで、作品の実用性と子どもの反応を確かめていく。

3.制作過程と実践

仕掛け絵本の制作に取り組むにあたり、仕掛けの仕組みの理解から入った。そして、物語の展開、仕掛けの入れ方を考え、絵コンテをつくりながら制作していった。完成したパネルシアターと仕掛け絵本を東松山こども園に持って行き、4･5歳児の前で上演と読み聞かせを行った。その結果、想像以上に子どもたちはお話を楽しんで聞き、サイズの面から仕掛け絵本が大人数向けではないという予測を覆した。

4.まとめと今後の展望

仕掛け絵本に取り組む中で、まずは自分自身が楽しんで制作に取り組むことが子どもたちの感性の育ちに繋がると感じた。今回は、パネルシアターと仕掛け絵本に取り組んできたが、子どもがペープサートやエプロンシアターなど様々な特徴を持つ表現媒体に出会うことは、同じお話であったとしても興味・関心を持ちやすくなると予測される。今後比較検討を行う必要がある。

また、絵本は大人、読み手がいることで内容が深く伝わり、子どもの育ちに大きな影響を与えるものになる。絵本を読み聞かせる大人が本好きになれば、絵本好きの子どもたちが増えていくと考える。

氏　名	山下 真由子	学籍番号	J016501	ゼミNo.	7
テーマ	「イメージしたものを造形であらわす」				

はじめに（動機と目的）

筆者は3歳の時からクラシックバレエをしていた。踊らないときにはノートに衣装や髪飾りのデザインやトウシューズ、踊っている人物を描いていた。いつかそれらを形にしてみたいと思っていたが、大学では造形が必修で、ものを作り出す機会に恵まれた。制作のイメージを持ちやすくなり、「いつか形にしてみたいと考えていた衣装の実現」に取り組むことにした。本研究にて制作するのはバレエの衣装である。自身のイメージを具現化することで、ずっと見たかったものを実際に形にしていく喜びを味わいたい。制作する過程と、幼児がイメージをもって造形表現を行う場合との関連性について考察し、制作の指導のイメージを持てるようにしたい。

方法

クラシックバレエの歴史や演目（経験したもの、または今度やってみたいものなど)、衣装について調べ、それぞれの演目についてのイメージをまとめる。作品制作では、衣装を飾るためのトルソーを3体作る。トルソーに合わせて自分がイメージした衣装のデザインを考え、必要な素材を探し、ミニチュアとして制作する。さらに「着てみたいと思った服をイメージしたことがあるか」といった作品制作に関連するアンケート調査を取り、近い世代の人たちが同じような経験を持ったことがあるのかについて調べる。

バレエのミニチュア衣装の制作過程

まず、トルソー3体を制作した。経験した演目として「海賊」、今後やってみたい演目として「鏡の踊り」、オリジナルの衣装は白を基調としたものを制作した。材料はサテン、ジョーゼット、レース、ブレード、チュールなどを用意し、ミニチュア用の型紙を使って、ミシンや手縫いで制作した。

まとめ

一つ一つ作品を作っていくうちに、手作りすることが充実した時間に感じられ、夢中になった。幼児も遊びや制作の場面では、思いついたイメージを膨らませ、身近な材料でそれらを表現したりすることで夢中になることもある。今回の制作のように特殊な素材を使えることは、表現することにおいて大きな魅力となるだろう。「見てみたいもの・実現したいもの」という目標（憧れ）を持つことが制作の後押しをしてくれる。アンケート結果からは、同世代の多くが実際に作るとなると困難さを感じつつも、筆者と同じく衣装に関する憧れを抱いた経験があることがわかった。人は大人になってからも、何かに憧れて夢中になれることを持ち続けられる。

今後、現場でものを描いたり作ったりしていくときには、テーマや制作環境を整えて、子どもたちがあこがれをもって制作していけるように導きたいと思う。

氏　名	宮崎百佳	学籍番号	J016051	ゼミNo.	8
テーマ	LINE トークに対する使い始めから現在までの気持ちと個人の性格の関連				

問題と目的　携帯電話の普及に伴い，会うだけでなく，LINE のアプリを使用したコミュニケーション手段も使用されるようになってきた。加藤（2013）は，SNS が日常生活で形成されている関係の中で使用されるため，SNS でのやり取りが現実世界の人間関係に影響を及ぼす可能性があることを示唆している。そのため，LINE を用いたコミュニケーションは，会えない距離感を埋めるためにも重要になる。LINE に限らず，新しいことを始める時は楽しみだが，続けていくと飽きるなど，始めた頃と現在では気持ちに変化が生じることもある。そこで，本研究は，LINE を使い始めた頃から現在までの気持ちの変化に着目して LINE トークのやり取りや使用頻度と個人の性格の関連性を明らかにすることを目的とする。

方法　調査は，松山東雲女子大学・短期大学の学生，計 228 名を対象に Big Five 尺度，LINE 使用尺度を用いて質問紙調査を行った。LINE 使用に対する気持ち（6 項目）は最も当てはまる時期を 5 件法で回答を求め，LINE を使用し始めた最初の頃を 1，直近 1 年間を 5 とした。

結果と考察　その結果，LINE トークのやり取りの人数と個人の性格には，相関関係と有意な影響が見られた。具体的に，やり取りの人数と外向性との間には有意な負の相関が見られた（$r(217) = -.188$，$p < .01$）。そして，個人の性格を説明変数，LINE トークのやり取りの人数を目的変数として重回帰分析を行ったところ，外向性が LINE トークのやり取りの人数を有意に予測していた（$R^2 = .039$；外向性：$b = -0.14$，$SE = 0.06$，$\beta = -.18$，$t(213) = -2.33$，$p = .02$）。また，LINE に対する気持ちの変化について，「すぐに連絡を取れるのが楽しい」，「既読無視が嫌」，「返事が待ち遠しい」の 3 項目は使い始めた頃，「返事を返すのが大変」，「スタンプが便利」の 2 項目は直近 1 年間で感じている人が多かった。「やり取りを終わらせにくい」は，使い始めた頃に感じた人と，直近 1 年間に感じた人は同じくらいであることが分かった。そして，LINE に対する気持ちの変化と個人の性格では，調和性と「やり取りを終わらせにくい」との間に有意な正の相関，調和性と「既読無視が嫌」との間に有意な負の相関が見られた（順に，$r(148) = .253$，$p < .01$；$r(122) = -.193$，$p < .05$）。そして，個人の性格を説明変数，LINE に対する気持ちの変化を目的変数として重回帰分析を行ったところ，調和性が「やり取りを終わらせにくい」を有意に予測していた（$R^2 = .075$；調和性：$b = 0.11$，$SE = 0.04$，$\beta = .25$，$t(144) = 3.003$，$p = .003$）。これらの結果から，外向性の高さは LINE のやり取りの人数の増加を説明した。また LINE 使用時の気持ちで「やり取りを終わらせにくい」は LINE の使用歴ではなく，個人の性格と関係し，調和性が高くなると使い始めた頃よりも現在の方がやり取りを終わらせにくいと感じることが分かった。

氏　名	三好　真歩	学籍番号	J016053	ゼミNo.	8
テーマ	女子大学生におけるゲーム利用と社会性の関連 ：ゲームのジャンルに着目して				

問題と目的　藤・吉田（2009）は半構造化面接をもとに，ゲーム上では現実生活の既存の対人関係に煩わされずに，自分の好きなように他者との交流を楽しめるため，現実のストレスを効果的に解消できることを示した。谷口（2009）は，女子大学生を対象に，テレビゲームに対するイメージ評価を規定する要因として，ゲーム世界への没頭・ゲームへの執着依存・社会的娯楽利用・ネガティブ印象・ポジティブ効果を挙げ，ゲームへの没頭・依存あるいは他者との関係性が，若者の日常生活におけるゲームとの関わり方を決定する重要な要因であると指摘した。本研究は，藤・吉田（2009）が示した「自己の表出」，「他者との関係」，「現実生活とのバランス」に着目して，ゲーム利用によってどのような影響が表れるか検討する。それらに表れる良い影響と悪い影響をゲームソフトのジャンルごとに関係性を検討する。

方法　松山東雲女子大学 1 年生から 4 年生 164 名に質問紙調査を実施し，ゲーム利用状況，過去現在に利用したゲームタイトル，好きなゲームジャンル，多く所持するゲームジャンル，ゲーム利用時の特徴，普段の生活，ゲームに対するイメージを尋ねた。

結果　本研究ではゲームジャンルを 15 個にまとめ，それらを上位概念として【学問・頭を使うもの】，【自分・他者との関わりがあるもの】，【与えられた試練・課題をこなす，競うもの】の 3 つを想定して分析を行った。ゲームジャンルの上位概念 3 つを説明変数，ゲーム利用時の特徴と普段の生活の因子を目的変数にして重回帰分析をおこなった。【自分・他者との関わりがあるもの】は自己開示，自己客観視と没入的・依存的・非日常的関与を有意に予測していた（R^2=.06，b=-1.73，SE=0.75，β=-.27，t(107)=-2.33，p=.022；R^2=.14，b=-2.40，SE=0.65，β=-.40，t(106)=-3.68，p=.00)。また，3 つの上位概念全てが依存・関係形成・攻撃的言動を有意に予測していた（学問・頭を使うもの：R^2=.12，b=-0.83，SE=0.41，β=-.22，t(107)=-2.03，p=.044；自分・他者との関わりがあるもの：R^2=.12，b=-1.23，SE=0.33，β=-.41，t(107)=-3.75，p=.000；与えられた試練・課題をこなす,競うもの：R^2=.12，b=-0.85，SE=0.33，β=-.28，t(107)=-2.55，p=.012)。

考察　【自分・他者との関わりがあるもの】は，自己開示，自己客観視，没入的・依存的・非日常的関与について有意に予測し正の関連があった。自分と向き合い，他者のことを知ることのできるゲームジャンルには，自分のことを相手に伝えたり自分のことを知ったりできる良い影響がある。一方で，ゲームに依存してしまうことでゲーム以外のことがおろそかになってしまう悪い影響が示唆された。3 つの上位概念全てについて，依存・関係形成・攻撃的言動を有意に予測し正の相関があった。そのため，特定のゲームやゲームジャンルが依存・関係形成・攻撃的言動を促しているわけではないことが示唆される。

氏　名	山内　美佳	学籍番号	J016056	ゼミ№	8
テーマ	女子大学生のキラキラネームに対する意識と価値観の関連性～キラキラネームの印象，キラキラネームを名付ける親への意識，将来子どもに名付けたい名前から考える～				

問題と目的　キラキラネームは男女の判断が付かない，子どもの将来のことを考えていないと言われることもあるが，半田（2012）は，日本人の名前がジェンダーの影響を受けていることを指摘している。このことから，キラキラネームを名付ける親も名前の由来を考えているのではないかと考える。また，これから親世代になる大学生は，キラキラネームの子どもが周囲に増えていたり，ニュースや新聞などのメディアでキラキラネームが取り上げられていたりすることから，キラキラネームを身近に感じることが多いのではないかと考える。そこで，本研究は，女子大学生におけるキラキラネームの意識と価値観の関連性を明らかにすることを目的とした。

方法　松山東雲女子大学，短期大学の学生224名を対象とし，質問紙調査を行った。そのうち，質問紙回答に著しい不備が見られた6名を除外し，計218名を有効回答者として分析対象とした。質問の尺度は，キラキラネームに対する意識尺度（キラキラネームの印象，キラキラネームを名付けた親への意識，将来子どもに名付けたい名前，また，その名付けたいと思う名前がキラキラネームだと思うか）と生き方尺度（板津，1992）を用いた。

結果と考察　生き方尺度（価値観）の探索的因子分析の結果，3因子構造とし，第1因子を他者尊重・責任，第2因子を探求の柔軟性，第3因子を自己追求と名付けた。キラキラネームの印象と価値観の関連性は，すべての因子で有意ではなく，両者には関連性がないことが示唆された。次に，キラキラネームの由来の考慮は，自己追求と有意な関連がみられた。このことから，自己追求が高いほどキラキラネームを名付けた親は名前の由来を考えていることが示された。自己追求をする人は，自分の可能性を追求し続ける傾向があるため，名付けた親目線で考えるのではないかと考えられる。将来，子どもに名付けたい名前がキラキラネームと思うかと価値観の関連性は，探求の柔軟性と有意な関連を示した。このことから，探求の柔軟性が高い人は，興味や好奇心があるため，キラキラネームを名付けることに抵抗は少なく，多くの物事を見聞しようとする傾向も見られるため，名付けられた子ども目線で考えることがあるのではないかと考える。次に，キラキラネームの印象とキラキラネームを名付けた親は名前の由来を考えているかの間には，有意な正の相関が見られた。キラキラネームに肯定的な人もキラキラネームを名付けた親は名前の由来を考えていると思う人も，どちらも親目線に立って考えていると考える。キラキラネームの由来の考慮と将来，子どもに名付けたい名前との間に有意な相関はみられなかった。次に，男児に名付けたい名前と女児に名付けたい名前の間には，有意な正の相関が見られ，男児に名付けたい名前がキラキラネームだと思わない人は，女児に名付けたい名前もキラキラネームだと思わないことが分かった。

氏　名	秋山　寧々	学籍番号	P016003	ゼミNo.	9
テーマ	「松山市における空き家対策の条例と高齢化率との関連性について」				

近年、新聞やテレビを見ていると全国各地で空き家が増加しているという記事やニュースをよく耳にする。それと同時に高齢化も進んでおり、内閣府の『平成30年版高齢者白書』によれば、日本における高齢化率は年々上昇しており、平成29年10月1日時点で全国の高齢化率は、27.7%となったそうだ。今後高齢化が更に進むと同時に、現在社会問題となっている空き家が更に増加していくと予想される。また、空き家が増加している現在、空き家対策を早急に講じる必要性があることが、社会的にも、広く認識されているため、そこで、私は、幼い頃から住んでいる松山市において、現在どのくらいの数の空き家があり、空き家対策として松山市の条例（松山市空家等対策計画）は、どのようなものであるのかに興味を持ち、更には、その空き家の状況は高齢化率と関連性があるのではないかと仮説を立て、これらを関連付けて考察した。

研究を進め、愛媛県の高齢化率、空き家の数などについて述べ、より詳しく愛媛県松山市の空き家に関する条例や、空き家の原因や課題についてなどを述べてきた。調べた結果、やはり高齢化率と空き家化率は関連していると結論付ける。その理由として、まず高齢化率が上昇している現在、同時に空き家化率も上昇しているからである。次に、本稿において、より空き家について詳しく調べた結果、自宅を所有している高齢者の入院や老人ホームなどの高齢者住宅や子供宅などに転居することにより、持ち家が空き家となるのであるケースなど、高齢化が1つの大きな原因となっていることに繋がる理由があった。一方で「公益社団法人全国宅地建物取引業協会連合会」の空き家所有者に関するアンケート調査及びインタビュー調査の報告書によると、空家等対策の推進に関する特別措置法の認知度に関しては、名前を知っており内容についてもよく知っている割合は15.1%であり、名前は知っているが内容についてはあまり知らない割合が27.2%と認知度があまり高くないことがわかる。そのため今後、高齢化や空き家化率は、年々上昇していくと考えられるため、本稿でも述べたように、一人ひとりが様々な知識を増やしていき、各県で行われている政策をもっと広めていくことが1つの対策になると考える。

更には、より多くの住民へ空き家等対策の推進に関する特別措置法を広めていくためには、現在スマートフォンを使いＳＮＳを利用している方が多いため、ＳＮＳを通して告知していくことも周知してもらう一つの手段であると考える。また、最近では空き家の利活用として様々な活用の仕方があるが、私は、空き家を使い、高齢化が進んでいる現在、地域の高齢者の方が集まる場所を作ることにより、一人暮らしの方や、地域との繋がりがあまりない方も、交流することが可能になり、より豊かな地域づくりにも繋がると考える。

氏　名	石田　華乃	学籍番号	P016006	ゼミNo.	9
テーマ	「友達が自分自身に与える影響」				

＜目的＞

私たち女子大生は日々、大学内で同性の友達とコミュニケーションを取ることが多い。その中で「仲のいい友達」「常に一緒にいる友達」という言葉を耳にすることがある。大学進学や意見のすれ違いを機に新しい友達と関わることが多くなった時、自分自身の心境の変化や人格の変化はあるのか否かを研究した。

＜第一章＞

第一章では、性格面での変化、心境面での変化、学習面での変化に分けてウェブサイトを参考に調べた。その結果、友達が自身に与える影響は多大なものであることが分かった。また、自分自身よりも少し学力の高い人と関わることで、学力が上がるという結果も出ていた。それは、人間の性質上、人の真似をして生きていること、同じ行動をとることで理解しようとしていること、自分自身に良いと思うところを吸収しようとしていることが挙げられる。また、小学生などの幼い時は、両親によって友達を選ばされるケースもある。

＜第二章＞

第二章では、自ら学内の女子大学生へアンケートを作成・実施し、実際の経験をもとに結果を集めた。その結果、大学入学後新しい友達と日々を過ごす時間が多くなると、友達の影響で、性格が明るくなり、いい方向に変わった人もいたし、あまり笑わなくなったと、悪い方向に変わっていた人もいた。この結果から友達が自分自身に与える影響は、良くも悪くも転ぶし、多大なものだと言える。それに対し、新しい友達と関わる中で、変化はなかったと答える人もいた。

＜結論＞

結論として、友達が自分自身に与える影響はあるということが分かった。友達と関わる中で友達の影響を受ける場面はたくさんあるため、特に幼児期及び小学生の時の友達選びは最も慎重に行わなければならない。その時の友達選びが未来の自分を決める鍵となると言える。人格の変化や心境の変化の問題だけでなく、性格の変化、学習面での変化など全て合わせて、人一人を大きく変える要因と言っても過言ではないほど重要なものだと言える。また、大学生では、圧倒的に変化が「あった」「なかった」が分かれていることはなかった。真似をする人のほとんどは自分のとる行動や言動に自信が持てなかったり、芯ができてなく、ぶれやすい人に多い。それに対して、アンケートの結果で自信自身に変化がなかったという人は、芯が強く人に流されにくかったり、こだわりが強く、いつもグループの中心に立ってまとめることの出来る人に多かった。

氏　名	小牧　万里波	学籍番号	P016013	ゼミ№.	9
テーマ	**「沖縄が観光地として人気がある理由について」**				

本研究では、沖縄の観光地や特徴を調べると共に、なぜ沖縄を国内や海外の人が旅行先として選ぶのか、旅行先として沖縄の何に期待しているのか、また、沖縄が人気観光地として欠けているところを見つけ改善策を読み解きたいと考えている。

第一章では、沖縄が観光地として人気な理由について考える。私は、沖縄で生まれ沖縄で育ってきた。そんな私の地元沖縄が、今では観光地として国内、海外から人気が出ている。沖縄には、多くの観光スポットがあり全国でも多くの人が足を運び、観光で有名な場所となっている。私が小さい頃に比べると、海外の観光客が急激に増えている。その理由に沖縄の海が大きく関係しているのではないかと私は考えた。

第二章では、沖縄旅行への期待度と満足度について述べる。ここでは、沖縄旅行への期待度と満足度について述べている。沖縄旅行をするにあたっての期待度をグラフ「沖縄旅行への期待度」でもって表し、項目別に見ると、『海の美しさ』で“期待した”が と最も高い。次に『景観』、『森や川の美しさ』と続いており、沖縄旅行においては、海以外の自然への期待も高いことが分かっている。沖縄旅行の満足度を見ると、『旅行全体』では“大変満足”が 59.1%と満足度が高いことが判明している。

第三章では、観光客が利用する宿泊施設とその特徴について述べる。宿泊施設の特徴として、リゾートホテルではビーチリゾートが人気で、全室オーシャンビューを謳っているホテルが多い。まるで海外のリゾートを訪れているかのような非日常感と極上の癒しを体験できるホテルが多いことが分かる。

第四章では、外国人観光客の利用状況と課題について述べる。海外空港路線の拡充や、クルーズ船の寄港回数増加などを背景に外国客が急増し、初の 300 万人を突破した。外国人観光客の対応で困ったことを複数回答で尋ねたところ、言語の問題が多かった。その課題の改善策がいくつか挙げられている。

以上のことから、沖縄に訪れる観光客は海の美しさに大きく期待や満足していることが分かる。これからも沖縄が人気観光地としてあるためには、観光する場所として王道なところだけではなく、沖縄の地元の人しか知らない隠れた場所を地元の人から観光資源になり得る情報を聴き集め、これからの観光名所にしていくこともいいと思った。これからも、沖縄が観光地としてさらに人気が出るように沖縄のいいところを探し、観光客が求めているものを見つけ出していきたいと考えている。その見つけ出した答えを、ＳＮＳを使って日本や海外の人に広めていけたらいいと思う。

氏　名	作道　真奈美	学籍番号	P016014	ゼミNo.	9
テーマ	「果たして人は見た目によって、判断されてしまうものなのか」				

多くの人は服や化粧品や美容室など、外見を飾るモノやサービスを買うためにお金を使っていると思う。飲みに行くとき、友人と遊びに行くとき、恋人とデートのとき、私たちはメイクをし、服や靴を選び、髪型を整えて外出している。それは、人間関係を築く際、第一印象が非常に重要になると考えるためではないか。私自身、初対面の人の第一印象は外見的魅力から入る場合が多い。いったい私たちは、どのくらいの年齢から自身の外見を気にするようになったのか。また、外見を気にするようになった理由はなぜなのか。

私が見た目について気にし始めたのは小学校4年生の頃くらいである。なぜ、そのころに気にするようになったのか考えてみると、気になる異性がいることや、学校という集団への帰属意識などを気にした結果の行動ではないかと考える。結局第一印象は見た目から判断するしかない。『人は見た目が9割』というタイトルの本があるほど、人は驚くほど見た目に左右される。

人が他人から受けとる情報の割合は、見た目・身だしなみ、仕草・表情55パーセント、声の質（高低）、大きさ、テンポ38パーセント、話す言葉の内容7パーセントとなっている。『ノンバーバルコミュニケーション』の研究によると、言葉よりも言葉以外の要素のほうがより多くの情報を伝達している。

ダニエル・S. ハマーメッシュ著「美貌格差」によると「良い顔の定義は文化や時代に関わらずおおよそ同じ」だそうだ。つまり「イケメン」「美女」と思われる顔は、時代を超えて普遍的なメリットがあるといってもいいだろう。ちなみに、美女には「差別と偏見を受けやすい」デメリットもあり、高い仕事の地位にはつきにくい。ただし男性にはその影響はない。

男性は女性を選ぶ際、より見た目を重要視し、女性が男性を選ぶ際は社会的地位や財産等金力を重要視することがわかった。男性の場合、自分より社会的地位が高い女性を恋人として選びにくいということが考えられる。女性は結婚・出産・育児・子育てという将来の人生設計を意識して、経済的、社会的地位も重視することが考えられる。

氏　名	坪内　紫苑	学籍番号	P016024	ゼミNo.	9
テーマ	「アスリートと食事について」				

この研究テーマを卒業研究として取り上げたのは、自分自身がアスリートでありながら、理想の食事をとれていない。そのことから、大学生アスリートがどうすれば手軽にバランスの整った食事をとることができるのかを自分自身を実験台にして検証してみたかったからである。また、食事の重要さをアスリート選手に広めていくことがこの研究の目的であり、必要性でもある。

各競技と各選手の体脂肪量によって必要となってくる一日のエネルギー量は異なる。競技別に分類し、その中でビーチバレーボールという自分の競技に合わせて自らの基礎代謝量と、トレーニング日とオフ日に必要なエネルギー量を求めた。大学生スポーツ選手の現状として朝食の欠食が増加傾向にある。一日の生活リズムを測る指標ともなる朝食を重要視しながら一週間のメニューを考案し実体験した。実体験した結果、気づいたことは手軽にという点にまず密着すると、昼に作っておいた料理を夜にリメイクすることが一番簡単であり、栄養もバランスよくとれ、味に飽きることなく低コストで食事をとることができるという点である。

またこの体験をしてみて最も変わったことは食事に対する意識である。それはいくつか体に変化が起きたからである。まず、三食しっかり食べることによって間食をすることが無くなり、お菓子を食べなくなったことである。次に、私は食事で肌にすぐ変化が現れるのだが、吹き出物が改善されたことである。最後は、試合当日は便秘になることが多いのだがこの食事方法で改善されたことで、いつもより体が動きやすく頭もさえており、いつもより集中することができたように感じた。

次にどうすれば学生アスリートに食事の重要さを広めていくことができるのかである。プロの選手がSNSで食事を掲載しているように少しでも多くの人に見てもらえるように私自身でも広めていきたいと考えている。携帯で検索すれば事細やかに料理の工程が書かれているので料理が苦手な人でも作ることができるのであるから食事の重要さに気づくことが重要である。今回、実践してみたからこそ食事の大切さに気づくことができた。これから競技を続けていくうえでとても大切なことが学生の内に知ることができたのでこれからに活かしていきたい。

今後の課題としては、今回は自分だけが一週間のメニューを体験しただけだった為、個人差があるということである。またこれから、食事の重要さを広めていきたいと考えているが、その成果をデータとしてあらわすことができなかったことが残念である。

氏　名	村上静香	学籍番号	P016040	ゼミNo.	9
テーマ	**『ジブリ映画「千と千尋の神隠し」が現在でも日本歴代興行収入が1位なのはなぜか』**				

本研究においてこのテーマを選んだきっかけは、私が他のどの映画よりもジブリ映画が好きなジブリファンであるからだ。その中でも『千と千尋の神隠し』は、日本歴代興行収入が第1位と人々を魅了した作品であるが、その記録は現在でも塗り替えられていない。実際に私は幼い頃から『千と千尋の神隠し』を何度も無我夢中で観ていた。大人になり、ジブリ作品への思いが大きくなった今、なぜ公開以来 18 年たった現在でも私達を虜にし、日本歴代興行収入が 1 位なのか疑問に思ったのでその人気の秘密について考察を進めたい。

例えば「カオナシ」の存在についてだ。そもそも『千と千尋の神隠し』の世界で「カオナシ」はどういうキャラクターなのか全く理解していない。カオナシは全身黒く白いお面をつけた不思議な登場人物のことで、言語能力がないため「あ」や「え」しか話せない。自分の意思を言葉として伝える事が出来ない。これは、現在における自分が無い人間の象徴ではないだろうか。千尋は「自分の意思」で話す事が出来るが、カオナシはカエル等の「他」を取り込むなどしないと話す事が出来ない。カオナシは千尋の自分がある点に憧れて、千尋について行ったのだろうか。オリジナルの意思がある千尋はカオナシにとって眩しい存在だったと考察できる。

そもそも『千と千尋の神隠し』は主人公の千尋と同年代の少女たちのために作られたもので千尋は「どこにでもいる少女」としてデザインされたヒロインだった。宮崎駿監督は普段からジブリ関係者の子どもたちと親しくしており、彼らのことを「小さな友人」と呼んでいる。千尋のモデルとなった少女も「小さな友人」のうちの 1 人だ。そんな監督だからこそ、子どもたちへ伝えたい思いも特に強かったのかもしれない。『千と千尋の神隠し』が同年代の少女たちのために作られたものでなおかつ日本の現代社会をイメージして作られたことから、私たちの考えに近い作品だと感じた。実際に私がそうであった。捉え方は人それぞれだがこの作品に入りこんだ人は多いはずだ。

これらの点から子どもは可能性を秘めた素敵な年代であること、大人になるにつれこの可能性に限界を感じて生きているのが大人であることがわかる。その大人たちへも幼児期へのノスタルジーだけではなく、夢を見るという「可能性」を持たせる魅力的なアニメ作品、それが『千と千尋の神隠し』であり、日本歴代興行収入が 1 位の理由だと私は思う。

氏　名	西﨑　遥香	学籍番号	P016030	ゼミNo.	10
テーマ	Tokyo 2020 Disaster Preparation Efforts: The Necessity for Multilingual Information in Japan				

The number of foreign residents and tourists in Japan is increasing, and many more are expected to come for the 2020 Tokyo Olympics. However, many foreigners do not understand Japanese. This paper first introduces the use of bilingual signs in Japan, then briefly looks at the use of pictograms and the volunteer labor force providing guidance during the Olympic Games, and finally it discusses the necessity for the multilingualization of information to ensure that non-Japanese, as well as Japanese residents, can take appropriate measures in the event of a disaster during the Games.

Volunteers will be behind the success of making the Olympic Games accessible to all, including non-Japanese speakers. Volunteers working at the 2020 Tokyo Olympics might face many tough situations. First, heat stroke is one of the most important things volunteers need to keep in mind. It will be a problem not only for volunteers but also for athletes and spectators. Additional hardships that volunteers might have to contend with include earthquakes, typhoons, and/or terrorism. If a disaster occurs during the Olympic Games, one problem is how to communicate disaster information not only to Japanese participants and spectators, but also to the foreigners attending. The important thing at the time of a disaster is to provide information quickly so that individuals can act to protect themselves.

In a disaster, people often don't move unless someone actively speaks. It is first necessary for disaster prevention workers to practice the role of leader in training. Then if a disaster occurs, shelters can run more smoothly through the leadership of the disaster prevention staff.

In conclusion, in the few short weeks remaining before the Tokyo Olympics begin, Japan needs to prepare more bilingual information signs across the country and provide information quickly so that both Japanese and non-Japanese individual can act to protect themselves in the event of a disaster. At present, the methods for providing information to foreigners, volunteers, and disaster management are not yet complete. The key to the success of the Olympic games is that they should be enjoyed not only by the Japanese spectators but by all who attend.

氏　名	松村　菜実	学籍番号	P016037	ゼミ№	10
テーマ	The Magic Words of Apology: A Comparison of Apology Styles in Japan and America				

This paper first discusses how the speech acts of apology are different in Japan and America, focusing on how the English expressions "I'm sorry" and "excuse me" differ from the Japanese expressions "sumimasen" and "gomennasai"; then it explains the various points of apology; and finally it describes how the gestures and body language for apologies are different in both countries. When people apologize, they choose from several words of apology depending on the level of apology and on the degree of wrong for which they are apologizing. For example, in English, people say, "I'm sorry" or "excuse me," and in Japanese, "sumimasen" or "gomennasai." However, the words and their nuance are different depending on the degree of wrong.

It is said that Japanese people apologize more than Americans because the word "sumimasen" is used in many instances. However, "sumimasen" is used not only for apologizing, but also for getting the other party's attention, or for expressing gratitude. This paper discusses the different uses of "sumimasen."

According to Sugimoto, there are five differences between Japanese and American apologies: 1) for whose mistake are people apologizing, 2) whether they are sincerely apologizing faithfully to the victim, 3) what contents they are apologizing about, 4) what standard expressions do they use for apology, and 5) what original words do they use for the apology.

People apologize not only with words but also with gestures and body language. Facial expressions, hand movements, and full-body stance are all important gestures of apology.

In conclusion, in English-speaking countries and in Japan, while the framework and levels of apology are similar, the ways people apologize and how they interpret apologies are different depending on the situation. However, in both countries, sincerity must be demonstrated in order to restore relationships.

氏　名	西原　利紗	学籍番号	P016032	ゼミ№	11
テーマ	日本のコーチング ―国際レベルを目指すスポーツ選手の更なる飛躍に向けて―				

日本では、2018年に様々なスポーツでの暴力事件やパワーハラスメントが起きたことを契機に、スポーツ競技の指導者による指導のあり方が問われてきた。本研究では「日本のコーチング」をテーマとし、指導者にはどのような指導が求められているのか、コーチングの理念や日本のコーチングの背景、世界で活躍するコーチの実践例を知り、筆者自身が指導者の立場になった際に実践し、選手を変化させせることができる指針を得ることを目的として進めた。

第1章では、コーチングという言葉の成り立ちについて述べた。次に、コーチングの定義に共通しているのは、コーチは選手の支援者であり、選手が主導者であること、また「変化」「不安」「関係「学習」の要素から成るコーチングの原則から、コーチは自らのコーチングに必要な意識・行動を知ることができることを述べた。

第2章では、専制型・民主型・放任型の3つのリーダーシップ・スタイルを紹介し、コーチングとの対比を行い、コーチングに必要な信頼性の要素について詳述した。

第3章では、練習に対する間違った信仰と迷信が、長く日本のスポーツ界の精神や考え方の基盤となっていったことを指摘し、野球とアメリカンフットボールの具体的な事例を参照しながら、日本のコーチングの課題とコーチの重要性について述べた。

第4章では、国際レベルの選手を育て上げた実績を持つ前卓球女子日本代表監督の村上恭和と、シンクロナイズドスイミング日本代表ヘッドコーチの井村雅代の実践から、コーチングの極意と方法について考察した。

第5章では、コーチングにおいて選手との信頼は無くてはならないものであると同時に、コーチは選手以上に競技について学ぶ姿勢が必要であること、また、指導者には「信じる」「待つ」「許す」の3つの要素が必要であり、国際的に活躍し、実績を残している指導者はこれを理解していることを述べた。

本研究を通して、コーチングは目標を達成するための一つの手段であり、コーチは支援者であること、選手との信頼関係が重要であることを理解することが出来た。そしてスポーツ界での暴力やパワハラ問題は、長く日本に根付いてきた間違ったコーチングによるものであることも明らかになった。またこうした中、国際的に活躍し実績を残してきた選手の指導者達には、指導方法においての共通点が多く、コーチングの理念に踏まえた指導を行ってきたことから、今後の日本のスポーツ界の改革には指導者の改革が必要であることが明らかになった。指導者の指導力の向上と存在が、国際レベルを目指す選手の更なる飛躍につながると考える。

今後、筆者自身が指導する立場になったとき、選手との信頼関係を築くことや常に学ぶ姿勢を忘れないことなど、本研究で学んだことを活かしていきたい。そして、2020年の東京オリンピックでの様々な競技のコーチ・選手の活躍に期待したい。

氏　名	川中　希望	学籍番号	P016010	ゼミNo.	12
テーマ	不登校児童・生徒への理解と支援の必要性について				

問題意識

文部科学省の「児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸課題に関する調査」(2017年)のデータによると不登校児童・生徒は増加傾向にあり、2017年度で不登校児童・生徒は、144,031 人となっている。不登校児童・生徒数の近年の推移をみる限り、このような実状を踏まえたうえで支援の枠組みを整備することがいま改めて求められている。

課題

本稿では不登校の現状や要因を明らかにしたうえで、学校内での不登校への取り組みや学校外での不登校支援の拡充など、子どもの状態に応じた多様な対策や支援のあり方について考察した。特に学校内では、不登校児童・生徒への支援やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどの取り組みなどについて考察し、フリースクールや適応指導教室などでの支援の有効性や課題についても考察を行った。

不登校児童・生徒への支援

学校内での初期の不登校児童・生徒への対応として、登校できた時には、温かい声かけを行ったり、児童生徒の過ごし方や友達との関わり方を気に掛けたりするなど、教員による関わりが重要になってくることが分かった。

学外での支援として適応指導教室やフリースクールなどがあげられた。適応指導教室、フリースクールともに活動内容としては、個別の学習支援や子どもや保護者への相談・カウンセリングを行っているところが多く、各学校が適応指導教室やフリースクールと連携を行い、出席扱いとしていることもあることが明らかになった。

学内での早期対応や支援、教職員間での情報共有、連携の取り方などが大きな課題となっていることが分かった。不登校児童・生徒に対して、多方面からのケアが行えるようにするためには、担任のみならず、学年主任や養護教諭、スクールカウンセラー等が学内外で連携を取りながら、早期に児童と向き合って行く必要がある。

また、不登校児童・生徒に対しての接し方や対応の仕方などを知らない教師もいることを踏まえたうえで、教師に対しての情報提供や学内での連携の取り方などマニュアル化することなども必要であると考えられる。

スクールカウンセラーの配置校数の増加や、配置時間数の確保、スクールカウンセラーの増加などが今後重要になってくる。不登校児童・生徒、保護者共に、相談のできる場所や通うことのできる場所など、広く周知されていくことが望まれる。

氏　名	田中　詩織	学籍番号	P016022	ゼミ№.	12
テーマ	民生委員・児童委員の担い手不足の原因と解決に向けた方策 ～A県B市での調査から～				

本研究では、A県B市の民生委員・児童委員を対象に、現在問題視されている民生委員・児童委員の担い手不足の原因を挙げ、解決に向けた方策を提案することを目的としている。

第1章では、民生委員・児童委員の担い手不足の現状について述べている。民生委員・児童委員の活動期間の短期化や担い手不足が問題となっていることを明らかにした。また、本研究で行うインタビュー調査の参考とするための先行研究を提示した。

第2章では、A県B市の民生委員・児童委員を対象としたインタビュー調査の概要、結果について述べている。インタビュー調査は、9名の民生委員・児童委員に行った。結果としては、どの地域も担い手は見つかっておらず、担い手がいないために仕方なく就任し続けている方もおられたことなどから、民生委員活動にやりがいはあるが大変でもあるという苦労が浮き彫りになった。

第3章では、民生委員・児童委員の担い手不足の原因について述べている。民生委員・児童委員の存在と活動内容が周知されていない、民生委員・児童委員の活動に対するマイナスのイメージ、地域住民の高齢化の3つを原因として提示した。

第4章では、第3章で提示した3つの原因に対する解決策について述べている。周知不足については、行事などでの関わりを増やすだけではなく、活動内容を認知してもらう機会を設けること、マイナスのイメージについては、楽しさや喜び、やりがいなどをもっと表面に出すべきであることを提案した。高齢化が進んでいることについては、高齢化の進んだ地域に若い世帯を取り込むことも改善点のひとつであると提案した。

第5章では、これまで述べた原因と方策を踏まえて、今後の課題を述べている。ある地域で成功した方策は別の地域でも成功するとは限らない。したがって、地域ごとの方策を提案することが重要であると考えた。また、新規の民生委員・児童委員の早期退任についての方策も重要になる。日常生活と活動の両立が難しいことや、活動に関して分からないことが多く手一杯であることから辞められた方もおられた。民生委員・児童委員の担い手の確保と共に、民生委員・児童委員間での繋がりを強化し、孤立化を防ぎ、活動の長期化を目指すべきである。

第6章では、全体のまとめを述べている。民生委員・児童委員に就任するということは、地域福祉の増進に携わる一方で、自己の生活にも少なからず影響を及ぼす。これからの世の中、ボランティア精神に溢れる人材が増え、民生委員・児童委員という存在が若者にとっても親しみやすい身近な存在になればと考える。

氏　名	長井 萌花	学籍番号	P016025	ゼミNo.	12
テーマ	現代日本における若年労働者の貧困の解決に向けた取り組み				

1. 問題意識・背景

戦後の日本社会の歩みを概観すると、1955年から1973年にかけての急速な経済成長の結果、世界的な経済大国となったことはよく知られるところである。また、各世帯における消費・生活水準の向上などを実現させるに至り、それらによってともすればこの国が貧困とはあまり関係のない国になったとも思われるかもしれない。しかし、厚生労働省の「平成28年 国民生活基礎調査の概況」によると、2015年時点の日本の相対的貧困率は15.7%と、約6人に1人が貧困の状況にある。つまり、現代の日本においても依然として貧困は大きな社会問題であると考えられる。その中でも、少子化の克服やディーセントワークの追求といった視点などから、働く若者の貧困の問題がいま改めて注目されている。貧困は、決して目で見てわかるものとは限らず、特に働いても食べていくことが困難である若者が存在していることは、重要視すべき問題の一つといえる。

2. 目的・研究方法

本研究では、上述した問題意識のもとで、若年労働者が貧困に至る背景やその現状について明らかにしていく。特にワーキングプアや不本意非正規雇用労働者に対して、今後どのような対策が必要となるかを国や民間によって現時点で行われている取り組みをもとに考察する。本研究では、働く若者の対象を生産年齢人口及び就職氷河期世代とされる15歳から40代半ばとする。なお、研究方法としては、統計データ・論文等をもとに文献調査を行った。

3. 考察・結論

本論では、若年労働者の貧困の解決に向けて、国や民間で行われている取り組みを整理した。その結果、以下のことが明らかになった。

1点目は、対象者を経済的困窮と社会的孤立に分けている支援団体が見られることから、生活困窮者が経済的困窮によって社会的孤立に至ることや、またその反対も考えられるため、経済的困窮と社会的孤立は密接に関係していることである。

2点目は、対象者の中にホームレスを含む支援団体も見られることから、ワーキングプアになると住む場所を失いホームレスになる可能性も考えられるため、労働に関する悩みがある者からホームレスまで幅広い対象者に支援を行うことが必要となることである。

このようなことから、各支援団体に相談することが若年労働者の貧困の解決に向けての視野を広げることとなり、今後大切になっていくと考えた。そして、国や民間で様々な取り組みが行われていることを、働いても食べていくことが困難である若者たちにもっと知ってもらうことが必要であると考えた。

氏　名	宮下　夕希	学籍番号	P016039	ゼミ№.	12
テーマ	子どもの自殺対策体制の構築				

1.問題意識

厚生労働省・警察庁の「平成30年中における自殺の状況」によると、日本における年間自殺者数は2018年で20,840人であるという。2009年に32,845人を記録してから2010年以降、9年連続の減少を記録している。以上をみる限り、現在の日本における自殺者は減少傾向にあると思われるかもしれない。しかしながら、年齢階級別に自殺者数の推移を見ると、19歳以下は上述した全体の傾向とは対照的に2018年には前年から32人増加し、599人が自殺している。そのうち、学生・生徒等が453人であり75.6%を占めている。それに加えて、自殺した学生・生徒等812人のうち学校問題を原因・動機とした自殺者は2018年で329人(40.5%)であり、自殺の背景に学校が大きく関係していることがわかる。いずれにせよ、子どもの自殺の問題は将来の担い手という政策レベルの視点からも、あるいはまた日本国憲法第13条で定められている「生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利」の保障という視点からも重大な社会問題であるといえるであろう。

2.課題（目的・方法）

以上の問題意識のもとで、本稿では、学校問題を原因・動機とする自殺について、その背景や現状を明らかにするとともに、子どもの自殺対策のために学校内外でどのような対策を行えばよいかを考察していく。

3.考察・結論

本稿では、子どもの学校問題を原因・動機とする自殺について、現状を明らかにするとともに、学校内外でそれぞれどのような対策が効果的であるかという問題関心の下、研究を行った。

まず、現状について、日本全体の自殺者数は年々減少しているものの、学生・生徒等の自殺者数は横ばいであることがわかった。学生・生徒等の自殺者のうち約40%が学校問題を原因・動機としていることも統計データから明らかになった。

そこで、学校内での自殺対策として自殺予防教育、学校外の自殺対策としてSNSによる相談事業に着目した。

今後「学校問題を原因・動機とする子どもの自殺対策」を推進していく上で、①自殺予防教育を進める中で相談できる資源の1つとしてSNS相談事業の普及を行うこと、②スクールカウンセラー等専門職による学生・生徒に特化したSNS相談事業の推進を行うことの2つを提案したい。これらを組み合わせることによって、効率的な子どもの自殺対策体制が構築されるのではないだろうか。

氏　名	黒田　真那	学籍番号	P016501	ゼミNo.	12
テーマ	「最期までその人らしさを支える介護家族の心情」 ～認知症の人を支える家族への支援について考える～				

第1章　はじめに

本研究では、介護家族が抱える当事者としての心情に着目しながら家族支援のあり方について考えていく。

第2章　課題

オレンジカフェ、認知症の家族会に参加し、体験談等を聞くことにより、認知症の方を持つ家族の心情について把握する。

第3章　厚生労働省の介護家族支援マニュアルにおける介護家族支援の考え方

これからの介護家族者の目指す方向性として、「家族介護と仕事や社会参加、自分の生活を両立すること」と「心身の健康維持と生活の質の維持、充実（ひいては人生の質の維持・充実)」があげられていることが分かった。

第4章　オレンジカフェの現状

某オレンジカフェに参加した。そこでは、同じ悩みや不安を抱えた人たちが集まっているので、意見交換がしやすく、地域住民同士、顔見知りから挨拶をする仲になり、友人から友人へと地域住民の輪が広がっていた。「様々な悩みを抱えているが今後も一緒に暮らしたい」、「近くで面倒を見たい」など相手を思いやる気持ちは皆さんに共通しているように感じられた。

第5章　介護家族の現状

家族会の場では、同じ症状や同じ状況でも各家族によって捉え方が様々であり、介護には答えがないということに気づかされた。身内にSOSを発信する場合、ネガティブな発言は控え、情報共有という形にすれば周りも認知症に対して理解を深めていけるのではないかと感じた。また、現時点では、介護家族側の負担はまだ大きいように感じる。「行政等に相談しても取り合ってくれない」、「忙しいのは分かるが、もっとゆっくり相談できる時間が欲しい」と訴える声もあった。

第6章　今後の課題

「周りに理解者がいない」、「一人でいつも抱え込んでいる」、「どうしたらいいのか分からない」と強く訴える方がいた。このような方々にとって介護家族の会のように当事者同士が話し合える場の存在は非常に重要な意味を持つと考える。

第7章　まとめ

長年連れ添った相手、家族に対して深い愛があるのだなと毎回出席させていただくたびに感じた。まだまだ「介護」に対して悩まれている方はたくさんいると思う。その方々の心の拠り所となる会があるということをいろんな方に知っていただくために、私ができることを通して多くの方に伝えていきたい。

氏　名	阿部真彩	学籍番号	P016005	ゼミ№.	13
テーマ	「児童養護施設が抱える問題とその背景」				

1.問題意識

厚生労働省によると、平成29年度の全国児童相談所における児童虐待相談対応件数は、13万3778件でありこれは過去最多で、統計を取り始めた1990年度から27年連続で増加をしている。そこでこれからの社会には児童養護施設といった福祉施設がこれまで以上に必要とされてくると考えられる。また、厚生労働省による児童養護施設入所児童等調査によると、児童養護施設では虐待を受けた子どもは53.4%、何らかの障害を持つ子どもが23.4%と増加しており、専門的なケアの必要性が増している。しかし、児童養護施設には人員不足や児童が抱える不満等、施設内の問題をはじめ、世間の無関心・無理解など今後の社会に対応していけるのかという問題点もいくつかある。そこで、児童養護施設が抱える問題とその背景を明らかにし、今後の児童養護施設の在り方について考えていきたい。

2.研究方法

インターネットや書籍で集めた情報を参考にし、先行研究の結果をもとに児童養護施設が抱える問題を明らかにしていく。

3.考察・結論

児童養護施設には人員不足や施設生活への不満、地域との関わりなど、職員・子どもたち・民間、それぞれの立場からみられる問題があることが分かった。また、これらの問題は制度による背景だけではなく、職員の力量・子どもの心理的感情、また児童養護施設への理解不足が背景にあることにより、問題が起きていることが明らかとなった。

今後、人員不足については就職希望者数の底上げの必要があると考える。また子どもが抱える不満については、職員による専門的ケアが今後更に求められると思われる。地域との関わりに関しては、地域との交流を深めることが地域から児童養護施設へのイメージアップにつながることから地域活動の増進も重要になってくるだろう。

また、それぞれの問題に対し行政が対策を行っているにも関わらずそれでも尚、問題視され続けている点に関し、今後、人員の確保や地域との触れ合いに関する対策がより重要視されると考える。児童養護施設がこれからの社会に対応していくためには、職員が仕事のしやすい環境作り、子ども達が安心して生活できる環境の提供、地域との関わりを深めていくことが重要である。

それぞれの立場から見られる問題を解決していくためにも児童養護施設を様々な角度から捉え、問題を見つけ、その原因を明らかにすることが必要であると言える。

氏　名	小笠原華乃子	学籍番号	P016009	ゼミNo.	13
テーマ	特別支援学校卒業後の課題				

本研究では、新規学卒（高等学校卒）の離職率が上昇している原因は何か、また、離職率を減少させるための方策を考察したい。結果、離職率が上昇している原因としては、「個人的理由」で離職する割合が多かった。「個人的理由」の内訳で最も多かったのは、「職場の雰囲気・人間関係」だった。働く中で「職場の雰囲気・人間関係」というものは、とても重要になる。障害者だけでなく健常者も同じで、どれだけ給料がよくて、雇用条件がいいところでも、「人間関係」がうまくいかなければ、長続きはしない。そのため、「人間関係」をよくするためにも、雇用する側と雇用される側が互いのことをしっかりと理解するべきだと考える。「障害者だから」というように互いが決めつけてしまうと、雇用する側と雇用される側の間の溝はなくならない。互いを理解しあい、溝をなくしていくことで自然と職場の雰囲気も良くなり、人間関係もうまくいくと考える。

離職率を減少させるための方策としては、障害者にとっても健常者にとっても働きやすい環境を作っていくことだと考える。互いが理解しあい、「障害者だから」という理由で仕事や気持ちを制限することは、互いに厳しいものがある。「これをしてほしいのに、障害者だから…」とか「するように頼まれたが、障害者だから…」などの制限をすることにより、人間関係も崩れていくし、職場の雰囲気も良くなくなる。そうなると、障害者も働きづらくなり離職してしまう。そうならないためにも、「障害者だから」という制限はせず、「障害者だけど、こうしたらどうだろう」という可能性を見出していくことが大切である。そうすることで、障害者にとってできる仕事が増えると、仕事をしていく上でのやりがいや楽しさなどを見つけることもできるし、健常者にとっても新しい発見があるかもしれない。障害者にとっても健常者にとっても、働きやすい職場、働きやすい環境を作っていくことが、障害者の就職率を増加させ、離職率を減少させることができる方策なのではないだろうか。

氏　名	篠﨑結希	学籍番号	P016017	ゼミNo.	１３
テーマ	「非行少年における地域支援について」				

本研究では、非行に走りやすい中学生の段階に焦点当て、子どもたちの犯罪関わることを防ぐために非行防止策を検討し、地域を拠点とした支援のあり方を考察していく。

第 1 章では、非行少年の定義、非行少年の現状を述べている。非行少年の現状は平成 16 年以降 14 年連続で減少傾向にあるが、非行少年の再犯率は平成 20 年から増加傾向にある。また、14 歳から 16 歳までの低年齢層で刑法犯少年全体の 53．8%を占めている。中学生が非行に走りやすいことがわかった。

第 2 章では、最近の少年非行の要因として「児童虐待」「発達障害」「有害環境」が新たな視点で注目されている。また、14 歳から 16 歳の少年たちは多くの時間を学校で過ごしているため、「友人関係」は非行に関わりやすい要因である。「児童虐待」「発達障害」「有害環境」「友人関係」など様々な環境の不安定さが性格や行動に大きく影響し、より深刻な非行へと進みやすくなると考えられている。少年院など矯正施設にいる非行少年は、想像する力の弱さや自分の感情をコントロールすることが苦手などの特徴を抱えている。少年たちへの理解や個人の能力も把握し、支援していく必要があると考える。

第 3 章と第 4 章は、非行少年の支援について述べている。少年非行防止活動を行うに当たって、学校を中心に警察署、児童相談所、少年補導センターなど多様な関係機関が連携し、非行少年たちの更生に取り組んでいる。支援機関や住民ボランティアは協力し合い、飲酒･喫煙や深夜徘徊などの不良行為を行っている少年の早期発見に努め、助言・指導する活動や警察官等を外部講師として招き、学校で非行防止教室の開催などの取り組みから少年の初発型非行を未然に防止する環境づくりなどを対策が行われている。

第 5 章は、地域支援について述べている。地域の支援では感情のコントロール、対人とのマナー、問題解決力といった。社会の中で必要なスキルを学ぶ機会を作り、活動することが少年たちの支援につながると考える。このようなスキルを身に付けるためには地域の交流に少年たちが積極的に参加できる環境をつくり、学校に行くだけでは関わりを持てなかった人との交流を通して新たな出会いや自らの成長へとつながると考える。大学生など若い世代と関わりを通して、相談できる関係など頼りにできる存在を作り、その若い世代や地域の住民とともに高齢者や障害者との関わりを持ち、高齢者、障害者をサポートする側として人の役に立つことで社会人としてのマナーの確立につながると考える。地域社会に貢献していくことで、自分をコントロールする力などが身につき、非行に対する意識も変わってくると考える。

氏　名	永山　未央	学籍番号	P016027	ゼミ№	13
テーマ	手話と聴覚障がい ―アンケート調査から考える問題と原因、その課題―				

1．問題意識

大学の語学科目としても取り入れられている「手話」は、障害者基本法第3条三に「言語（手話を含む）」と規定され、日本で初めて手話の言語性を認める法律ができたが、ろう学校での教育に手話を導入する様々な場面で手話による情報保障、手話に対する正しい知識の啓発を行わなければならないことを定める法律はまだないことや、手話を使うことを禁止されていた過去がある。そのためグローバル化社会の現代においても、手話は身近であるといえない。身近な問題として取り上げられることが少ない聴覚障がいと、一つの言語であるにも関わらず使うことが出来る人が少なく、知らないことが多い手話について研究することにした。

2．研究方法

書籍やWeb情報を参考にして調べる。また、手話や聴覚障がいについて意欲・関心が強くある愛媛県のA小中学校の生徒や教員とその比較対象として愛媛県のB中学校の生徒や教員に対してアンケート調査を行い、調査結果を集計し考察を加えた。

3．結論

今回のアンケート調査から、手話や聴覚障がいに対して意欲・関心を持つためには、学校などで手話を取り入れたり、聴覚障がいの方と関わりを持つことが大切だと考えられる。だが、手話を使う職に就きたいと思う人は関りを持っていても少ない。その原因は、身近に手話を使いお金を稼いでいる人や、活躍している人が身近に感じることができていないからだと考えられる。また、聴覚障がいの方で女優や俳優、リポーターとして活躍している人がいるにも関わらず、メディアに出る機会が少ない原因は、手話を使い、読み取ることができる割合が低いからではないかと考える。手話を必要最低限使い、読み取るために学校で手話の授業を取り入れたり、身近に感じるためにメディアで手話通訳者や聴覚障がいの方を取り上げるべきではないのかと考える。もちろんこれらだけでは解決しない。今後、手話通訳者を増やすために、聴覚障がいの方が活躍できる場を増やすために、一人一人がこれらのことに向き合い、どうすべきか考えることが課題になると考える。

4．参考文献

内閣府　「障害者基本法（昭和四十五年五月二十一日法律第八十四号）」https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kihonhou/s45-84.html　最終閲覧日：2019年10月18日

一般財団法人全日本ろうあ連盟（2016）「手話でGO²！」https://www.jfd.or.jp/info/misc/sgh/20161219-sgh-shuwadego2.pdf　最終閲覧日：2019年10月18日

氏　名	松岡来夢	学籍番号	P016036	ゼミ№	13
テーマ	「発達障害者への理解と支援」				

1.問題意識

近年、大人の発達障害という言葉が広がり、幼少期には見過ごされてきた人でも、大人になってから発達障害と診断されたという人もいる。発達障害について取り扱ったドラマや書籍などにより、発達障害というものは特定の限られた人にだけ関係があるものではなく、現代の社会においては身近なものとなっている。しかし、発達障害という言葉が広がっていく一方で、その家族や周囲の人からの理解は得られることはなく、発達障害者に対する支援というものは依然として不十分であると筆者は考えている。現代の社会のなかで、発達障害という言葉を耳にすることが多くなった上で、なぜ未だに発達障害に対する理解が不十分なままなのかということを踏まえ、発達障害者に対する適切な関わり方について考えていきたい。

2.目的・研究方法

上述した問題意識のなかで本研究では、発達障害という言葉を多く耳にするようになった一方で、なぜ発達障害に対しての理解が得られないのかという背景を明らかにしていく。研究方法としては関連のある先行研究、書籍を活用し、場合によってはウェブ情報を参考にして検討していく。

3.考察・結論

近年では以前は見過ごされてきたような軽い特性のもつ人も受診するようになったことにより、発達障害と診断される割合が増加している。私たちにとって身近なこととなりつつあることから、もはや他人事ではないと言えるだろう。その一方で発達障害は身体障害とは異なり、一目では障害であると見抜くのは困難である。違和感をおぼえたとしても、周囲からはその人の持つ性格や個性、努力不足だと片づけられる。こういった間違った認識は偏見や孤立感を生み、さらに理解から遠いものへとなっていってしまう。正しい知識があれば本人の苦しみを感じることができ、理解をすることができる。このことからわかるように、適切な関わりをするためには知識が必要であると言えるだろう。障害というものはどこかタブーであり触れないようにされている。それがかえって、障害を持つ本人と家族にとっては理解のされないことによる孤独や孤立を、周囲には偏見や誤解そして無関心を生んでいるとも考えられる。障害のマイナスだけではなくプラスな面にも目を向けることで受け入れ、理解することが支援の一歩であると言える。

氏　名	豊田　奈々夏	学籍番号	P016502	ゼミ№	13
テーマ	児童虐待の現状から考える防止策と親への支援について				

平成 29 年度の全国児童相談所における児童虐待相談対応件数は、福祉行政報告例によると、13 万 3,778 件と、過去最多であり、統計を取り始めた 1990 年度から 27 年連続で増加している。虐待の内容別では、心理的虐待が 7 万 2,197 件と最も多く、次いで身体的虐待が 3 万 3,223 件、ネグレクトが 2 万 6,818 件、性的虐待が 1,540 件となっている。虐待者別では、実母が 57.3%と最も多く、次いで実父が 29.0%となっている。また、児童虐待による子どもの死亡件数も増加している。そこで、日本の児童虐待の現状について調べ、児童虐待が起こる原因について知りたい。また、日本の児童虐待の防止策や他国での児童虐待防止の取り組みから、今後、虐待を減らすためにはどのような防止策が必要か考える。そして、子どもを虐待してしまう親に必要な支援策について考えていく。

子どもの虐待が起こる背景は多くの場合一つではなく身体的、精神的、社会的、経済的などの要因のいくつかが複雑に絡み合い、その結果として生じるのが子ども虐待と考えられる。少子化や核家族化あるいはコミュニティの崩壊、経済不況などが生きづらさの現れとして語られており、特別な家族の問題という認識で取り組むのではなく、どの家庭にも起こりうるものとして捉えられるようになっている。これらのことを踏まえ、児童虐待は早期予防・早期発見が重要であるとわかった。

虐待を減らすために必要な防止策は、少しでも異変を感じたら児童相談所に連絡し、一人で抱え込むのではなく、相談する。また、出産前に児童虐待を予防することもできると考える。妊娠したが、いろいろな不安を抱えている人は、「妊娠ＳＯＳ」という電話相談を利用することができる。また、心の準備ができていないのに思いがけず妊娠してしまった場合や、妊娠したことをパートナーや親が受け入れてくれない、自分自身が妊娠を受け入れられない、妊娠中や出産後への悩みや不安など、話しをすることで解決のヒントを得ることができる。親に必要な支援では、グループケアの方法がある。グループケアは、自己肯定感の回復・孤立感の解消・安心感と癒しの場であり、育児ストレスの軽減に繋がる・ストレスコントロールが出来るようになる、虐待を終止することができる・こころの傷が癒され、虐待の原因や理由が整理される・虐待のメカニズムが確認できるなどの成果が見られた。グループケアを行っている地域は限られているため、参加したくてもできない人も多い。誰でも参加できるように施設や市町村での取り組みを促すことが必要である。同じような悩みを抱えている親との出会いを通して、徐々に不安や孤独感がなくなり、虐待防止へと繋がると考える。このような取り組みをもっと増やしていくことが必要であると考える。

氏　名	鵜篭　愛	学籍番号	P016008	ゼミ№	14
テーマ	「高齢者の孤独死を防ぐための支援」				

内閣府の『平成30年版高齢社会白書』によると、我が国の高齢化率は2017年度時点で27.7%である。我が国においては、平均寿命が延びたことや出生数の減少などの影響により、1970年に高齢化社会、1994年に高齢社会、そして2007年に超高齢社会に突入した。内閣府の『平成22年国民生活基礎調査』によると、65歳以上の高齢者のいる世帯のうち、約24.2%が単独世帯であるという。65歳以上の一人暮らしを行っている高齢者の増加は男女共に顕著であり、一人暮らしを行う高齢者が増加する中で、現在の我が国では孤独死が大きな課題として取り上げられている。総務省の平成25年に出典された「人口推計」によると2060年には総人口が9000万人を割り込み、高齢化率は40%近い水準になると推測されているという。孤独死がこのまま解決されず今後も長期的に起こるのであれば、日本の将来に大きな影響を及ぼす。以上の問題意識のもとで、孤独死を防ぐために一人暮らしを行う高齢者の生活状況や環境、孤独に陥る要因を追究し、地域などから孤立している高齢者を社会に再包摂するために本稿では文献調査を行い、現在の我が国の状況を整理した上で孤独死の背景や原因を追究し、対策を考察した。孤独死の要因として、一人暮らし高齢者の増加、親族や地域とのコミュニケーションの希薄化による社会的孤立などが考えられ、孤独に陥る環境として従来の女性は育児、男性は仕事をするという生き方に対する考え方や生活スタイルの多様化による未婚化や晩婚化の増加、核家族化による家族形態の変化、地域との関わりの変化などが挙げられる。

多種多様な生き方ができる時代になるにつれて人々の関りの希薄化が課題として浮かび上がった。

以上のことから孤独死を防ぐためには社会的孤立を防ぐということが必要であり、家族や地域などのコミュニティの構築や各専門機関との連携による対策が重要となってくると言える。

氏　名	木下　未久	学籍番号	P016011	ゼミNo.	14
テーマ	「日本の成年後見制度の在り方ードイツの世話法と比較して」				

本研究では、日本に先行する形ですでに成年後見制度が定着しているドイツを研究対象とし、日本とドイツそれぞれの成年後見制度について比較した。

ドイツの世話法は、介護保険と結びつけられる形で 1992 年に施行された。この成年後見制度は、必要性の原則と補充性の原則に立脚した世話という福祉的な身上監護を主眼にした法定後見制度に組み替えたものであり、その特徴は任意後見制度の重視、身上監護事項の重視、支援組織を法的に整備したことなどにある。このような状況のもとでの成年後見制度の利用は任意後見制度を中心に増加し、広く社会に定着しつつある。日本の成年後見制度はドイツの世話法などを参考に制定された（シェラー・アンドレアス 2011）。日本では人口約 1 億 2,600 万人に対し成年後見制度利用者が約 16 万人であるのに対し、ドイツでは人口約 8,200 万人に対し世話人利用者が約 120 万人と日本の約 8 倍となっている。今後も高齢化の進行が予想される日本においては、認知症高齢者の増加によって成年後見制度が必要となる者も増えていくと考えられる。日本でも現在も取り組みはされているが、より民間、行政、司法の各機関が三位一体となって成年後見制度を推進するための支援組織を法的に整備することも課題である。また、みずほ情報総研が実施した調査において、成年後見制度を知っているが利用するつもりはないという割合が高いことが分かった。成年後見制度に対して良いイメージがないのか、どうして利用するつもりがないのかを明らかにし、どのようにすればそのような人たちも利用することができるのかも検討していく必要があると考える。成年後見制度は判断能力が十分でない者が安心して社会生活を送ることができるようにするための制度であるため、今ある課題を克服し、より良い制度になると、判断能力が十分でない者も豊かな生活が送れるのではないかと考える。

氏　名	中澤　穂奈美	学籍番号	P016026	ゼミNo.	14
テーマ	「学力と貧困の関係」				

「貧困」は世界規模で取り上げられてきた課題であり、その対策は歴史的・文化的背景に応じて各国でさまざまな形を取っている。ユニセフが発表している貧困の定義は、1日1.25ドル未満で暮らす人の比率であり、貧困には必要最低限の生活水準が満たされていない状態の「絶対的貧困」と、ある地域社会の大多数よりも貧しい状態の「相対的貧困」があるとされている。当然のことながら、先進国である日本においても貧困に関する課題は生じており、決して他人事ではなく我々にとっても身近な問題なのである。特に、児童・生徒における貧困問題は非常に深刻であり、阿部（2014）によると、子どもの相対的貧困率は2009年時点で15.7%であり、6～7人に1人の子どもが貧困状態にあるとされている。日本の今後を担っていく役割をもつ子どもたちが貧困に直面しているという問題は、一刻も早い解決が求められている課題のひとつである。また、先の阿部（2014）でも指摘されている通り、貧困は連鎖していく傾向にあり、次の世代へと引き継がれていくのを防ぐためにも早急な解決が迫られている。

日本国憲法第26条で保障されている通り、すべての国民は教育を受ける権利及び教育を受けさせる義務を有しているはずであり、児童・生徒にとっては、勉強をすることや人との関わりを学ぶ重要な時期である。そのような時期を、児童・生徒たちが貧困問題を抱えながら過ごすということには、どのような背景があり、子どもたちの今後にどのように影響するのかということを改めて考えていく必要があるのではないか。

子どもたちが貧困にさらされているという現状は非常に深刻であると言える。貧困問題は、世界のどこかの国が抱える問題と考えるのではなく、国をあげて真剣に向き合い、課題の解決に向けて取り組まなければならないと考える。

氏　名	仙波　沙輝子	学籍番号	P016020	ゼミNo.	15
テーマ	女子大学生における化粧関心が対自的効果に及ぼす影響について ― 化粧行為別にみた検討 ―				

1. 研究目的

化粧の効果のひとつである対自的効果は、「自己愛撫の快感」「変身願望の充足」「創造の楽しみ」「ストレス解消」「快い緊張感」の 5 つが確認されている。近年では、この対自的効果への意識や、対自的効果を目的として化粧をする人が増加傾向にある（山本・加藤, 1991)。よって本研究では、既に多く存在する「化粧が対人印象に及ぼす影響」といった対人的効果に焦点を当てるのではなく、化粧の対自的効果に焦点を当てる。本研究の目的は、女子大学生を対象とし、化粧関心が対自的効果に及ぼす影響について検討することとする。またここでは、「ファンデーションを塗ること」といった化粧行為に対する関心について化粧関心と呼ぶ。

2. 方法

愛媛県内の 2 つの大学と、短期大学の女子大学生を対象とし、質問紙調査を実施した。251 名を分析対象とし、平均年齢は 19.42 歳(SD= 0.71)であった。現代に適した種類の化粧行為に対する化粧関心を知るため、平松・牛田(2003)が作成した 26 項目で構成される化粧関心尺度を使用した。また、対自的効果を測定するため、加藤・石原・大木(2010)が作成した化粧認知尺度を使用した。

3. 結果

対自的効果を測定する 9 つの化粧認知項目を目的変数、化粧関心項目を説明変数とし、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。対自的効果に最も多く影響を与えた化粧関心項目は「髪をスタイリングすること」であり、「自己愛撫の快感」「創造の楽しみ」「ストレス解消」に対応する 7 つの化粧認知項目を目的変数としたときに影響を与えていた。次に多くの項目に影響を与えた化粧関心項目は「マニキュア/スカルプチュアをすること」であり、「変身願望の充足」「創造の楽しみ」「ストレス解消」に対応する 5 つの化粧認知項目を目的変数としたときに影響を与えていた。

4. 考察

この 2 つの説明変数が採用された要因は、調査対象者が女子大学生であるため、経済的な負担が大きい化粧行為、非可逆性・持続性があり就職活動等に影響する化粧行為は関心が持たれづらいためと考察する。本研究では、標準偏回帰係数や自由度調節済み決定係数を見ると、全体的に説明率の低い結果といえた。そのため、「髪をスタイリングすること」「マニキュア/スカルプチュアをすること」のみが化粧関心として対自的効果に影響するとは断言しがたい。本研究の結果を踏まえ、さらに厳密に化粧関心が対自的効果へ与える影響を調査するためには、非可逆性のある化粧関心項目や、調査対象者の所属や年齢の範囲の影響を考え、決定する必要があるといえるだろう。

氏　名	竹田　智子	学籍番号	P016021	ゼミNo.	15
テーマ	現場実習におけるリアリティショックについて				

1、現場実習の意義

社会福祉士や介護福祉士、保育士や幼稚園教諭、教師などを目指そうとすると、必ず現場実習というものが必須となってくる。学生は現場実習に行くことで、その仕事の現場や職場環境、強いては社会を知り学んでいく。今まで机上で学んできたことが実際の現場でどのように役に立つのか、また、現場でしか分からないことを体験し、学んでいくことが大きな課題となっていく。

2、実習に対する感情と現実とのギャップ

田中（2008）の研究によると、現場実習に臨んだ学生は大学での学びと現実との間にギャップを感じ、戸惑いや不安を覚えることが多いと述べている。この戸惑いや不安という気持ちは実習前に自分が抱いていた現場実習での予測と、実習中に経験した現実との差であり、いわゆるギャップというものである。このギャップによってショックを感じることをリアリティショックと呼ぶと児玉（2016）は述べている。

目的：本研究では現場実習において起きてしまったリアリティショックをどのように対処することで上手く活用することができるのかを検討する。

3、現場実習におけるリアリティショック研究

児玉（2016）――実習前に抱いていた予測と実習中に経験した現実とのギャップによりショックを感じること。田中（2008）――回避するのではなく、現実をどう受け止め、そこから出発した学びを活かし、十分に向き合っていくこと。伊藤（2007）――ショックを受けないようにするのではなくどう噛み砕き活用するか。という以上のような大きな括りでの共通点が見られた。

4、リアリティショックを現場実習に活かしていくには

現場実習におけるリアリティショックは決してマイナスなものではない。感情的にはマイナスな要因であったりネガティブなものであったりしても、そのマイナスをありのまま受け止めることで課題に向き合っていこうとする姿勢や態度に変化が見られ、どのように課題を克服していこうとしていくのかという気持ちの切り換えが起こり、リアリティショックを１つのきっかけにしてプラスの要因となる新しい何かが起きようとしているのだ。

リアリティショックが起きた時にはその時を良い機会とし、得ることのできる貴重な学びとして捉え、うまく活かしていくことでリアリティショックに対する対処法がわかるのではないか。そして、これから先の実習ではどのようにして考え方や気持ちをプラス思考やポジティブに切り替えていくのかを身につけていくことが大切になってくるのではないだろうか。

氏　名	西岡唯侑	学籍番号	P016028	ゼミ№.	15
テーマ	日常生活スキルがプライベート空間機能の選択に与える影響				

【目的】<プライベート空間について>私たちは,日常生活で様々な空間を利用している。その中でもプライベートな性質を持つ空間を,「社会的な役割から離れて,他者の目を気にせずに自由に振る舞えることと泊・吉田(1999)は定義している。
<日常生活スキルについて>日常生活スキルとは,主に日常生活で問題や要求を適切に対処するためのスキルである。このスキルは,個人場面で展開される個人的スキルと対人場面で展開される対人的なスキルがある。本研究では,日常生活スキルがプライベート空間機能の選択に与える影響について検討していく。その際に 1.個人的スキルは,他者の存在を必要としない「専有空間」機能の選択に影響を及ぼす 2.対人的なスキルは,他者との関わりがある「共有空間」「解放空間」機能の選択に影響を与えるという仮説を立てた上で検討する。

【方法】愛媛県在住の女子大学生 214 名(19.8 歳,*SD*=3.36)に質問紙調査を実施した。プライベート空間の機能を測定するために泊(2000)のプライベート空間機能尺度と効果的に日常生活を過ごすための必要なスキルを測るため,島本・石井(2016)の日常生活スキル尺度を採用した。

【結果】パス解析を行ったところ,個人的スキルは,「専有空間」の機能との間に有意な正のパスがみられ,「計画性」スキルから「集中できる時間や空間」(β＝.22, p<.001),「自尊心」スキルから「休息できる時間や空間」(β=.31, p<.001)となった。対人スキルである「親和性」スキルと「リーダーシップ」スキルは,「解放空間」の機能である「別の自己を表現できる空間」との間にそれぞれ有意な正のパスがみられた(β=.26,β=.29, p<.001)。また,「親和性」スキルは,「共有空間」の機能である「親しい人と共有する時間や空間」と「解放空間」の機能である「気分転換できる空間」との間にも有意なパスがみられた。(β=.55,β=.24, p<.001)。

【考察】結果としては,1.の仮説は一部支持され,2.の仮説も支持された。結果をもとに考察すると,個人的スキルは 1 人で考え事に集中する,心身のケアを行うといった行動をとる可能性が挙げられた。そのため,他者の存在を必要としない「専有空間」の機能の選択に影響を与えると考えられる。一方で対人的なスキルは,友人とのコミュニケーションや友人からのソーシャルサポートを受けることで「共有空間」と「解放空間」の機能の選択に影響を与えたと示唆される。本研究では,大学生の日常生活スキルを個人的スキルと対人的スキルに分けて,それぞれのプライベート空間機能の選択に与える影響について検討した。その結果,個人的スキル,対人的スキルがプライベート空間機能の選択に与える影響は異なると考えられる。そのため,日常生活スキルの中でも,それぞれのスキルの種類よってプライベート空間機能の選択に影響すると示唆される。

氏　名	堀家　萌花	学籍番号	P016033	ゼミNo.	15
テーマ	テレビゲーム中におけるフロー状態 ―熟達度による検討―				

【目的】フロー(flow)とは,ある行為に対して,明確なルールが定められており,自我を忘れた状態でその行為のみに集中することである。また,生活に意味づけと楽しさを与える強い没入経験を表現する概念である（Csiksezentmihalyi,1975 今村訳 2000)。フロー状態はスポーツや作曲家などのインタビューから構成されているため,テレビゲームにも適正があるかを検討する。フロー状態の 9 つの特徴として「行為と意識の融合」,「明確な目標」,「注意集中」,「時間感覚の変化」,「自意識の喪失」,「コントロール感」,「明確なフィードバック」,「自己目的的な性質」,「挑戦と技能のバランス」が挙げられる。これらの特徴は複雑に結びついている。特に「挑戦と技能のバランス」では,技能が高ければ退屈だと感じ,低ければ不安になりやすい。そこで本研究では,テレビゲーム中における熟達度合いによってフロー状態に違いがあるのかを検討する。また,行為の熟達度によってフロー状態の様相が異なる可能性が考えられるため,熟練度による検討も併せて行う。

【方法】愛媛県内に在学する女子大学生 33 名を対象に実験を行った。実験刺激は任天堂が開発したアクションレースソフトの MARIOKART DS(マリオカート DS)を用いた。実験器具は,同じく任天堂の携帯型ゲーム機 newNINTENDO3DSLL を使用した。実験では,2 つのコースを練習し,その後本番で固定したコースを 4 つプレイするよう指示した。質問紙は,フロー状態を測定するため川端・張本(2000)の Flow State Scale(日本語版)の尺度を採用した。

【結果】本研究では,熟達度を以下の通りに定義した。高群：本実験で使用する DS のソフトでグランプリのモードを 100 cc(中級)以上プレイしたことがある人,中群：友人などと通信プレイ(対戦)をした人。又 1 回以上プレイしたことがある人,低群：本実験でプレイするまでプレイしたことがない人とした。熟達度×フロー状態因子による 2 要因混合計画の分散分析を行ったところ,フロー状態因子のみ主効果の有意差が見られた($F(8,24)=15.03$, $p< .01$)。有意差が見られた因子の中で「明確な目標」と「注意集中」,「自己目的的な性質」は平均得点が高かく,「コントロール感」と「挑戦と技能のバランス」が有意に低かった（$p<.05$)。

【考察】分散分析の結果から,全体の得点から見るとフロー状態は低かったが,「明確な目標」と「注意集中」,「自己目的的な性質」は高かった。よって,本実験で使用したアクションレースゲームというジャンルの特徴によって,この 3 つの因子が強く表れることが可能性として示唆された。一方で,熟達度による違いは見られなかった。熟達度の設定においては課題を残した。採用したゲームの性質上検討することが困難であった。したがって,今後は熟達度の統制を考慮した検討が望まれる。

氏　名	永見　紗也佳	学籍番号	P016503	ゼミNo.	15
テーマ	アニメの登場人物への印象形成に影響を及ぼす要因について ―ヘアースタイルに着目して―				

【目的】日常において初対面や交際日数の少ない相手と接する際に、鼻が高い、目の大きさが小さいなどの身体的特徴から相手を観察する。その際に、実際には目に映ることのない優しそうだ、真面目そうだといった性格も推測していることが多い。このように相手の身体的特徴を手がかりとして、その相手の全体的な性格を推測することを印象形成という。そこで本研究では刺激人物(stimulus person、以下 SP とする)として、アニメの登場人物を用いる。その理由として、アニメの登場人物の場合だと現実とは違った印象形成がされる可能性があるからである。また髪色と髪型を独立変数として設定する。これは、髪型と髪色の違いで印象が変化する可能性が示唆されるためである。よって本研究では、SP にはアニメの登場人物を用いて髪色と髪型による印象形成を検討することを目的とする。

【方法】愛媛県内に在住する女子大生 54 名を対象に実験を実施した。提示刺激は Miku Miku Dance Ver.9.31 と PmxEditor Ver.0.2.5.4 を用いて作成した。調査用紙は大橋・三輪・平林・長戸(1973)の研究で決定された、顔写真を用いて印象形成の過程を分析する際に有効であるとされる 20 項目で構成される評定尺度を用いた。

【結果】最初に印象評定尺度の因子分析を行った。その結果、“とっつきやすさ”“行動力”　“統率力”の 3 つの因子が抽出された。また SP のクラスター分析の結果、3 つのクラスターが識別可能であった。さらに 3×3(クラスター×因子)の 2 要因分散分析を行った。その結果、因子とクラスターの交互作用は有意であった($F(4, 45)=5.74, p<.01$)。クラスターに関する主効果の検定では、0.1%水準で有意であった($F(2, 2)=18.00, p<.01$)。とっつきやすさに関する評定では、とっつきやすさの単純主効果が有意であった($F(2, 2)=10.78, p<.05$)。有意な交互作用について Bonferroni 法により多重比較の検定を行った。その結果、第一クラスターと第二クラスター、第三クラスターと第二クラスター間で有意な差があった($F(2, 2)=0.20, p<.05$)。行動力に関する評定では、行動力の主効果が有意であった($F(2, 2)=18.38, p<.05$)。有意な交互作用について Bonferroni 法により多重比較の検定を行った結果、第一クラスターと第三クラスター、第一クラスターと第二クラスター間で有意な差があった($F(2, 2)=0.20, p<.05$)。

【考察】以下、アニメの登場人物の髪型と髪色が、印象形成に影響を及ぼす要因について考察する。髪が長いキャラクターはとっつきやすさが低く、短髪の男性キャラクターは、行動力、統率力、とっつきやすさ共に抽象的な印象を持つという結果が得られた。また今回採用した SP では、髪色による影響の差は見られなかった。これはアニメの場合、他に現実ではあまり見られない髪色を持ったキャラクターが存在するため、本研究では結果に差が見られなかったという可能性が示唆される。

氏　名	阿河　麻衣子	学籍番号	P016002	ゼミNo.	16
テーマ	現代社会における社会的排除の現状と対策				

高齢者、子育て中の親、障害者、介護者、ひきこもりなど現代の日本社会において社会的に孤立している人が存在し、問題は深刻化している。現代では、多様な排除が存在し、東日本大震災の頃より、絆、人や社会とのつながりが一層重要視されている。孤立による事件があとを絶たず、人々の関心が高まっている。本論文では、現代社会の深刻な人間関係の貧困や孤立して社会的に排除されている人々の現状と課題について明らかにし、その対策について考察した。

第 1 章では、社会のつながりに不安を抱く人間関係の現状について論じた。石田（2018）の文献から、個人化社会からつながり格差が発生することがわかった。家族、職場、地域における人間関係は希薄化しており、多様な排除が存在していることが明らかになった。

第 2 章では、貧困や孤立について、シングルマザー、子ども、ホームレス、介護者、ひきこもりのそれぞれの現状について論じた。貧困は誰でも陥る可能性があり、人間関係の貧困は、孤立して社会的排除へとつながることが明らかになった。貧困の背景として、格差社会の構造や非正規雇用の労働問題などが挙げられる。見えない貧困が存在し、相対的貧困率は 50.8%と高く（2015 年）、シングルマザーの現状は厳しい。徐々に改善されているが、日本の社会保障制度では、貧困から抜け出せない人が多い。親の貧困は、子どもに連鎖し 7 人に 1 人の子どもが貧困であるといわれている（2015 年）。児童虐待をする親は、社会的孤立をしている場合が多い。子どもの貧困は、社会全体の問題であり、連鎖をくい止める必要がある。経済状況の悪化や様々なつながりの希薄化はホームレスを生み出す。ホームレスの人は高齢化しており、まず住まいを確保した上で、生活を支援することが必要である。親に依存する同居中年シングルは、介護離職により貧困となり、孤立し親子共倒れのリスクがある。ひきこもりは長期化、高齢化しており、「8050 問題」といわれている。ひきこもりの人は、中高年が最も多いことが明らかになった。

第 3 章では、上述のそれぞれに関して国や NPO の実施している対策について論じた。国は、法律に基づいた様々な公的支援を行っているが、まだ充実していない面がある。多様な要因から社会的排除が発生しているため、個別のサポートが必要である。自治体による格差も問題である。人にはつながり・居場所・役割が重要である。NPO では、公的制度のはざまにいる人にも寄り添った支援や居場所づくりをしており、活動が期待されている。

国や自治体、NPO などが連携して、情報を共有し孤立を防ぐきめ細かい継続した支援や環境づくりが、今後の課題である。また、一人ひとりが、偏見を持たず、社会的包摂の視点をもつことが求められる。

氏　名	東　郁実	学籍番号	p 016004	ゼミNo.	16
テーマ	フォントの違いによる認識スピードの変化とその要因				

[目的]私達は多くの活字に囲まれて生きている。また様々な場面に応じて,様々なフォントが生まれている。フォントは接触回数によって反応時間に違いがみられる。また，1度でも接触することで,学習効果が見られ,フォントの違いによる反応速度の差は小さくなることが分かっている。本研究では比較的接触回数が高いと思われるフォントの違いによってどの程度認識スピード,誤回答に差は生まれるのか,また,年齢層,性別,ケータイの使用時間,新聞や書籍などの読書時間によって違いは生まれるのか,それらの要因を考察する。

[方法]実験参加者は，日本語を母国語とし,読み書きに不自由のない日本に住む20代の男女180人（男性90人,女性90人）と60代以上の男女22人（男性5人,女性17人）であった。20代の平均年齢は20.93歳（*SD=1.12*），60代以上の平均年齢は70.86歳（*SD=7.07*），全体の平均年齢は25.12歳（*SD=14.04*）であった。実験参加者に,「MS ゴシック」「MS 明朝」「メイリオ体」の3種類のフォントの順を入れ替えた6種類の問題に答えてもらい，それぞれの認識スピードを計測した。終了後,「SNSの使用時間」,「書籍などの読書時間」の2項目についての質問を行った。

[結果]回答順序と性別との間,また，フォントの違いと性別との間において,差が見られなかったため,ケータイの使用時間や書籍などの読書時間による影響は見られないと判断し,分析は行われなかった。回答順序による慣れの効果は大きく見られた。しかし,2回目の認識スピードと3回目の認識スピードの間では有意差は見られなかった。年齢の違い,回答順序において認識スピードに違いはみられた。しかし，フォントの違いにおいては分散分析では有意差が見られなかった。ミスの回数に関しては,フォントと年齢の間に差はなかったものの,それぞれ単体では有意差が見られた。また,回答順序に関しては,ミスとの間に有意差が見られた。

[考察]今回は試行回数の少なさゆえ1回目と2回目，1回目と3回目の間にしか有意差が見られなかった。また，慣れの効果は，フォントを変えるとその刺激により,2回目以降は消されることも示唆される。1度でも学習していれば,たとえ,接触回数に差があったとしても認識スピードには差は生まれない。年齢が高くなるほど認識スピードは衰えることも実験で示唆された。「メイリオ体」「MS ゴシック」「MS 明朝」中で最も見やすさに長ける「メイリオ体」はミスをしづらいが，全体的にミスの回数が多かったのは根本的に，見落としなどの視覚的問題があるのではないかと示唆される。「メイリオ体」はミスの回数も少なかったが，分散分析では，「メイリオ体」が「見やすい」ことを実証する結果は得られなかった。

氏　名	佐々木麻由	学籍番号	P016016	ゼミNo.	16
テーマ	愛媛県における過疎地域の現状と課題～久万高原町を事例として～				

日本では人口減少、少子高齢化が進み、地域格差も拡大している。特に、過疎化が急速に進む地方での地域創生が急がれている。

本論文では、愛媛県の地域格差の現状、並びに、過疎地域における現状と課題について、久万高原町を事例に取り上げ、論じた。

第 1 章では、愛媛県における地域格差の現状について論じた。

1 節では、人口減少と少子高齢化について論じた。1985 年から 2015 年の間で人口減少率が極めて高い町は上島町、久万高原町、伊方町であり、これらの町では、少子高齢化が特に急速に進んでいる。

2 節では、就業構造と財政状況について論じた。久万高原町や伊方町では 65 歳以上の就業者の割合が極めて高い。産業構造別の就業者の割合では、第一次産業の割合は南予地方と久万高原町で高い。第一次産業が盛んな地域では財政力指数が全般的に低く、財源の確保が極めて厳しい。

3 節では、社会インフラについて論じた。小・中学校数に対する児童・生徒数は、久万高原町、上島町、松野町が特に少なく、今後学校の維持が難しくなる可能性がある。これらの町は、医療施設数、福祉施設数も他の市町と比べると少ない。

以上から、人口減少・少子高齢化が急速に進んでいる地域では、財政状況や社会インフラが他の地域より厳しい状況に置かれていることがわかった。

第 2 章では、久万高原町を事例として、人口減少対策や地域活性化対策における取り組みや課題について論じた。

1 節では、定住人口の増加に向けた取り組みについて論じた。農業の担い手を増やすための取り組みや子育て環境づくり、空き家への取り組みがなされている。久万高原町の移住者へのインタビューからは、「地域の人とのコミュニケーション」が移住を成功させるうえで特に重要であることがうかがえた。

2 節では、交流人口の増加に向けた取り組みについて論じた。交流人口を増やすための取り組みとして、「道の駅」では、特産品の販売や魅力の発信、観光情報の発信を行なっている。また、各種のイベントを開催することで、1 年を通して交流人口の増進を図っている。

3 節では、久万高原町の取り組みにおける今後の課題について論じた。今後の課題として、地域の人々と移住者とをつなぐサポート体制の強化や「多業化」に向けた取り組み、空き家の所有者に対する理解の促進・サポート、若い世代に向けてのアピールや情報発信、「関係人口」の増加に向けた取り組みなどが考えられる。

こうした取り組みを行うことで、久万高原町をさらに活性化させ、同町での暮らしを持続可能なものにすることができるのではないだろうか。

氏　名	西川　真由	学籍番号	p 016029	ゼミ№	16
テーマ	時代とともに移り行く音楽 1960 年代～現代まで				

音楽は、子供から大人まで愛されている芸術文化である。

本論文では、1960 年代～2000 年代のポピュラー音楽とその時代背景について論じた。

第 1 章では 1960 年代～1970 年代のポピュラー音楽とその時代背景について論じた。1960 年代は学生運動が盛んな「政治の時代」である。政治的なメッセージを込めたフォークソングが流行した。一方で政治的なメッセージを込めていない曲を歌うはっぴぃえんどが現れた。1970 年代は、「四畳半フォーク」をはじめとするドメスティック音楽が流行った。四畳半フォークを代表する歌手は南こうせつと吉田拓郎である。時代背景としては、連合赤軍事件を経て、第 1 次オイルショックが起きた。また、テクノロジーの技術が進化してきて、演奏技術だけでなく録音技術も重視されるようになった。この時期にはカラーテレビ受像機が本格的に普及し、日本レコード大賞、日本歌謡大賞、NHK の「紅白歌合戦」が年末の 3 大イベントとなり、視聴率を高く上げた。この時期にデビューした歌手は、郷ひろみ、松任谷由実、サザンオールスターズ、YMO などである。そして 1971 年は「アイドル元年」と呼ばれ、その時期に「スター誕生」というプロ歌手を目指すコンテスト番組で森昌子、桜田淳子、山口百恵をはじめ、岩崎宏美、伊藤咲子などの多くのアイドル歌手が誕生した。

第 2 章では 1980 年代～1990 年代のポピュラー音楽とその時代背景について論じた。1980 年代は、昭和から平成になった時代である。JPOP が誕生したり、小室哲哉によって、社会全体が暗くなっていく中でも CD が生産され、売れた。この時にデビューした代表的な歌手は、松田聖子、中森明菜、小泉今日子などである。この時代に YMO に代表される「テクノポップ」という言葉が生まれた。1990 年代は日本のバブル景気の時代が終わり、長い長い景気後退の時代である。そして、1990 年代半ばになると JPOP という言葉が定着するようになった。この時に活躍した代表的な歌手は安室奈美恵、宇多田ヒカル、モーニング娘などである。

第 3 章では 2000 年代のポピュラー音楽とその時代背景について論じた。2000 年代はボーカル加工のソフトウェアによって、声の加工処理ができるようになった時代である。この時にデビューしたアーティストと歌手は capsule、perfume、きゃりーぱみゅぱみゅなどである。

時代の変化やテクノロジーの発達とともに音楽は様々な変化を遂げてきた。

氏　名	松岡瑛奈	学籍番号	P016035	ゼミNo.	16
テーマ	愛媛県における「伝統的工芸品」―砥部焼の事例から―				

日本には、長年に渡って受け継がれてきた工芸品があり、そのいくつかは「伝統的工芸品」として登録されている。これらは、自然の恵みを素材に手作業で製作されている。しかし、資材の枯渇の問題や安価な大量生産の商品が増え伝統的工芸品産業が衰退している問題に直面している。また、生産の減少に伴って後継者も減少している。

本論文では、「伝統的工芸品」が抱える問題として技能継承・マーケティング・法律の観点から見ていった。第1章では、「伝統的工芸品」の現状について述べた。1節では、「伝統的工芸品」の定義や認定数について述べ、「伝統的工芸品」として認定してもらうための条件について説明した。2節では、伝統的工芸品産業全体が抱える問題として、需要の低迷、量産化が出来ないこと、人材・後継者の不足、生産基盤（原材料/生産用具）の減衰・深刻化、ライフスタイル・価値観の変化と情報不足を挙げた。また、マーケティングの観点からは、知名度の低迷、安価な陶磁器などが増え「伝統的工芸品」の売上が減少したこと、陶磁器のブランド力の低下が指摘された。法律の観点からは、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」が現状に一致しているかどうか検証していかなくてはならないことが分かった。

第2章では、砥部焼について述べた。1節では、砥部焼の歴史を説明した。2節では、砥部焼の製造過程を述べた。また、砥部焼が抱える問題を解決するために砥部町が実施している対策や活動について紹介した。3節では、現地調査を行った。陶彩窯・五松園窯・梅山窯の三つの窯元について、それぞれが直面している現状と課題について述べた。小規模な家族経営の窯元が殆どであることが分かった。梅山窯のように従業員が40名いる窯元は珍しい。窯元ごとに製造方法やデザインにこだわりがあり、古砥部文様といった昔ながらの模様を大事にしながら新しいものにも挑戦していることも分かった。後継者不足に対して深刻な思いはあるが解決することが難しい状態であることもうかがえた。一方、伝統的工芸品産業全体が抱える資源の不足に関しては、あまり問題視しておらず、むしろ、資源を採掘する業者の数の減少が深刻な問題になっていることが明らかになった。国内外に砥部焼に対する認知を広めていく活動を積極的にしていかなくてはならないことも分かった。

「伝統的工芸品」は伝統文化を後世に伝えていくために重要な物である。消費者である私たちは、伝統的工芸品産業全体が抱えている問題を他人事とは思わず、一人一人が後世に伝えていくために「伝統的工芸品」に対してのネガティブなイメージをポジティブなイメージに変える努力をしなくてはならない。

氏　名	趙　心語	学籍番号	P016504	ゼミ№	16
テーマ	アメリカ社会におけるアジア人のイメージ —映画の分析を通して—				

サイードは、ヨーロッパの様々なテキストを研究したうえで、東洋（オリエント）を支配し再構成し威圧するための西洋（オクシデント）の様式、即ち「オリエンタリズム」を唱えた。本論文は、オリエンタリズムの考えを踏まえ、アメリカ社会におけるアジア人のイメージとその変遷を論じた。

第一章では、アメリカ社会におけるアジア人移民の歴史を振り返った。ゴールドラッシュをきっかけとして、アジア人が大量にアメリカに移住し始めた。大量のアジア移民は、アメリカにおける人種間の衝突を激化させた。そして、「黄禍論」がアメリカで広まっていった。

第二章では、20世紀初頭の三つのアメリカの映画を取り上げ、当時のアメリカにおける東洋人のイメージを論じた。「チート」では、アメリカ社会で成功した東洋人であるトリは、東洋と西洋の境界を侵す矛盾した「悪」として描かれた。「散り行く花」では、「優しい」中国人チェンは虐待された白人少女を助けようと思ったが、結局は、野蛮な手段を通してその少女の父を殺した。境界を侵す「悪」、あるいは、「野蛮」な者である東洋人（アジア人）は、アメリカ社会では受け入れられない存在であった。「蝶々夫人」では、「非人間性」を象徴する東洋人女性の蝶々がピンカートンを強く信仰することによって（西洋の）「人間」に近づこうとする。しかし、それはかなわず、蝶々は自らを浄化（人間化）するために、自殺を選んだ。蝶々の自殺は当時の東洋と西洋の結合が不可能であることを示している。20世紀初頭のアメリカ映画では、東洋人は「アメリカ人」から排除された者として扱われ、東洋と西洋の対立をきわだたせていた。

第三章では、2008年のアメリカ映画「グラン・トリノ」の分析を通して、グローバル化が進んでいるアメリカの現代社会において、アジア人はどのようなイメージで描かれているのかを論じた。20世紀初頭の映画に見られるような東洋と西洋の対立関係はこの映画では見られない。西洋と東洋が互いに救済し合うことによって、白人の罪が浄化され、アジア人もついに「人間化」されアメリカ社会に受け入れられると言った構図が見られる。しかし、「人間化」されるのはアジア人の男性であり、アジア人女性は白人男性によって救済される者として扱われている。

近年のアジア諸国は目覚ましい発展を遂げてきた。その間、アメリカにおけるアジア系移民も増え続け、その政治的、経済的な影響力も大きくなっている。従って、「グラン・トリノ」で描かれたアジア（東洋）は20世紀初頭のアメリカ映画での「オリエンタル」から程遠くなった。一方で、アメリカ社会における人種間の力関係は複雑化したとはいえ、オリエンタリズムにおける力関係の構図を今日のアメリカ映画から垣間見ることもできる。

氏　名	小林　真由子	学籍番号	P016012	ゼミNo.	17
テーマ	SNSに依存していく若者たち				

近年、スマホは急激に普及し、人々の生活を豊かなものへと変化させた。しかし、その反面様々な問題を抱えている。そこで、本稿では利用者が多いであろう若者に焦点を当て、スマホ利用の現状やSNSコミュニケーションの特徴、背景について考察した。

第1章では、スマホの普及の様子や利用状況を示し、若者中心にSNSが普及し欠かせないコミュニケーション手段になっていることを明らかにした。第2章では、SNSの一般的な特徴を挙げ、特に若者の利用が多い主な4つのSNSの特徴について考察した。そこから共通する特徴として、“つながり”や「いいね」といった“リアクション機能”があることに注目し、「いいね」はSNS疲れとも関連していることを示した。

第3章では、若者が求める「いいね」機能に注目して考察した。「いいね」には友人間と不特定多数で違いがあることに注目し、友人間では相互承認や忖度が働き、不特定多数は本音と考えられているが、同調で「いいね」されることもあり危うさを含むものでもあることを示した。また、現在の若者が不特定多数の「いいね」を求めていることも論じた。

第4章では、若者が不特定多数からの「いいね」を求める背景を考察した。その背景には、人間関係の「選択的関係」への変化がある。しかし、その変化は人々を孤独に陥らせる可能性もある。それにより若者はつながりや他者から承認を得られる「いいね」を求めており、その根本には人々の承認欲求が関係している。最近の若者は自己肯定感の低さも抱えており、その自己肯定感を高めるためにも人々は「いいね」の数に固執していくのである。

以上のことから、若者がSNSに執着するのは、社会がもたらしたつながりの変容のなかで若者たちが抱えている問題や欲求を満たすためであることが明らかになった。人間関係の変化では、自由と引き換えに、「選ばれない」ことへの不安を生じさせ、確実的なつながりを持てなくなり、より多くのつながりや承認を求めるあまり、簡単につながりや承認を得られるSNSに依存するようになった。しかし、その承認というものは自分自身を肯定、承認してくれる安心感を得られるものではなく、他者に左右されるため、より多くの承認を求めるジレンマになり、いつまでたっても自己肯定感を高めることができない。そのため、他者からの評価や承認が数で目視できるSNSでも、本音での投稿よりも、他者からの承認が目的の投稿になったことで、SNSで得られる他者承認も若者に必要な自己承認につながることはないのである。それゆえ、本来若者が求めるものや抱える問題の根本を解消するものではない。

氏　名	西谷　明莉	学籍番号	P016031	ゼミNo.	17
テーマ	「若者の恋愛離れ」について				

近年、若者の恋愛離れという言葉がよく挙げられ、この若者の恋愛離れが問題視されている。そこで、本稿では、この「恋愛離れ」とは何か、本当に若者に恋愛離れが起きているのか、また、現在の若者の恋愛や結婚に対する価値観がどのように変容しているのかを考察した。

まず初めに、若者の恋愛離れの現状について統計資料から考察した。その結果、恋人のいる割合が減っていないことから、数値的に考えると若者の恋愛離れは起きていないと考えた。しかしながら、異性の友人がいると答えた割合が大きく減少した。また、近年の内閣府の意識調査では、恋人がほしくない理由として、自分のために時間を使いたい、恋愛が面倒であるという理由が挙がり、さらに、「恋愛はしたくないが結婚はしたい」と考えている若者も多いことが明らかになった。そのため、数値的には恋愛離れは起きていないが、恋愛に対する価値観から考えると恋愛離れが起きているのではないかと考察した。

そこで、恋愛と結婚についての考え方がどのように変化したかを考察した。すると、高度経済成長期以降に、「恋愛」、「性愛」、「結婚」を三位一体として捉えた、ロマンティック・ラブ・イデオロギーが実体的に普及した。その後90年代以降からは、「恋愛」を重要視したロマンティック・マリッジ・イデオロギーへと考え方が変わった。このロマンティック・マリッジ・イデオロギーは、「恋愛」と「結婚」が必ずしも繋がるわけではなく、「結婚」につながらない「恋愛」にも正当性があり、むしろ「結婚」をするならば、「恋愛」をしなければならないという考え方である。このようなイデオロギーが広まったことで、「結婚」にまで「恋愛」と同様のものが求められるようになった一方で、必ずしも「恋愛」が「結婚」に繋がらなくてもよいことから、「恋愛」がむしろ遊戯的となり自由度も拡大した。さらに、このイデオロギーは、特に若い女性に多く支持された。

第3章では、ロマンティック・マリッジ・イデオロギーが、特に若い女性に支持された背景としては、女性のライフサイクルの多様化が挙げられる。旧イデオロギーの考え方が主流であった頃の女性のライフサイクルと比較すると、平均初婚年齢や就業率、進学率が上昇した。そのため、旧イデオロギーに比べ新イデオロギーを支持する女性たちは、今まで女性の一大イベントとして捉えられていた恋愛や結婚以外に、社会人として社会に貢献することや、進学をして学ぶといったような選択肢が多く現れた。そのことによって、現在の恋愛とは、若い女性たちにとっては、かつての恋愛や結婚のように絶対的存在ではなく、恋愛をするかしないか自らで選択することができるようなオプション的存在に変化していったのではないかと考える。